

I 文学部百年によせて

地理学教室再建の頃のこと

織田 武雄

京都大学地理学教室は、戦時中、小牧實繁先生を中心に、卒業生の有志もこれに加わって、ナチス・ドイツの地政学に呼応したアジアの地政学の研究を行っていたが、昭和20年8月15日の敗戦を機に、京都大学の地理学教室からは教官の姿が消え、他の大学に奉職していた地政学の関係者の多くも辞職に追い込まれた。教官が不在となった京都大学地理学教室を続けるため、東洋史講座教授の宮崎市定先生が地理学講座教授を兼任し、かつて地理学教室の助手を務めていた吉田敬市氏が、教室の事務の一切を担当することになった。

その後、戦争中に応召されていた学生たちが続々と復学し、在学中の学生に加わったため、大学で学ぶ学生たちはきわめて多数に達した。そこで、文学部では、臨時措置として、一年のうちに二度、卒業論文審査のみをもって卒業を認めることとなった。宮崎先生は、地理学の他に、東洋史の卒業論文を多数抱えておられたため、地政学とは全く関係のなかった織田武雄（立命館大学文学部）が非常勤講師として、宮崎先生と一緒に卒業論文の審査を行うことになった。他方、吉田氏は、戦争以前より、人文科学研究所の依頼によって朝鮮の水産業の調査を行っていた。吉田氏は、この研究を学位論文としてまとめて京都大学に提出し、昭和29年5月に文学博士の称号を授与され、母校の長崎師範を中心に新設されたばかりの長崎大学学芸学部教授として同年6月に就任した。

昭和22年3月、文部省から地理学講座に専任者を置くよう要請があったため、織田が専任助教授に就任した（昭和25年11月、教授昇任）。そして昭和29年10月には、新卒業生の末尾至行が助手となり、さらに、昭和34年、大阪市立大学から水津一朗が助教授として招聘された（昭和

46年、教授昇任）。学内からは、教養部の藤岡謙二郎教授と西村睦男教授の他、人文科学研究所の森鹿三教授も地理学の講義を担当し、学生への教育は、よう



やく戦前の教室の状態にまで回復した。また、先に、地政学への関与によって失職した人たちも、米軍による占領が解けるとともに、教職に復帰した。昭和33年に60歳となられた小牧實繁先生の還暦祝賀には、地政学に関わらなかった卒業生たちも一堂に会し、このお祝いの会をもって、地理学教室は元の一体感を取り戻すことができた。

地理学教室からは大勢の学生たちが卒業していった。地政学との関わりから、一時は彼らの就職が懸念されることもあったが、戦後、社会科として人文地理学が採用されたことや、各地に多数の新制大学が開設されたこともあって、卒業生たちの就職は、案外に順調であった。一時は、名古屋、金沢、岡山、和歌山などの大学の地理学教室の教官は、ほとんど京都大学の卒業生で占められていた。

戦前、日本の地理学界を代表する唯一の学会であった日本地理学会は、東京大学や東京教育大学など、理科系の多い東京の大学を中心に組織されていた。京都大学では、地理学教室が文学部にあったこともあり、日本地理学会とは幾分関係が薄かったが、戦後になって、京都大学の関係者も日本地理学会に加わった。昭和21年10月、西日本地理学会を創設し、他分野のどの学会よりも早く、戦火に遭わなかった京都で戦後初めての学術大会を開催した。その後、昭和23年に、京都大学が中心になって人文地理学会が組織され、その機関誌である『人文地理』は、日本地理学会の発行する『地理学評論』とともに、日本の代表的な地理学の学会誌となっている。

なお、地理学教室が関わった海外調査としては、昭和34年に人文科学研究所の水野清一教授（考

古学)を隊長とする京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊に地理班として加わったのが最初であった。第一回には織田と末尾助手、昭和39年の第二回には同氏と大学院生の應地利明が参加した。地理班は、美術考古班が目指すアフガニスタンやパキスタンでの仏教遺跡の発掘調査には加わらなかったが、アレキサンダー大王の遠征ルートやマルコポーロの隊商ルート、

法顯や玄奘などの渡天僧たちの歩いた道をたどって西アジアの高原地帯を踏査するとともに、乾燥地帯の農村の状況や農耕民と遊牧民の関係について調査した。その成果の一端は、カナート(織田)や家畜飼養(末尾)についての報告の形で、『文明の十字路』(昭和37年)に収められた。また、参加者3名による最終的な調査報告書は、『西南アジアの農業と農村』(昭和42年)として結実した。

(京都大学名誉教授 地理学 1932年卒業)

異端の道を行く

梅原 猛

京都大学文学部をつくったのは狩野亨吉である。狩野亨吉は、京都大学文学部を真に創造的な学問の府とするために、まったく学歴にとらわれない創造的な、むしろ異端の学者を教授に選んだ。彼の最初のプランには哲学に西田幾多郎、美学に高山樗牛、中国史学の内藤湖南、英文学に夏目漱石が入っていたという。

このうち東京大学本科出身者は夏目漱石一人であった。西田幾多郎は本科より一段低くみられていた東京大学選科の卒業生であり、高山樗牛は早稲田大学の卒業生、内藤湖南にいたっては師範学校の卒業生であり、新聞記者をしていたものである。また夏目漱石といえども、文学評論などの講義をしていたものの、雑誌「ホトトギス」に小説などを書き、アカデミズムからみれば異端の人であった。漱石は家庭の事情のために、高山樗牛も夭折したために京大教授として赴任できなかったが、漱石の代わりに、文壇で活躍した上田敏が採用された。

西田幾多郎、内藤湖南はそのときまだ無名といってもよかったが、この二人は京大教授としてすばらしい仕事をした。西田幾多郎は田辺元、和辻哲郎、九鬼周造、天野貞祐などの人材を外から招き、自らの手で山内得立、西谷啓治、高坂正顕、高山岩男、下村寅太郎などのすぐれた学者を育てたばかりか、師とは違う道を進んだ土田杏村、戸坂潤、三木清、谷川徹三、林達夫などの思想家を育て、いわゆる京都学派の黄金時代をつくった。また内藤湖南も、一方で甚だ実証的な文献研究を行うとともに、一方で斬新な学説を展開する京都中国学の伝統を作り、青木正児、狩野直喜、吉川幸次郎、貝塚茂樹などの数々のすぐれた学者を輩出せしめた。ところが、このように日本じゅうから

学閥にとらわれないすぐれた人材を集めて京都大学発展の基礎を築いた狩野亨吉はまもなく職を辞し、東京の古書店の主となり、比類のない碩学の巨匠である



にもかかわらず、ほとんど著作らしい著作を書けなかった。もしも伴蒿蹊にならって『近世畸人伝』ならぬ「現代奇人伝」を書く人があれば、狩野亨吉こそその奇人の筆頭におくべきものであろう。

私は西田幾多郎に憧れて京都大学文学部哲学科に学んだが、戦後の京都大学文学部は、西田哲学の学問をそのまま継承する学者か、それとも哲学は西洋哲学を研究し紹介すればよいと考える学者の二つのグループに分かれていたように思われる。西田幾多郎は西洋哲学を研究すると同時に日本の仏教思想を研究し、東西の思想を総合して新たに独創的な思想体系を作ることこそ哲学の仕事であると考えていた。このような精神は田辺元、山内得立、和辻哲郎はもちろん、九鬼周造にさえ受け継がれている。

しかし私は、西洋の哲学と仏教を研究しながらも、西田とはまったく別の立場に立って思想体系を構成することこそ哲学の道だと考えてきた。それゆえ私は戦後の京都哲学の二つのグループから孤立せざるを得ず、孤立無援の道を行くより仕方がなかった。

私は多くの本を書いてきたが、西田幾多郎をはじめとする先人に匹敵するような東西思想の上に立ち、独自の思想体系を創造するという哲学の仕事はまだ果たしていない。私の人生にはそれほど時間が残されていないが、何としてもこのような哲学だけは書いて死にたいと考えている。「人類の哲学」というのがこれから私が書こうとする書物の題名であるが、今までの哲学は主に西洋の哲学にすぎず、人類という見地に立つ哲学はまだ存在しないと私は考えている。

(国際日本文化研究センター顧問 哲学 1948年卒業)

西洋古典文学専攻と中国文学専攻

松本 仁助

このテーマで半世紀前頃の個人的な思い出を記すこととなりますが、お許しください。

1

文学部の専攻間の関係は、学問的に近ければ緊密に、遠ければ疎遠になるのは、自然なことでしょう。西洋古典文学専攻を中心に言いますと、西洋哲学史専攻、西洋史学専攻などとは交流が深いのは当然でしょうが、その他の専攻とは余程の事情がない限り、上記の専攻ほど密接な関係は持てないでしょう。ところがこの余程の事情が起こったのです。以下にこれを述べていきます。

第2次大戦後の1948年にわたしはドイツ文学専攻に入学したのですが、ギリシア文学にも興味を持ち、2回生になると西洋古典文学の演習に出席し、松平千秋先生からヘシオドス『仕事と日』の講読を受けました。この演習には、わたしを含めた独文の学生2名の他に中国文学専攻の学生1名が出席していただけでした。当時は西洋古典には4名の学生がいましたが、何かの都合で欠席していたようです。とにかく、わたしは中文の学生が出席していたのと、松平先生が他専攻の学生であるわたしらにも手加減されずに指導されたのに吃驚しました。

先生の厳しい指導のために、わたしは予習の負担に苦しみましたが、他の学生たちとりわけ中文の学生は多くの予習をこなし、難解な箇所も苦勞なく解釈し、悠々としていました。わたしは、中文を専攻しているのに、異質のギリシア文学をもこのように余裕をもってよく学べるものだ、と感心しました。この中文の学生が清水茂（京都大学名誉教授）さんでした。

2

この頃のことは、清水さん自身が『岡道男先生追悼文集』のなかで述べていますが、清水さんとわたしは引き続き松平先生の演習『イリアス』、ツキジデス『歴史』などに出席しました。この間に松平先生の講読を聴講する学生も増加しました。これらの学生は数人ずつの西洋古典、言語学、西洋史の学生たちと一人の独文の学生で、この独文の学生が岡さんでした。

こうしてギリシア文学を学んでいるうちに、清水さんは卒業して中文の助手になり、わたしはギリシア文学により魅力を感じていましたから、独文を卒業しますと、西洋古典の大学院に入り、松平先生の演習に出席する傍ら、この頃設立された日本西洋古典学会の事務を手伝いました。松平先生は謹厳な外見と異なり、気さくでユーモアのある方でしたから、清水さんも先生の研究室に時々現れ、先生といろいろ話をしていきました。後には西洋古典の大学院に入学した岡さんも加わり、われわれと清水さんとの交流はずっと続きました。

1953年からわたしは同志社大学にドイツ語の講師として勤務することになりましたが、この後暫くして松平先生がイギリスに留学されましたから、先生が帰国されるまで、岡さんと2人で古典学会の事務を手伝っていました。なお、わたしのこの事務の手伝いは、柳沼重剛（筑波大学名誉教授）さんが1956年に西洋古典の助手になるまで続きました。

3

清水さんがギリシア文学を学んだ目的は、初めは古代ギリシアの農事詩『仕事と日』と中国古代の農事詩『詩経』七月篇を比べることにあったようですが、つまるところ清水さんは中国文学とギリシア文学の比較から古典の本質を究めようとし



ていた、とわたしは推測しました。それにはつぎのような事情がありました。清水さんから頂いた清水茂著『唐宗八家文』上、中、下（朝日新聞社、1956、1960、1964）に、清水さんの恩師吉川幸次郎先生が、監修者の言葉として「古典すなわち古代人のすぐれた直観のみによって吐かれた言葉、そうして永遠に人生の知恵でありうる言葉、それを記載した書物は中国ばかりにあるのではない……」と述べられています。わたしは、吉川先生が中国以外の古典の重要な国として古代ギリシアを念頭に置かれていた、ということ松平先生から伺っていたからです。

4

さらに、わたしは、吉川先生が朝日新聞（1963年8月10日）に寄稿された論説「大国のもつべきもの」からも以上のような先生の古典重視の見解を知り、非常に励まされました。吉川先生は、当時の日本に経済面でも文化面でも大国として持つべき余裕が欠けている、と述べられ、文化面での欠点を以下のように指摘されました。

「世界の現代の書が、日本ほど広く翻訳されている国は、世界のどこにもない……世界の音楽家が日本をおとずれ、切符を売切る……それらの点からいえば日本の文化は、世界の水準を上回る大国である。

しかし他の国々の若ものは、その国の、あるいはその地域の過去の書物についての教養を、日本の若ものより心得ているようである……イギリス、アメリカの若もので、シェイクスピアの片々

をも知らぬものはないこと、フランスの若ものの、モリエール、ラシーヌにたいする関係とおなじであろう……プラトン、ヘロドトス、プルターク、みななにほどかの関心と知識が保持されている……日本ではそうはいかぬ……『論語』『詩経』『万葉集』『源氏』、近松、西鶴、みな若ものに近い本とはいえない。またそれらに関する議論が、総合雑誌はもとより文芸雑誌が、あくことなくシェイクスピアについての議論をくりかえしているのちがった状態である」と述べられた後、先生は、いわばおばあさんゆかりの櫛（くし）こうがいにあたる日本の古典が、不用のゆえにどこかへいつてしまったのならば、「それにかわる西洋の宝石はどうか。西洋古典学は、日本でもっとも不遇な学問の一つである」と強調されたのです。

西洋古典への情熱を清水茂さんの具体的な行動において表明した中国文学専攻の基盤には、このような吉川幸次郎先生という大きな存在があったのだ、と言えるでしょう。優れた両学者の中国文学専攻と松平千秋先生と岡道男さんの西洋古典文学専攻が、古典を究めるための強い精神的絆で結ばれていたのは、実に素晴らしいことであった、と思います。両専攻の後継者たちも、できれば先輩たちの跡を辿ってくださるようお願いいたします。

以上の他にも、中文と西洋古典の関係において、吉川幸次郎先生の西洋古典への思いに起因することで、清水さんから伺ったことを含めて、いろいろとありますが、これを述べるのは、紙数の関係から、別の機会に譲りたい、と思います。

（大阪大学名誉教授 ドイツ語学ドイツ文学 1951年卒業）

シェイクスピア学者の日本シリーズ

徳岡 孝夫

英文科教授・中西信太郎先生は、講義の下手な方だった。亡き恩師を侮辱するために言うのではないことは、まもなく御説明する。シェイクスピアのソネット 50 篇と劇中の歌謡風の短詩（ソング）53 篇を訳された中西先生の『シェイクスピア詩集』（英宝社、1973 年）は、いまも私の机辺にある。御指導を受けたのは 50 数年の昔だが、先生への感謝と敬慕の心はいまも変わらない。

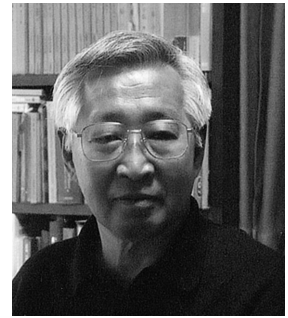
ではなぜ、先生は講義が下手だと私は言うのか？ 中西先生ご自身が、そう仰ったからである。一度や二度ではない。講義の冒頭にほとんど毎週「私は話が下手なので」と弁解される。くどくど仰る。「あの言い訳の部分が最も面白くないんだがなあ」「あれさえ言わなければ普通の話し方なのに」と、われら学生はひそかにホヤキ合った。

上記の『シェイクスピア詩集』は、先生の古希を記念する御訳業だった。だが先生のシェイクスピア御研究は、それより 40 年以上も前に遡る。同書の「あとがき」の中に「昭和のはじめごろ」の訳だかと断って、ソネット第 73 番の「若き日の旧訳」が披露してある。

わが身を君に見たまはむ 年ならば秋 もみ
じ葉の 乏しく枝にかかりつつ あるかなきか
に散りゆきて（以下略）

これが誰だろう、シェイクスピアである。こういう詩を見ると私は嬉しくなる。なぜなら、そこには明治 40 年代に同じ教室で英文学を講じた上田敏教授の訾咳も明らかな美文調、耽美の心がある

からだ。「時は春、／
日は朝（あした）、…」
「山のあなたの空遠く／
『幸』住むと人のいふ…」
など、改めて書くまでもないだろう。



菊池寛（明治 21 年生）

は京大英文科で上田先生の講義を聞いた。中西先生は菊池より、ひと回りほどお若い。だが吉田山の麓には、昭和に入っても依然として「涙さしぐみ、かへりきぬ」の感傷調が、余韻を響かせていたのである。

話は変わって戦後の昭和 33 年のことである。フルブライトの留学生試験には、一次試験に通ると大学時代の主任教授の推薦状が必要になる。サツ回りの新聞記者をしていた私は、中西研究室へお願いに参上した。学校を出たあと鉄砲玉だったので、先生にお目にかかるのは数年ぶりのことであった。

物音ひとつしない研究室で本棚に囲まれた先生は、私のお願いを聞くと、遠慮がちにこう仰った。「きみの記事はいつも新聞で読んでいます。いまから、ぼくはその推薦状を書きますからね、きみ済まないけどちょっと下の事務室へ行って、西鉄ライオンズがリードしているかどうか、ラジオを聞いてきてくれませんか」

当時テレビはまだ存在しなかった。ラジオも小型になっていなかった。碩学の研究室には、ただ静寂のうちに鎮座する万卷の書があった。

その年、三原脩の率いるライオンズは鉄腕・稲尾の奮闘により、巨人軍との日本シリーズを三連敗のあと四連勝し、みごと中西先生の期待にこたえた。その途中経過を聞きに走った伝令は、ほかでもない私である。

（ジャーナリスト 英語学英文学 1953 年卒業）

一九八四年春夏私記

朝尾 直弘

一九八四年は忙しい年だった。振り返れば、八〇年代半ばは戦後歴史学の転換期であった。文学部陳列館の建て替えがこの時期に進行したのは偶然の符合ではあったが、目に見えない必然の流れに沿っていたとも思える。

新年は三浦周行『大坂と堺』の校正と注釈の執筆とともに明けた。その古典的な都市史研究を文庫本に編集したものである。おなじ岩波書店では『日本の社会史』シリーズの編集が進んでいた。日本史の領域を広げるねらいの企画であったが、戦後歴史学の達成を否定するものとの批判が学界にくすぶっていた。日本史研究会と歴史学研究会の編集する『講座日本歴史』（東大出版会）にもその余波は及んでいた。

社会史は京都大学国史研究室の創設者内田銀蔵がランケ流古文書優先の政治史を克服しようと、欧米の動向をいち早くとり入れ、同僚の三浦が日本で最初に著作として具体化した。以後、文化史、社会経済史、思想史などへと展開していく。史料の面からいうと、広くモノ自体を歴史の材料ととらえる動向にあった。私に迷いはなかった。小学館の『大系日本歴史』と、刊行中の史料集『京都町触集成』も含め、すべての編集に関わっていた。

大学内では改築小委員会の一年であった。長年の課題とされた陳列館改築が現実の日程にのぼり、一月博物館運営委員会は小委に関係三研究室の助手五名を加える決定をした。拡大小委とし、改築・移転の実務をゆだねたのである。小委は小野山・応地・朝尾で構成し、私が委員長を勤めた。考古学の岡内三眞・宇野隆夫、地理学の吉田敏弘、国史の西山良平・久野修義の諸君が加わった。かれらはすでに昨年来所蔵資料の点検、移転の図上演習などの作業に没頭しており、ただかたちを整え

たにすぎない。関係登場人物は他に岸田事務長と施設部企画課長の金光男氏。これらが服部正明学部長の統率のもとに動いていた。



岸田氏は工学部から来られ、経理に詳しく、文学部が体験したことのない規模の予算を処理するため起用されたといわれた。金氏は官僚としてはやや型破りの、仕事師というか、「やり手」で、私にとっては心強い味方であった。博物館がモノを扱う施設であること、現物をとおして一般の人々に訴えかける力をもつこと。陳列館が創設以来研究成果を市民に開放し、親しまれてきた伝統などを話すと、即座に東大路通りに入口を開く案を理解し、8,500㎡の学部案を積極的に進めてくれた。市民と大学の交流理念は改築の主要なテーマとなり、公開講座の実施から講演室の設備、建物面積の確保、各室の機能・名称にいたるまで威力を発揮した。いまでは何の障害もなく、大学全体がその方向に向いているが、「象牙の塔」の理念が生きていた当時には、アカデミズムの放棄とまではいわないまでも、真理探求を本旨とする大学が啓蒙活動に手をとられていて良いのか、といった意見は結構存在した。よく話せば、わかってもらえる問題であった。しかし、学内手続きのさまざまな段階・局面で議論をしなければならなかった。

大学博物館に対する無理解や、それに由来する無作法な対応はいくつもの「事件」として記憶に残る。たとえば、学部長・事務長と私と三人で経理部長と懇談の機会を設けたさい、学部長が話されているのに経理部長が居眠りをしていたことがある。私は日記をつける習慣をもたず、日程をメモするだけだが、この日の手帳には「経理部長居眠り。学部長坦々と説明さる」と、情景を記録している。服部学部長は腹の中はともかく、ふだんどおり坦々と話された。

陳列館は史学科の全専攻と哲学科の美術史専攻

が入り、研究・教育がおこなわれてきた。三回生から教官までが出入りし、専攻がちがっても互いに顔見知りで親しくしていた。改築が近づくと、どこからともなく解体を惜しむ声が聞こえてきた。建物は正面など一部が京大内の歴史的建築物の指定を受けており、その部分は残すつもりだったが、独特の雰囲気や懐かしむ気持ちは他に劣るはずもなく、サヨナラパーティーを持つとの提案は即座に決定された。概算要求の折衝中で、決定がないのに先走りを嫌う役人気質と、広汎な卒業生の世論とのあいだに立ち、その日を七月二十一日(土)ときめた。

十七日から滋賀県の文化財調査で余呉町へ出かけ、菅山寺跡を踏査して十九日に京大へ帰った。正門に「文学部陳列館惜別の会」の看板が出ていた。よし、とうなずいて文学部へ行くと、岸田事務長が待っていた。時計台から「文学部を控制せよ」との指示が出ている由、「控制とは時代がかっているなア」と、これを無視することにした。

「控制」には思い出があった。大学紛争のさなか、新任の助教授であった私は改革担当の第二委員会に属していたが、何であったか、御輿学部長の草稿にこの語が入っていた。委員会は松平・菅・武藤教授などが居られ、騒ぎのなかにあって超俗的な独特の雰囲気や懐かしむ気持ちは他に劣るはずもなく、サヨナラパーティーを持つとの提案は即座に決定された。概算要求の折衝中で、決定がないのに先走りを嫌う役人気質と、広汎な卒業生の世論とのあいだに立ち、その日を七月二十一日(土)ときめた。

「惜別の会」の当日は朝から土砂降り心配したが、これが梅雨明けの知らせで、まもなく快晴、涼風の絶好の夏の宵となった。午後の講演会は、

源豊宗、宮崎市定、長広敏雄、織田武雄、前川貞次郎の諸先生が、「陳列館の七十年」をテーマにそれぞれの立場から思い出を話された。どの話題も共通の懐かしい記憶に包まれ、一同至福の時を過ぎた。

夕方五時から陳列館中庭でビヤパーティ。三条のビヤホールからの出張サービスで、飲みたい人は自費で幾杯もジョッキを空け、歓談数時間、八時頃解散した。出席者211名。お名前は芳名録とともに大学文書館に残されている。

この間、国史では岸俊男教授が三月に退官され、長い間忘れられていた御帳台の製作、寄贈者が(財)覚誉会と判明し、古文書室は建物の解体にそなえ旧尊攘堂へ移転した。行方不明であった陳列館の設計図が見つかり、新博物館の設計事前協議が進行し、定員ゼロで開館するについては職組との交渉も必要だった。

最後のヤマは八月二十四日から始まった大蔵折衝であった。東京にいる金氏と、導入されたばかりで時計台に一台しかなかったテレファックスによるやりとりで、質問の中心は大学博物館が一般公開する理由に集中した。まだ、そんなことをいっているのか。ぼやきながら説明を作文して送る。欧米大学の資料を見せよというので、オクスフォード、ケンブリッジ、ハーバードなど諸大学のガイドブックをコピーして送った。二十九日夜、5,000m²なら認めるとの連絡があり、総長の助言もあって、旧館の半分を残し、計6,500m²とすることで結着がついた。

解体工事は年内に始まり、新博物館の建物の着工は翌年四月早々に行われた。

多様なモノ資料を総合し、大学らしい新見解を示した展示は7年後に実現した。いずれ作者の独創を尊重して個人名を掲げた展示も現われるだろう。

(京都大学名誉教授 国史学 1954年卒業)

偉大なるインターディシプリナリー性

小松 左京

私は昭和二十三年に旧制第三高等学校に入学し、学制改革で翌年、新制京都大学文学部に試験を受け直して入学した。それまで神戸第一中学というスパルタ中学で戦争中の教育を受け、敗戦によって頭から押しつけられる制約から解放されて、軽音楽部や演劇部を作ったり、軟派をしまくって浮かれていたが、それは所詮田舎のバンカラな空騒ぎにすぎなかった。

戦争中に空襲を受けていない京都に来てはじめて、私はその空気の違いに気がついた。古今東西の精神、美学、哲学がそこにあった。大学の図書館に行けばあらゆる書籍、研究書があり、精神的な安定性と世界性を感ずることが出来た。当時新しい文学の傾向だったサルトルやカミュの実存主義文学も、リアルタイムで触れることが出来た。私が文学を志して行くに当たって、非常に大きな影響を与えてくれたと思う。

三高の担任は、大浦先生といって英文の先生だった。十四、五世紀のエッセイストの文章が教材だったと思う。

漢文の西田先生は、孟子を教えてくれた。戦争中は、孟子の反権威主義的な革命思想が嫌われていたという。また、西田先生からは、中国には孔子だけでなく、荘子、老子もいる、アバンギャルディズムがあるということを教えてもらった。

校長の落合太郎先生のデカルトの講義は、衝撃的だった。「方法序説」の「我思う故に我あり」"cogito ergo sum" このクリアな合理主義に驚いた。

三高では一人前のジェントルマンとして扱われ、図書館の使い方を教わり、勉強は自分でやるものであることを教わった。私はそれを、授業に出なくても図書館で自分の好きな本を読んでいればよ

いのだと、勝手に解釈して実践した。この天国のような生活が三年間、裏表やれば六年間続くのかと喜んでいたら、突然の学制改革で、その夢は潰え去った。



新制大学文学部でイタリア文学を選んだのは、とくに志があったのではなく、選考がないというので友人が勝手に一緒に書類を出してしまったのだ。しかし、私は中学時代からダンテの「神曲」を読んで好きだったし、当時流行っていたイタリアン・リアリスモの映画に夢中になっていたため、文句はなかった。

しかし、実際にイタリア文学を勉強して卒論にもしたルイジ・ピランデルロの作品は、フィクションの構造、組み立て方など、私がSFを書くようになって大いに参考になった。後に彼の「作者を捜す六人の登場人物」という有名な戯曲の前編に当たる短編を翻訳している。

当時、実存主義文学が世界文学に台頭しはじめていた。つまり、文学に哲学が介入してきて、アメリカの占領下の日本でも、その傾向はあった。むしろ、文学における反米的傾向をつくり出していたように思う。そこに共産主義思想が入り、共産青年同盟の動きも活発化してくる。

日本共産党が、平和状況下に議会を通じての革命を唱えると、ソ連からコミンフォルム批判が起り、日本共産党は大分裂する。

昭和二十年八月六日、九日にアメリカが日本に原爆を投下、昭和二十四年にはソ連が原爆の保有宣言をする。翌二十五年には朝鮮戦争が勃発して朝鮮半島で米ソが角付き合わせる。米・ソのミサイル競争は、宇宙開発競争の形で科学技術を競うと同時に、それは核ミサイル戦争の危機をも意味していた。ようやく戦争が終わり、平和な時代がくると思っていた日本の上に、新たな核戦争の危機が覆い始めていたのだ。私の京都大学生の時代というのは、そんな時代で、危機感が私の頭の中

にも常にあった。

高橋和巳らと作った「京大作家集団」という文学同人活動で当時書いていた作品には、そのような危機感が満ちていて、暗い。

卒業する年の昭和二十九年には、ビキニの水爆実験で第五福竜丸が被爆した。一方では原子力潜水艦のノーチラス号が世界一周する。日本でも原子力の平和利用として原子力委員会が出来、原子力基本法が出来る。

イデオロギーにしばられる文学の限界を感じはじめて、私は「科学としての文学」の可能性を模索しはじめていた。科学も文学もどちらも人類を幸せにしなければいけない。科学をもっとわかりやすく語ることは出来るはずだ。知性を破滅の方向ではなく、人類の幸せの増大のために使うよう

にするために、文学は何らかの役割を果たす事が出来るのではないか。そんなことを考えていたのだ。

文学原論の桑原武夫先生からの「人生にとって文学は必要か」という課題に対して、「文学にとって人生は必要か」とひっくり返して解答した高橋和巳とは別に、私は私なりに、この問題の解答を求めつづけているのかもしれない。湯川秀樹氏に「中間子とはどんなものですか?」と聞いたときに、湯川さんは在原業平の歌を引用して答えてくれた。このような京都大学の偉大なるインターディシプリナリー性は、私をSF作家として孵化させてくれたインキュベーターともいえよう。このような広範な教養を培う京都大学の構造は、今後も変わらず続いてほしいものである。

(作家 イタリア語学イタリア文学 1954年卒業)

学道不尽 — 回想涓滴 —

中祖 一誠

京大に入学したのは1949年の春のころだった。大戦の敗北、そして間をおくことなく始まった連合軍の支配下での新憲法に基づく教育諸制度の改革が、是非もなく進行していった時期のことである。いわゆる戦中派末輩のひとりとして、旧制中学で敗戦を迎え、あわただしい学制改革の煽りのなかで新制高校を終えた。その年の春、とはいっても晩春のころから、新制京大での学生生活が始まった。制度発足当初のことであり、すべてが変則的に推移していった記憶がある。入学式のあと暫く間を置いて、授業が開始されたのは初夏を迎えるころのことだった。教養部のキャンパスは旧制三高の校舎があてがわれた。キャンパスの中は、最後の旧制大学への進学を志す三高生と新制京大生が混在していたことに加えて、新制京大も旧制高校1年修了者と新制高校卒業者のほかに、戦前のわが国が領有する地域からの帰国子弟も含まれ、多彩な顔触れであった。とにかく、最初の1年はこの吉田キャンパスで、そして2年目からは通りを挟んで本部構内の文学部棟との往来で京大の生活が始まった。文学部での専門課程の授業は、特別な事情のある場合は別として、新旧の学生と一緒に聴講するという按配であった。先輩格である旧制の刺戟を受けたことも多々あり、裨益するところ少なしとしなかったことも余得のひとつと感じていたことを思い出す。

入学2年目、専攻分属のためのガイダンスのとき、確か時の文学部長であった吉川幸次郎先生が、いささか昂揚した語り口で、東京の学問と一味も二味も違う京大文学部の学風について、ある種の使命感と自負を滲ませて語られるのを神妙に聴き入ったことを思い出す。山陰の片田舎の高校から京大の門をくぐった、万事において刺戟に

欠く田舎育ちにとって、少なからざる緊張を憶えながら聴き入ったことを思い出す。とはいっても、当時自分の未来について確たる見通しも立てないままに漫然



と京大の門をくぐってきたわけでもない。受験準備の合間に、恐らく当時の平均的な高校生の関心の範囲内であった漱石や龍之介などの小説や三木清の「人生論ノート」などに類した随筆、論集などを通して、漠然とした文学部志望の夢を膨らませていたのも事実である。このような曖昧模糊とした気持ちを哲学に向わせたのは、高橋里美の『哲学の本質』であった。たまたま最寄りの都市、松江に出掛けた折、古本屋の書棚で出会ったのがこの書物であった。白いハードカバーの160ページのこの本は、いまでも手元の書架の隅にすっかり変色して赤茶けた背表紙で並んでいる。哲学の門の入口に佇む志学の徒にとって、この書が最適の指南書になるか否かは問うことを要しないことであろう。ただこの機縁を感謝するばかりである。「哲学の無限課題性」を巻頭論文として数篇の論文の集録からなり、附録として「哲学に志した動機」という自伝風の随筆が添えられていた。この書が確とした目標の定まらないわたしを哲学志望に決定づける書となった。

文学部入学後の1・2年間の吉田キャンパスでの語学と教養科目の履修に過ごす時期、第二の出会いが訪れる。時折回っていた丸太町の古本屋である。ショーペンハウアーの『意志と現識としての世界』（上巻）を手にしたことである。下巻を欠いていたので格安で手に入れたものである。明るいコバルト色の大冊である。この著者が戦前からわが国の知識人に迎えられていたことは知っていた。しかし、訳者の姉崎正治が、原著者の弟子であり印度哲学の体系的な研究者として名高い、ドイセンのもとで学んだことを知ったのはこの書である。この大著の冒頭に掲げられている「世界は

自分の現識である」の警句は、仏教の唯識思想にも通ずるものがあることに親近感を憶えた。いささか大袈裟に過ぎるが、稲妻の閃光にも似た印象を方寸のカメラに刻印した。「現識」(Vorstellung)は、いまでは「表象」の訳語が定着しているが、「起信論」からの採択であることもやがて知った。迷わず専攻として印哲を選ぶことにした。

2年次の専攻分属の後、学部・大学院では、語学の才を欠くわたしにとって難物であったサンスクリットとの付き合いを不器用にかわしながら、印哲・仏教学をベースに、哲学関連の講義に出席した。気品の漂う足利惇氏先生の温顔、眼光鋭く居竦める面持ちの長尾雅人先生、地味な語り口でダルシャナを講じておられた松尾義海先生、いずれの先生も懐かしく思い出される。肝心のわたしのテーマとしたウパニシャッド研究は不徹底に終り、いまもって慙塊の念ひとしおであるというのが偽らざる現在の心境である。

当時における履修の制約は比較的緩く自由な裁量に任されていた。単位のほぼ半分が専攻に関連する科目である必要があるほかは、自由に履修できた。これも京大の〈自由の学風〉の余滴というべきか。山内得立先生の「ロゴスとレンマ」、武内義範先生の「宗教現象学」、田中美知太郎先生の「プラトン研究」、そして戦後暫く京大を離れておられた西谷啓治先生の「宗教学の諸問題」、また東北大学から赴任してこられた三宅剛一先生の「人間存在論」など、いずれも斯界の重鎮の警

咳に接しえた好因縁を悦ばずにはおられない。これは、恐らく戦後における京都学派の復興を内外に印象づけた一時期であったと想像する。

印度学の領域では、上記の三方の諸先生、およびその薫陶のもとにその学統を継承された俊英を中心に、インド古典の実証的研究と経典・論書の思想的研究によって、京都のインド学の新しい学風が着々と構築されつつあることを仄聞するにつけ、改めて京大に学んだ因縁を感謝している。現在、各大学で進捗しつつある学科再編の趨勢の中で、哲史文三学科構成を基調とする伝統的な編成を越えて、学際的視点に立った新しい学の形成がこれからの課題となるであろう。さしあたっては、インド古典文献学の領域において先学の築いてきた〈フィロロギイー〉と〈フィロゾフィー〉の伝統を両輪として、新しい世紀を先導する学風が確立されることが期待される。

名古屋の地に教鞭の場を得て以来、幸いにして学縁を繋ぎえて現在に至っていることに感謝している。学の対象は、いま道元の学道観に移っているが、「学」の道を歩むか「道」を究めるか、いずれに力点を置くかは道元において大きな課題である。文字通り〈無限課題的〉課題としてわたしの前にある。京大を出て半世紀になろうとしている昨今、〈浦島伝説〉に類する駄文を弄する責めに弁明の一句もいま呈しえない次第である。憶い多き惑いの時代を京大に学んだ回想の余滴を認しつつ文学部の学風の隆盛を願って止まない。

(愛知学院大学名誉教授 印度哲学史 1954年卒業)

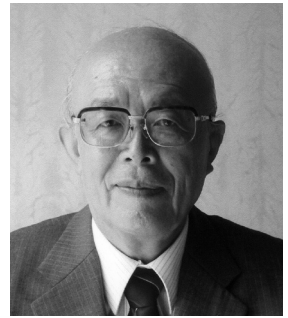
卒業論文の功罪

服部 春彦

わが国の大学の文学部における教育の伝統的な特色は、卒業論文（以下、卒論）の重視である。大抵の文学部では卒論が必修科目になっているだけでなく、卒論に対して多くの単位が与えられている。現に京都大学の西洋史学専修の場合、修得すべき専門科目 88 単位のうち、卒論は 12 単位を占める。これに対して演習・実習・講読の必修単位数は全部合わせて 16 に過ぎず、しかもそのうち 4 単位は卒論演習であるから、実質的には卒論の単位数は 16 である。他大学の文学部の場合には卒論の単位数は普通これよりは少ないと思うが、それでも卒論を大学での勉強の「集大成」と見るような考え方が行き渡っている。このような卒論重視の姿勢はいうまでもなく旧制大学以来のものであり、私自身が学部生であった新制大学の初期、昭和 30 年頃には卒論にはたしか 20 単位が与えられていた。ここで生じる疑問は、この単位数にふさわしいだけの時間と労力を学生が卒論の作成に注いでいるのかということである。

私自身、40 年余の大学教員生活、とりわけ京大文学部での 23 年間において、卒論の審査は最も精神の緊張を要する年中行事であった。試問の際同僚の前で的はずれな質問はしたくないということもあったが、それ以上に、まじめに勉強した学生の成果を正しく理解し評価したいという思いがあった。事実、2 年間でよくここまで書き上げたと思うような力作や好論文に出会うことも少なくなく、多くの恩恵を受けることができた。ただ、いつの頃からか、学生の卒論への取り組み方のルーズさが気になるようになった。もちろん全員がそうだということではないが、いい加減に書く学生が増えたのである。卒論演習において中間発表をさせても、一夜漬けでお茶を濁す場合が目立っ

てきた。その直接の理由は就職活動の早期化にあるが、より深い原因は、何か一つのことじっくりに時間を掛けて取り組む気風が世間一般に失われてきたことにあると思う。



卒論の作成に関して教員が手取り足取り指導するようなことは、京大西洋史に関する限り全くなかったと思う。これも私自身が教わった先生方のやり方に従ったわけだが、本来、卒論というのは、学生が自分でテーマを設定し、自力で必要な材料を収集・分析しながら問題点を解明して、その結果を筋の通った明快な文章で叙述すべきものであって、教員はその作成過程にできるだけ関与しないことが望ましいというのが、その頃の私の考えであった。

大学において習得すべき最も重要なものの一つが、自発的な学習態度であり、自ら問題を発見し解決する能力であるとすれば、卒論がもつ役割の重要性は論をまたない。この点を認めた上で、伝統的な卒論重視の教育システムが伴わざるを得ないマイナス面にもっと目を向ける必要があるのではないだろうか。

京大に限らず文学部の学生の中には、大学において自分がやりたいと思うテーマや課題を漠然とでも心に描いて入学して来る者が少なくないようである。われわれ教員はそうした学生の多様な志望に応えるべく、できる限りヴァリエティに富む講義を開設して来た。しかし、私の狭い経験からいうと、実際に入学した後に自分の課題の実現に向かって着実に努力して行く者はそう多くはないように思われる。また一つのテーマに興味を抱く一方で、それ以外のことには余り関心を示さない学生が多い。西洋史を専攻する場合にも、特定の人物や事象に興味があるだけで、西洋の歴史全体を系統的に学ぼうとする姿勢が一般に弱いように思う。卒論演習のような授業においても同僚学生

の発表に対して積極的にコメントしようとする学生はかなりまれである。卒論は学生の探究心や自発的な学習態度を養うのには役立ったとしても、他面において学生の学問的関心と知識の幅を狭める作用をしてきたのではないだろうか。

以前の文学部では、学生は卒業後の進路と直接結び付けることなく自分のやりたい勉強をやっていたし、その結果就職戦線で不利になっても甘んじて受け入れるところがあった。しかしバブル崩壊後の就職難の到来とともに、大学に対する社会の要求は限りなく大きくなり、文学部の場合にも学生に対して相応の就職口を確保できるような教育を施すことが強く求められるようになった。もちろん文学部の場合、学生にプラクティカルな知識や技能を身に付けさせることには大きな限界があるが、しかし旧制大学以来の卒論を中心に据えた教育システムではもはや現実に対処できないのではないだろうか。西洋史に例を取れば、卒論で取り上げたごく狭い範囲のことを多少詳しく知っ

ていれば（そのこと自体随分怪しくなっているのだが）よいというのではなく、最小限西洋史全般に関する基礎的な知識をしっかりと習得した学生を社会に送り出す責任があるろう。

卒論の代わりに演習の必修単位数を大幅に増やし、そこで思考力や自己表現能力やディベート力などをもっと鍛えることが必要ではないか。また、京大生の大きな強みである外国語の能力、特に英語の学力を多面的に伸ばして行くことも、就職戦線において即効力があるのではないだろうか。京大生はこれまで就職に関して特別に恵まれてきたが、そのことに安住しているわけには行かないと思う。

以上、私は卒論がこれまで果たしてきた教育上の役割を十分に認めた上で、卒論を選択制にするか、その単位数を減らすか、あるいは思い切って廃止するか、いずれかの方法で卒論重視の教育方式を改めるべき時ではないかと考えている。

（京都大学名誉教授 西洋史学 1957年卒業）

文学部の歴史としての「図書問題」

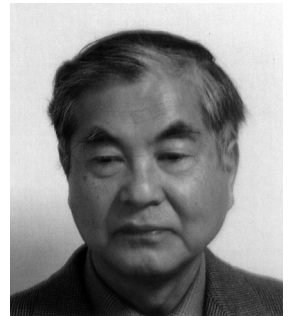
水垣 渉

文学部の存在と歴史に書物が大きな影を落としていることは、文学部に関わった誰もが感じていることであろう。「図書問題」は文学部が逃れられない運命だといってよい。

このことを否応なく感じさせられたのは、1988年から1990年にかけて文学部図書室の老朽化問題をきっかけにして起こった文学部の図書再編問題であった。旧本館の西北部分を占めていた文学部書庫は、床にはひびが走り、階段は傾きゆがみ、天井は雨漏りがして一部の書架にはヴィニールをかけておかねばならず、さびついてよく閉まらなかった窓からは鳩も侵入して糞をする、といったひどい状態にあった。耐震診断の結果からも、もし中規模以上の地震が起これば、建物と図書、さらには職員や利用者に被害が及ぶことは必至であった。当時の岡照雄学部長の決断と教授会の議論を経て、まず緊急に文学部図書室を閉鎖し、一部の図書を付属図書館へ一時保管することになった。図書委員を務めていたわたしたちに課せられたのは、なるべくスムーズにこの作業を進めることであった。

文学部図書を不便ではあっても利用しうる状態にしておくためには、哲学科と史学科の図書室、各研究室への一時的な移動は避けられない。それでも収容しきれない約10万冊については文学部外に保管場所を求めなければならず、全図書60数万冊のなかから比較的利用の少ないものを選別するという膨大な作業が必要になった。これらをどこに預けるかは、学部長をはじめ関係者が苦労したところであった。西田文庫などは教養部図書室に移すことになったが、結局大部分は、付属図書館の公には存在しないことになっていた空きスペースに梱包したままで収容してもらった

とになった。学内外の利用者から不満の声が上がったことは当然である。卒論、修論を書く学生達からは、とくに厳しい批判がなされ、学友会も団交でこの問題を取り上げた。



この図書問題がとにもかくにも一応の解決を見たのは、本館の地下にあたる部分に三学科図書室を集約する新図書室と書庫が設けられたことによる。しかしそれも、とくに法経両学部との長い交渉の末、永久的な決着とまではいえない形で、可能になったものであった。

その後も、文学部の財政悪化によって深刻な図書問題が起こってきた。それは、2年後には各講座への図書費配分がゼロになるとの予測が不可避になったからである。大学院の部局化、いわゆる大学院重点化を進めざるをえなかった一つの理由はそこにあった。

文学部は、戦後、新制大学への転換、いわゆる大学紛争、入試改革、重点化といった大きな出来事をほぼ10年ごとに経験してきたが、文学部100年の歴史の中ではそれらはいずれも本質的な問題とはいえないのではないかと。むしろ、それらの陰に隠れてきているが、図書の問題こそ、人間文化の歴史を担うことを本来の任務としている文学部が今後も追求し続けるべき問題ではないのか。集密書架が支配する書庫、あるいは電子データベース化といったことを取ってみても、未解決の点が残されている感は否めない。図書利用を一時的にであれ不可能にした負い目をもつかつての図書委員長としてわたしが切に願うのは、図書との理想的な関係を文学部のあり方として追求し続けていただきたいことである。最後に、この問題の重荷をこれまでも担ってこられた図書室の関係職員の方々のことを感謝をもって想起したい。

(京都大学名誉教授 キリスト教学 1957年卒業)

「論文被引用回数」についての疑問

喜志 哲雄

日本シェイクスピア協会という学会がある。1930年に結成されたが、戦争のせいで活動停止状態となり、戦後に再発足した。第一回大会は1962年秋に他ならぬ京都大学文学部で開かれた。日本のシェイクスピア研究者の団体で（会員には外国人もいる）、「シェイクスピア・スタディズ」という英文の紀要を毎年刊行している。この紀要は日本でのシェイクスピア研究の現状を反映したもので、現在の研究を代表する論文が収録されているのだろうと思うひとがいるかも知れないが、実はそういうことは全くない。何しろ掲載される論文は毎号僅か2,3篇なのだ。この紀要は日本のシェイクスピア研究の成果が発表される数多くの刊行物のひとつにすぎない。敢えて言うなら、日本のシェイクスピア研究の現状を集約した刊行物などといったものは、この世にはひとつも存在しないのである。

アメリカにはシェイクスピア・アソシエーション・オブ・アメリカという学会がある。北米の学者が中心になっているが、会員は世界中にいる（私も会員だ）。この学会ができたのは1923年だが、年次大会を開くようになったのは1973年のことだった。別に自慢するほどのことではないが、年次大会という点では日本の学会の方が先輩になる。ついでに言うと、イギリスにはブリティッシュ・シェイクスピア・アソシエーションという学会があるが、この団体の第一回大会が催されたのは2003年初めだった。それまでは、イギリスのシェイクスピア研究者の全国的な組織はなかったのだ。学会など作らなくても、誰がどんな仕事をしているかは単行本のかたちで分るから、さしたる不自由はなかったに違いない（なお、国単位のシェイクスピア研究者の団体でいちばん古いものは、お

そらくドイツのシェイクスピア・ゲゼルシャフトであろう。これは1865年に創設された）。

それなら、シェイクスピア研究者の国際学会はないのかと思うひとがいるに違いないが、インタナショナル・シェイクスピア・アソシエーションという団体がある。1971年にカナダのある学者が超人的な努力をして「世界シェイクスピア会議」という催しを実現させ、それが母体となってできた学会である。五年に一度、世界大会を開き、その都度、その大会での主な講演や研究発表を収めた論文集を刊行するが、それ以外に会員の研究成果を活字にすることはない。第一、この団体に所属しているのは、世界のシェイクスピア研究者のごく一部にすぎないのだ。

煩瑣に感じられるに違いない事情をやや詳しく紹介したのは、他にもない、シェイクスピア研究については、どの研究者も所属している学会やどの研究者も必ず読む刊行物は存在しないことを示したかったからである。英語圏の文学者でいちばん広く研究されているのは間違いなくシェイクスピアだが、シェイクスピアについてさえ事情はこうなのだ。もちろん私が学生だった頃と比べると、日本の外国文学研究の世界でもいわゆる国際化が著しく進んでおり、日本人が外国の学会で研究発表をしたり、日本人の論文が外国の刊行物に収録されたりすることは少しも珍しくなくなった。それでも、たとえばシェイクスピア研究においても、世界中の学者が同じ場で仕事をしているとはとても言えないのである。

現在の英語圏では、シェイクスピア劇は一回の休憩を含めて三時間ほどで上演されるのが普通である。上演時間三時間の戯曲を三時間で読むのはちょっと難しいが、大抵の戯曲は一日あれば読める。しかし世の中には『神学大全』や『マハーバーラタ』や『失われた時を求めて』のように、通読



するだけでも気が遠くなるほどの時間がかかる書物がある。こういうものを研究するひとが、若い時から毎年のように論文を発表するようだったら、どこかおかしいのではあるまいか。あるいは、滅びてしまった言語を研究しているひとがいるが、こういう高度に専門的な分野になると、研究者の数も限られているであろう。分野によっては、論文を理解できるひとは世界中を見渡しても数十人もいないといったことがあるかも知れない。

ある論文が筆者以外の学者によって何度引用されたり言及されたりしたかが問題になることがある。こういう議論が成立する前提には、当の分野については相当数の研究者がおり、その人たちのほとんどすべてが研究成果を競い合う共通の場があるという事実がなければならない。文学研究についてはこういう事実はないのに、それでも「論文被引用回数」をある研究者の優秀さを判断する基準にするのは、無意味だとしか言えない。もちろん、この基準は自然科学の世界では十分に意味のあるものらしいし、そのことについてあれこれ言う気は私にはない。ただ、自然科学の世界で通用する基準はあらゆる学問の世界で通用する——

いや、通用すべきだ——と主張するひとがいたら、ちょっと待ってくれと言いたいのである。残念なことに、現在の日本にはそういう無知なひとが少からずいるようだ。

文学部には毎年二十人も三十人も学生がやって来る専攻もあるが、二年か三年に一人しか学生が来ない専攻もある。私が文学部にいた頃には、前者が大きな顔をするとか、後者が肩身の狭い思いをするとかといったことは、全くなかった。この雰囲気は今も変わっていないと、私は信じている。毎年二十人も三十人も学生が来るというのは、文学部内部の基準からすれば確かに多いが、自然科学系や社会科学系の学部からすれば、こんな数字は問題にならない。つまり文学部とは、学問の世界では紛う方なき少数派なのである。嬉しいことに、私がいた京都大学では、少数派である文学部を冷遇する雰囲気もやはりなかった。こういうあり方が変わらない限り、「論文被引用回数」を基準として文学研究の価値を判断するという愚行がまかり通るような事態には決してならないであろう。

(京都大学名誉教授 英語学英文学 1958年卒業)

100歳青年を寿ぐ

渡部 定雄

私の文学部とのつながりは大方の会員諸兄姉より遅く始まった。しかし、深くて長い。自治会長以外に縁の薄い会長名を以文会奈良支部会から賜って4年、喜寿を越えた。それまで、何年か支部を代表して本部理事会に参加させていただいた。私には珍しく、くだんの会には欠かさず出席した。学内理事の先生方がほとんどの仕事を引き受けてくださったからである。医学部芝蘭会の会館でフランス料理を横目に、世界的に著名な先生方の生のお話を聞いたからである。それから、もうひとつ、東京教育大学名誉教授・佐藤則之先生（昭和10年言語学）とお会いできたからである。直接、習ったわけではないが、文京区大塚のキャンパスで時空を共にした先生と馬があった。先生は千葉支部いや関東を代表して毎年泊りがけで理事会、総会などに顔を見せておられた。齒に衣着せぬご発言の名物先生であった。

いずれにしても、ここまで50有余年大過なく食いつなげたのは、一重に文学部及びその御出身の先生方のおかげである。

というのは、御多分にもれず、第2次世界大戦末期、私は現在の名古屋ドームの地にあった三菱重工そして、東京の杉並にあった陸軍気象部と、動員、動員で敗戦を迎えた。そして、戦後の混乱期に学業を再開したものの職業に適した素養にも教養にも乏しかった。ところが幸いにも、新制高校で英語を教え始めた。時の英語主任が坂口允男（のぶお）先生（昭和11年英文学）である。ちなみに、文化庁長官の河合隼雄（はやお）氏は先生の従兄弟にあられる。その後、私学の英語の助教授として転出できたのも主任教授になっておられた坂口先生のお口添えがあったからである。副学長を最後に公職をひかれた先生は、現在もご

健在で過年、以文会奈良支部総会、親睦会にご臨席を賜ったのは幸せだった。昔、教えていただいた囲碁はさておき、その温厚なお人柄からにじみでるご教訓にいまも浴しているのは至福というほかない。



ところで、私は回り道をして京大文学部にいらしてもらった。そのユニークなつながりは、20歳代後半に始まった。高校（定時制）、国立校、私学。在職のまま、足掛け5年、直接、間接、お世話になった。いわく研究生、院生、文部省内地研究員、私学内地研究員。おかげで年金が続いている。幽明異にしようがしまいが、文学部出身の先生方が鬼籍に入られることはない。

主任教授・指導教授は白井二尚先生（大正15年社会学）であった。峻厳な先生という噂が研究室内外で聞かれたが、私にとっては優しい先生であった。俊秀数多の旧制一高の理科で一時学ばれた先生の懐は深かった。院修了後、私は白井先生のお許しを得て英語の教員を続けた。その際、先生ご自身が、卒業直後、旧制京都工専で英語を担当していたとのお話を伺った。芯から先生をジャーマン スコラー（旧学生造語、ドイツ語に堪能な学者）と思い込んでいた私には初耳であった。私事にわたるが、京大の卒業式で、教育の仕事に携わっていた父と平沢興総長の祝辞を一緒に聞いた。父は後にも先にも、どの卒業式にも出てくれたことはない。唯一親孝行をしたような気がしている。

その後、白井先生を通じて村上至考先生（昭和8年英文学）のご指導をうけた。フランク・ノリスをやり始めたのは村上先生のご教示による。ワズワースを始め英文学に造詣・学殖の深かった先生だが、一時、ナサエル・ホーソンやフランク・ノリスといった米文学にも目を向けておられた。旧制東京高等師範の文3（英語）の卒論で、セオドア・ドライサーをやり、京都大学で社会学をか

じったという私に京大教養部発行の研究誌を下さった。そこに先生ご自身のフランク・ノリスの論文が掲載されていた。かくて、私は遅まきながらノリスをやりだした。その後、間をおいて内地研究ということで菅泰男先生（昭和14年英文学）にお世話になった。「図書館を使ってやればよい。」まさに戦前派文学部の先生にあった御慈悲であった。出席重視のアメリカの大学と違って何かホッとした。

ところで、ノリスは卒業証書に縁遠かった。ロンドンのケンジントン美術学校（現ロンドン芸術大学）、パリのジュリアン・アカデミー、カリフォルニア大学バークリー校、ハーバード大学。いずれも中退。それぞれその跡を追った。そして、彼が立ち寄り、書き残している米・英・伊・西。さらに、ボア戦争、米西戦争を実地で取材していた彼の足跡を訪ねて、南アフリカ、キューバまで足を伸ばした。学は進まなかったが、旅ができ、見聞が広がった。広大なケープタウン大学のキャンパスで「コー」が「カー」であることに気付くのに時間がかかった。同大学、バークリー校、ハバナ大学やキューバ国立図書館で、私がサクソ奏者の渡辺貞夫と間違えられた。光栄であり、驚

きであった。漢字が違うといっても理解し難い様子であった。音楽はいとも簡単に国境を越える。

話は戻るが、南伊豆の妻良（めら）へ社会学研究室からでかけた旅の思い出をひとつふたつ。白井先生のご研究の村落調査の一環として、民宿のはしりである船宿でとまった。とびきり生きの良い夏とび（夏に回遊する飛魚）の3枚おろしと、代々伝わる対岸、子浦の女狐の話を肴に夜が更けた。これは、翌早朝、かつての定置網である「大謀網」見学にはこたえた。だが、なにしろみんな若かった。三原山まで足をのぼした。多様な大島椿と島の姉子（あんこ）がまぶしかった。

最後になった。昔、妻良の漁師達は耳の穴に入れた小枝の湿り具合で海の天候をピタリ予測したという。フナ板一枚下は地獄。今日の科学的予報も、地域をかざれば、それに一籌を輸するのではないか。そして今、国立大学法人と文学研究科、以文会の近未来の姿を重ねている。教育・研究プラス経営。産・学・官のハーモニーなるか。その可否は歴史の判断に委ねよう。後は、100歳青年と同体の有能・気鋭の士に任せて、少しでも長くその行末を見守りたい。それが老骨の身に一服の回春剤となると信じながら。

（京大以文会奈良支部長 社会学 1959年修士修了）

田中美知太郎先生のこと

岡崎 満義

田中美知太郎先生を思い出す季節——私にとっては、11月と2月である。

昭和34年秋、就職試験が始まった頃、卒論の相談か何かで、研究室に田中先生を訪ねた。先生はいつもの静かな声で「ところで君は、どんな進路を考えているのですか」と訊かれた。できれば出版社に就職したいが、なかなか募集が来ない。やっとひとつ、学園新聞顧問の入山雄一さんの紹介で、文藝春秋が受験できることになったが……と、少し不安そうな顔をしたのかもしれない。

「それなら私は、岩波書店なら知り合いがあるから、推薦状を書いてあげましょう」

と、思いがけない言葉を頂いた。願ってもないありがたい話だった。11月、文春の入社試験のとき、あわせて岩波の小林勇会長を訪ねるよう、手筈をととのえてくださった。田中先生にいただいた推薦状は、封筒に入っていたが、なぜか封がしてなかった。表書きが「小林勇様」とあるので、私信を開くような感じで後ろめたい気持ちもあったが、読んでみたいという誘惑に抗しきれなかった。

「私の教室の学生、岡崎満義君を紹介します。見どころがあるようなら、採ってやってください。田中美知太郎」

便箋1枚に3行、あっさりそう書かれていた。東京へ向かう夜行列車「銀河」の中で、私は何度も開いて読んだ。劣等生の私には、身にあまる推薦状だ、と思った。

文春の面接試験のあと、神保町の岩波書店に行った。会長室で小林さんは「折角だが、今年は新人を採用しない年なんだ。でも、大学の先生の何人かから頼まれたら、入社試験をしなければならぬかもしれない。そのときは君にも連絡

しましょう。この推薦状はあずかっておきます」とのことだったが、結局その年は採用がなかったようだ。

3年後の昭和37年11月4日、前日郷里で結婚した私は、京大楽友会館で披露宴を開いた。田中先生も出席して、スピーチをして下さった。「岡崎君の奥さんは手に職（薬剤師）をもっているようで、大変結構なことだと思う。それは岡崎君の酒代がかせげるから、というわけではない。男というものは一生の間に、仕事の上で多分一度か二度、いわば人生の決断を迫られるときがある。人間としての最後の線を守らなければならないときがあるかもしれない。そんなとき、奥さんに何か特別な技術があるということは、大事なことだと思う。……」

教室のコンパのときだったか、田中先生から友人の哲学者・戸坂潤夫妻の話を知ったことがある。戸坂夫人は編み物の腕前はプロ級だった。近所の人に頼まれて、セーターや手袋を編み、ときにはそれが家計の足しになったりした。「それにもまして、戸坂潤が思想問題で警察に捕まって、奥さんもいろいろ事情を訊かれたとき、私は編み物のことしか分かりません、と泰然たるものだった。夫婦がまったく違う仕事の技術をもっているというのは、お互いにいいことなんだね」と話されたこともあった。

披露宴を終えて数日後、私は妻と一緒に佐佐木茂索文春社長の家に行った。結婚祝いに背広を1着もらっていたので、お礼かたがた結婚の報告にうかがったのである。そのとき佐佐木さんから「奥さん、なるべく早く、年収分の貯金をしなさい。1年分の月給を貯めるのは大変だが、がんばりなさい。これから先、どんなことがあるか分からない。会社と喧嘩したくなることもあるかもしれないし、転職したいと思うこともあるかもしれない。年収分の貯えがあれば、何とかなる」と、新生活



のアドバイスをもらった。

期せずして、田中先生の言葉と同じニュアンスのものであった。お2人の言葉を心に刻みこんだ。それにしても、年収分の貯金はほんとうにむずかしかった。

2月は試験の季節である。大学受験のニュースも話題になる。この時期になると、私は必ず試験の夢を見た。それも口頭試問で何か質問されて、どうしても答えることができず、冷汗三斗、困り果てて目が覚める。大学を卒業して10数年たっても、殆ど同じ夢を見た。

私は四苦八苦して、「ソクラテスの死」という卒論を書いた。400字詰原稿用紙25枚の短いものであった。久しぶりに取り出すと、表紙裏に「審査教官 閱了月日 印」という小さな紙が貼ってあり、「田中教授2月10日、高田教授2月14日、西谷教授1月24日、野田教授1月29日」とインクで記入してある。

卒論を提出したあと、先輩から脅された。「口頭試問はグューグューいじめられるよ。しっかり準備しておかないと、ひどい目に合うよ。とくに、高田三郎教授は怖い。中世哲学のゼミは殆ど学生がいないから、ここぞとばかり突っ込んでくるんだ。学生はたまったものじゃない。覚悟しておいた方がいいよ」

何人かの先輩にそう言われて、私は震え上がった。ギリシャ語で読んだのは、「アナバシス」「ソクラテスの弁明」だけであったから、むずかしいことを訊かれたら立ち往生、お手上げになるに違いない。もしダメだったら、私のような出来の悪い学生が残っても、大学のお荷物になるだけだから、何とか卒業させて下さい、と頼むしかないだ

ろう、と観念した。

実際は意外にすんなり終わった。多分、卒論のレベルに合わせて、先生方はいささか手心を加えた質問を下さったのだろう。田中先生は質問より、私を側面援助して下さったように思う。そんなわけで、何とか口頭試問をクリアしたのだが、当日までの不安がトラウマのようになって、2月の声を聞くと、何年も悪夢にうなされるようになったのだろう。

さすがに今は、試験の夢を見ることはない。それでも2月になると、田中先生、そして恐怖の口頭試問のことを思い出す。

田中先生は昭和20年春の東京大空襲で、顔と腕に瀕死の大火傷をされた。ひどいケロイドの残る顔と静かな声に、強い印象をもった。

「文藝春秋」昭和26年10月号に、田中先生の「マスク」という随筆が載っている。

「真に人間的なつきあいというものは、かえって私のような条件の者にめぐまれることがあるのではないかとも思う。愛の奇跡は、外面的な抵抗のあるところに、かえって深まるとも考えられる。私もまたソクラテスのように美しくなる時があるかも知れない。しかしそれは、すべての人の眼に開放されるのではない。人づきあいに疲れなためには、むしろ常に遮断が必要だ。マスクもまた、そんな役にも立つかも知れない」と結ばれている。

昭和32年、2回生のとき、初めて田中先生にお目にかかったとき、先生の顔にもうマスクはなかった。随筆が書かれてから、6年が過ぎている。その間に田中先生は「ソクラテスのように美しく」なられたのだ、と思う。

(西洋哲学史 1960年卒業)

京都大学文学部の思い出

松本 健二

このたびは文学部創立百周年を迎えられ、輝かしい歴史を築かれた諸先生、先輩方の積年のご努力に心からの敬意を表したい。私の入学は1956年、ちょうど創立50周年の年で、自分としても感慨ひとしおであり、ここにささやかな思い出を書かせていただく。なお、お名前の敬称を当時のままとさせていただいた失礼の段、お許し願いたい。

1956年といえば、経済白書の「もはや戦後ではない」が流行語になった年で、経済成長の兆しは見え始めたものの、いわゆる55年体制確立で保守・革新の対立構造が強まり、緊迫した政治状況の頃であった。そんな時代、私は合格の喜びで胸を膨らませ、故郷の横浜からまだ電化も不完全だった東海道線に揺られて京都へ来た。教養部1回生の授業は宇治分校で、いささか粗末な施設に「文化果つる所」（当時の映画の題名）などといながらも、若い我々は意気軒昂・元気一杯で、よく学びよく遊んだ。宇治分校で嬉しかったのは、秋の一日、文学部長吉川幸次郎先生をはじめ学部の先生方が揃ってお見えになり、各専攻の説明会をして下さったことだ。その折茶菓の接待があり、開会のご挨拶で、吉川先生が「これは僕たちのポケットマネーからです。」とおっしゃった時の感激は今も忘れられない。なおこの年、『京都大学文学部五十年史』が刊行された。今も大切に持っている。

教養部は語学別のクラスで、私はフランス語の3組だった。2005年4月、以文会50周年の記念講演をされた礪波護君・岡崎満義君をはじめ、多士済々であった。またとても仲良しのクラスで、「L3の会」と名づけた同窓会をたびたび開いている。これまでの経過を岡本友道君が記録している、

とのことを聞き、送ってもらった。開催年月日・場所はもちろん、出席者数から2次会・3次会の場所に至るまで克明に記録されている。1994年からは毎年の開催となった。岡本君には甚だ申し訳ないが、紙数の都合上ここでは全部紹介できないので、次の「L3の会」で皆さんにお渡ししようと思う。

2回生から吉田に移った。三高の面影を残す古い木造校舎だったが、「京大生」になった実感がした。フランス語の大橋保夫先生は、留学から帰国されたばかりで、発音指導のため、当時まだそれほど普及していなかったテープレコーダーを使われたのが印象的であった。

また2回生での私自身の重要な出来事は、遠藤嘉基先生の『国語学総論』を受けたことだ。確か火曜日の午後、学部本館北側の教室での講義だったと思う。たいへん明快な講義内容だった。私はこの講義で国語学国文学を専攻することに決めた。学部に進んだ58年はこれまた記念の年で、「国語学国文学科講座開設五十周年」であった。『国語國文』290・291号は特輯号となり、『文學篇』・『語學篇』として秋に刊行された。また澤瀉久孝先生の時代から計画されていた『新撰字鏡國語索引』も刊行された。なおこの年の専任の先生は、学部が遠藤先生・野間光辰先生・濱田敦先生。教養部が池上禎造先生・阪倉篤義先生だった。さて学部の雰囲気は教養部と非常に対照的であった。教養部はクラス中心で同年代同士のヨコの関係だったが、学部になると先生方・先輩方も親しくお話させていただけるようになり、家族的・タテ型の環境になった。この年、大学院在籍の先輩方は博士・修士併せて18名、学部生は新入の我々9名を含めて29名の大所帯で、国文研究室はいつもにぎやかだった。最初にお世話になったのは、修士課程におられた安田章先輩である。安田先輩は学部新入の我々を文学部閲覧室（我々は「文閲」と略称した）の書庫に集められ、国語国文関係図書の説明をして下さった。「これはこういう辞書で、こういう時に使うのだ。」というふうに。「実

際にそのものを、自分の手に持って、自分の目で見る」ことの大切さがわかった。先日、前述の『五十年史』を再読し、「文閲」の写真と開設のいきさつが掲載されているのを発見してたいへん懐かしく感じた。

6月末には野間先生・阪倉先生にご一緒いただき、下呂温泉への親睦1泊旅行があった。翌日の日本ライン下りの時はたいへんな暑さだった。アルバムには、いつもの黒の和服に菅笠姿の野間先生が写っている。10月中旬には、遠藤・野間両先生引率のもと、東京訪書旅行があった。宮内庁図書寮・東洋文庫・大東急記念文庫・静嘉堂文庫・東大国文研究室を訪れた。また在京先輩の歓迎会もあり、楽しくまたいそがしい三日間だった。またこの年遠藤先生の国語学第一演習は静嘉堂文庫本『平中物語』で、変体仮名が難しかった。試験は『成尋阿闍梨母集』写本の写真一葉、「現行の仮名字体に改めよ」という問題だった。

4回生になった年、すでに大学院・学部の多くの先輩方が卒業され、研究室は寂しくなった。遠藤先生の国語学第二演習は『神田本白氏文集巻第四』で、古典保存会影印本の青焼きコピーが教材であった。諷諭詩題名とその担当者は次の通り。なお、「君」・「さん」の敬称は同期入学者。『百練鏡』安黒正流君、『青石』松本健二、『売炭翁』松成武治君、『陵園妾』松岡剛夫君、『杏為梁』植垣節也先輩、『井底引銀瓶』中村宗彦先輩、『天可度』

長尾晃雄君、『李夫人』十川信介君、『牡丹芳』美山靖先輩、『母別子』久保田由美子さん、『杜陵叟』小林裕子さん、『采詩官』村田啓二君だった。私はこの時初めて「訓点資料」という国語資料を知り、また、国語学国文学講座開設当初の教授・吉澤義則先生がこの研究の先覚者であることを知った。この演習によって、私は訓点資料の研究を卒論のテーマとし、また遠藤先生から学会の事務担当を仰せつかることになった。なお、訓点語学会事務局は1989年から東京に移った。最後になってお名前を挙げてたいへん恐縮だが、現在学会委員として文学部木田章義先生・大槻信先生が学会運営のためにご尽力くださっている。

先日、久しぶりに京大構内を自転車で回ってみた。演習室のあった東館は、当時は西側だけが3階建てだったと思うが、今は増築されて「回」字型4階建てになっている。西側1階正面入口だけは当時のままである。本館は、かつての建物の北側部分を高層化した感じで、8階建てとなり、卒業写真を撮った東側正面玄関のあたりはコミュニティ広場になっている。法・経の建物も高層化され、あたりの風景はすっかりさま変わりしていた。しかし、文学部の伝統である実証的で自由な学風と、研究室の暖かい雰囲気はこれからも変わらないだろう。文学部創立百周年をお祝いするとともに、新しい時代に向けて更なる進歩・発展のあらんことを心からお祈り申し上げる。

(龍谷大学国際文化学科非常勤講師 国語学国文学 1961年卒業)

午後十時の京大時計台のサイレン

三谷 恵一

文学部の先輩の父、三谷久男がおおよそ40年間副校長を務めた奈良育英高校時代に、パール・バックの『母よ嘆くなかれ』を読んだ。京大へ進学して、湯川秀樹博士と創造性研究を進めておられた園原太郎教授の講義で外因性知的障害者の因果関係が京大病院のカルテをいくら研究しても分からないことを知り、昭和36年3月卒論からラットを用いた因果行動発達心理学を追い求めた。その結果、カナダのヘップ(D.O.Hebb)が主張している視覚的パターンの知覚学習(perceptual learning)のメカニズムに突き当たり、人類の幸福のためにその徹底的追求と、治療と予防を超えて第三の道である"促進心理学"の創設に生涯を捧げる決心をした。夕方5時から30匹の夜行性白ラットを相手に一人木造の旧心理学実験室に籠もり、10時のサイレンが吉田の里に鳴り渡るまで実験した。京都駅発23時4分の最終近鉄電車で奈良に着くと0時5分であった。

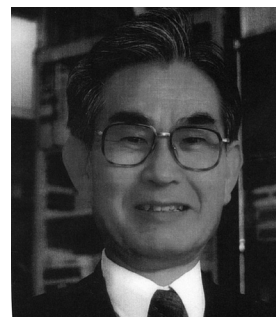
平成17年4月、以文会50周年記念総会に奈良の自宅、翠月庵経由で参加したところ、法経第1教室のあった荒れ狂った時計台はすっかりリフレッシュされていた。フランス風とイタリア風レストランが設けられ、見上げるカーテンにシャンデリアと柱飾があり、三高生の個室等の京大の歴史が、行動科学的に正しく伝統を保持した"右から左回りに"展示してあり、観光バスも発着しているという。教養部も総合人間学部としてリフレッシュされ、三高の自由の鐘が屋上に復元され、日没から壁面に時計台が映える。時計台正面の楕は、今宵も盆栽のように大きさの恒常性を保持している。

春暮れて

ローマ数字や

時計台 恵一

(有馬朗人主宰『天為』
平成17年8月号所収)



デカルトの方法的懐疑と心身・身心の二分法(dichotomy between body and mind)を教わった上田泰治教授と野田又夫教授にも感謝の意を表したい。本年、岡山大学工学部「総合工学—ロボットと人間」の3回講義のなかで、人体解剖の研鑽やハーベイの『動物の心臓と血液に関する解剖学的研究』(1628)をおそらく読んだ上で神経、筋肉、脳室からの精気の運動など"人間機械論"を展開したデカルト(1641)のロボットを明晰・判明にすることとしている。フランス語やラテン語を駆使した2か年分の数冊の野田講義のノートの他に、教養1年の時の上田教授の49年前のノートがある。"身体"を人間機械と見立て、別に"精神"があり、そのうち生得観念は先験的(a priori)に実在するとcogito, ergo sumを説きながら主張したデカルトの考えは、チョムスキーの言語論ばかりでなく、パターン分析の基礎は後頭部視覚領17野の遺伝子により構築されている方向特定細胞が関与していることを発見したヒューベルとウイーゼルのノーベル賞研究からも強く想起されてくる。その遺伝子にかなう三角形の知覚学習は身心の発達を促進し、ゲシュタルト心理学が最少エネルギーの法則に基づき"良いかたち"とした円の知覚学習は身心を破壊することを岡山大学で発見することができた。誤りのない哲学と"神経—筋回路の知覚学習に基づく成熟"を理論化した精神生物学を統合しながら、工学部、医学部が開発するロボットに"心"を入れられるか否かが最大の論点となってきた。ここからも示唆されるように、775兆円もの負債を抱えたわが国が蘇る道は、京大文学部の世界的視野の教育研究に依存するところ大である。

大学院に進学して困惑したのは、講義が学部と共通のものが多かったことである。学部3年、修士2年、博士3年の7年間を共通にする科目が残っているのならば廃止にして頂きたい。研究会の原書講読を移設した英日バイリンガルの大学院（MC and/or DC）講義・演習を切望していた。博士の学位を取得するために世界から大学院に進学する学生は、高度な教育研究環境に憧憬と誇りを抱いている。昭和39年東館増築に伴うゴタゴタにも、工作室や動物実験室が無いまま旧心理学実験室からの退去の他に、史学科以外の各講座に大学院生研究室を獲得したいという切実な願いがあったのである。今は跡形も無いその心理学実験室は、1879年ライブチヒにヴントが創設した世界最初の実験室を模して、99年前の1907（明40）年初代松本亦太郎教授が芸術性豊かに日本最初の実験室として創設した。

「あんたとこの実験室入ったとこの、大っきな置き時計止まるとるやないか！」
教養グラウンドにおける全学挙げての園遊会でビール片手に井上智勇教授が絡んでくる。私は即座に「ヴントの実験室の時計も止まっていたのです」と答える。錐体外路系研究者の平沢興総長が握手を求めてくる。座り込んだ総長の巨大な禿頭を撫でた。昭和24年岡本春一博士によって創設された岡大法文学部心理学実験室には平沢総長寄贈のヒトの脳脊髄があり、昭和40年第二代野上俊夫教授の蔵書2,457冊が岡大図書館に迎えられた。

以文会岡山支部の活動50年を振り返ると、昭

和30年以文會會報第一号に評議員内藤雋輔（大10年支那史）、支部・内藤、内田律爾（大4教育）、熊仁事教（昭3印哲）、木畑貞清（昭4国文）、藤井駿（昭5国史）、江實（昭5言語）とあり、岡大津島倶楽部で小規模な会合をもっていた。

昭和56年に新支部長大熊立治（昭5国史）、新幹事由比濱省吾（昭27地理）、三谷恵一（昭36心理）、木下鉄矢（昭49中哲）、横山茂雄（昭53英文）とし、更に由比濱会長、三谷、河合保生（昭50地理）、古川義人（昭63宗教）の3幹事に改めた。第一に仕事の側面（performance）として名簿の更新、研鑽、フィールド現場主義を採り、第二に人間の側面（maintenance）として支部会員自身による講話、懇親会、自己紹介の重視を統合したPM式重複幹事システムを展開している。『以文』に報告したフィールドは岡山美術館、岡山市立オリエント美術館、吉備津神社、林原美術館、岡山県立美術館、六高創立95周年群像、黒住教本部、金光教本部、牛窓町服部邸、内村鑑三を招いた元津山基督教博物館である。黒住宗晴教主邸懇親会では、平沢総長の書「敬神尊人」が慈顔を垂れていた。田邊元の研究者、川島核三氏（昭42M哲学）が津山在住とわかり「田邊元の晩年とその後」が以文48（2005年）に掲載された。上田泰治教授が田辺教授と深く関わっていたことが判明するにつれ、京大以文会がその使命を正しく遂行してきていることを実感させるこの頃である。

（京大以文会岡山支部 岡山大学名誉教授 心理学 1961年卒業）

1960年代の京大文学部

田端 泰子

私が京都大学に入学したのは1960年。有名な「日米安全保障条約」改定の年にあたっていた。4月、宇治分校に通いはじめた当初より、学生運動は大へんな高揚をみせ、国会デモに代表を送ろうと、クラス決議や学生大会が連日開かれた。お昼休みの時間とカンパに使う小遣いは、ほとんどこのためになくなった。

石炭産業の斜陽化に加えて落盤事故も多発、労働争議が安保反対と結合し、労働者・学生の連帯が最もうまく形成された年であった。

国会デモで神戸高校の先輩にあたる東大の樺美智子さんが亡くなったこともあって、いわゆるノンポリの私たちも、安保を避けて通ることはできなくなった。60年に入学した学生はほとんどが、こうした軌跡を辿り、社会運動に関心を持ったのではないだろうか。『日本史年表』の近代の部分で、一年分のページ数が一番多いのは1960年である。月ごとの全国での動きが、次第に集約され、大きな一つのうねりとなっていく様相がよくわかる。「安保闘争」と「三井三池争議」が合一された一年であった。

60年代の学生がほぼ同じように政治情勢に敏感になったのは、教養課程の一年を宇治分校という“独立国”で過ごしたことが理由として挙げられよう。一回生しかないこの環境は、自主的、自立的精神を培ったと思う。

吉田の文学部棟で学んだ三回生からは、すっかり落ち着きを取り戻し、当時の文学部“新館”と史学科閲覧室と、古文書室の三カ所をまわる日々に変った。専門の学問のおもしろさに気がつきはじめたからである。

三回生のころ、最も興味深く感じた講義は、非常勤の宮川満先生の「太閤検地と六角式目」であ

る。開口一番先生は「きみたち日本の近世はいつから始まったと思うかね」と聞かれた。この第一回目の講義の前日、史学科閲覧室で、先生の『太閤検地論』をパラパラめくってみた私は、順番が廻ってくると「秀吉の太閤検地からだと思います」と答えたところ、先生はにっこりされた。



古文書の授業も楽しく、日々読める字が増えることで到達感が増す。赤松教授、熱田助手が担当され、もっぱら熱田さんが個別指導をされた。「御坊」がお坊さんではなく、ごぼうであることを、第一回の授業で知った。

院生になってからは『平安遺文』の輪読が印象に残っている。一回の担当者は一人か二人なので、下調べが大変で、先輩方の発表に近づくために四苦八苦した。そのころはまだまだ関連論文も少なかったが、現在この演習をやるとなると大へんな労力が必要だろう。それだけ歴史学研究が広く深く行なわれている証拠である。

小葉田教授の演習は、夏の「越前調査」に向けて論文を読み発表すること、調査後は文書整理と目録の作成であり、近世文書の多さ、整理の要領、分類の基準などを学んだように思う。あのころ美しさに感動した緑深い大野郡の村々や清冽な谷川は、今はダムの上に眠っている。

その他、非常勤で来られた門脇禎二先生や、きちんとした講義の見本を示された岸俊男先生など、印象深い講義が多かった。

回想するとこのようによい印象だけがよみがえってくるが、現実の学生生活は貧しく厳しかった。大学の職員も横柄な人が多く、総じて国立大学は教官のための大学であったように思う。構成員である学生の不満や要望をどれだけ把握し、自らを改められるのかが、これからの国立大学の課題であろう。

(京都橘大学学長 国史学 1964年卒業)

広島支部会と「公共性」

岡本 明

以文会広島支部会長をやれといわれて数年たったが、この間、3回ほどは支部会便りを作成し、支部会員の紹介もしているから、支援金を送ってもらっていることを、ありがたいと思いきすすれ、改めて本部や、京大文学部への注文や要望などはない。おそらく、支部会メンバーにもう少し時間の猶予ができれば、講演会などを組んで支援金の有効な使い道を考え出すだろう。会員になりたての思い出としては、22年前、吉川先生を会長に、土井先生（仏文）、米倉先生（地理）、熊平創業の伊藤さん（西洋史）など、そうそうたるメンバーの参加があって、私はお茶汲みをしていたことである。当時は、広大西洋史研究室でも控えめにしていたから、正直なところ、二重の圧力のようなものを感じていた。同じく支部会員でわたしより少し後に東洋史・東南アジア講座に着任した植村泰夫氏などは、会議では圧力など撥ね退けて、最初から臆せず発言していた。

このことに関連して、およそ、母校から他校に着任するとき、研究室トップからの、「△△先生によく」とのメッセージはしかと承るが、「〇〇をすべきで〇〇はすべきでない」と説諭されても、それは半分以上、空しく消えるものだと言いたい。なぜなら、現場へ来た身でないといけない関係があって、否応なくそれにかからめとられるからだ。そのような場合の原則は、是是非非しかなく、「言い含められた」ことに頼るすべなどない。同じ時代を生きた他の支部会長なら似た思いをされている人もいるのではなからうか。もしないとすれば、広島大学のような大きな職場ではそうなのだ、と言っておきたい。そして支部会のささやかな集いが、こうしたことを確かめる場にもなっている。もっとも、最近は新任地に送り出す人に、

「説諭する」などのことはなくなっているかもしれない。

支部会にかかわることは、ひとまず措いて、広島での、この次くる春で22年半になる歳月をとおして、コルポラティズムやレジオナリズムを抜け出したところに拠点を見いだしたように思う。風景・山河の実感信仰とか、「醤油の味」ナショナリズムをくぐりぬけて近代「公共性」で集まることのできる仲間をつくった。公共性しかないのでは、という選択だ。公共性はナショナリズムを超えることができるか、宗教（世俗化・還俗化）と公共性、これが最近暖めているテーマである。もちろん、福音を説くようなつもりはない。

フランス16世紀の宗教戦争の中から、モンテーニュらユマニストと王権の、宗派間和解を実現しようとした努力、ルイ14世でそれが崩され、18世紀末の啓蒙王権で再び、啓蒙閣僚・開明官僚のもとで公共圏が招き寄せられる。フランス革命は、近代公共性を論じる基本タームを用意した。ナポレオンは、まだ相対的に低かった国境のハードルを越えて隣接諸民族に制度改革をもたらしたが、これら諸民族でも一定の主体性をもって改革の精神が受け止められた。いわば啓蒙時代の知的公共圏が、フランスの文化的優越感に支えられて、帝国の公共圏に引き写された時代である。だがそれは、くすびを接してフランスに対する被支配地民族諸階層の、この時代固有のナショナリズムを惹き起こす。

以上がここ数年、暖めてきた近代ヨーロッパ公共性の構想である。この先は、「ヨーロッパ公共圏の拡大と変質」として、アメリカや日本も含め、19-20世紀の時代まで考えてみたい。それがライフワークとなれば幸いだ。研究会のメンバーは諸大学出身者を含み、開催場所も一か所集中ではなく、東京、名古屋、京都、大阪、岡山、広島と水平移動してやっている。これこそが公共性では



ないか。これが支部会での講演テーマとなれば、なおさら結構だと思っている。

ここ数年、夏の2、3日を旅して中規模都市にでかける。柳井、下松、防府、宇部、それにもう少し先の柳川、久留米……せいぜい3階建ての低い建物の並ぶ街路を歩くと、残っていた野心さえも、す〜と消え去っていくのを感じる。東京の

研究者たちはこれと対極の世界に暮らしていないか？ では京都でくらす若い学徒たちはどうであろうか？ 寺院・仏閣の他に、低くて詰まっている建物の通りを1時間歩いてみたまえ。そして、独り立ちしたら、できるだけいろいろな地域の研究者と交わりたまえ。それが最初の公共性であり、広島支部会員からのメッセージでもある。

(京大以文会広島支部長 広島大学教授 西洋史学 1965年卒業)

農村調査・卒業論文の思い出

平井 紀夫

京大文学部を卒業して、民間企業に入社し早や四十年も過ぎてしまった。大学時代のことを思い出すと、講義のこと、研究室のこと、友人と語り合ったこと、野球チームでよく遊んだことなどいろいろいるなことが思い浮かぶ。なかでも最も印象に残っていることを記させていただく。

三回生の時、白井教授他多くの先生方の指導をえながら「農村調査」を経験した。社会学研究室が滋賀県近江八幡市南津田を対象に行った農村調査の一員として参加することができたのである。事前に南津田の状況や調査の方法について説明を受け、農家に泊まらせていただきながら調査を行った。一度の調査だけではなかなか詳細を理解できず、再度個人的に訪問して追加の聞き取り調査も行ったことを思い出す。同じ三回生の島岡、酒井両氏と「封鎖性・開放性」を担当した。南津田に関する種々の資料と農村で聞き取り調査したものをまとめたのである。地理などの自然的条件、他村との境界、交通手段、通勤・通学、旅行、職業、衣・食・住の自足、売買、教養・娯楽・精神的自足、村民としての資格、共有財産、通婚圏、制度・慣行、言語など多岐に亘る調査を行った。こうした調査は初めての経験であったが、貴重な経験であったし生涯の記憶に残るものであった。この調査を通じて、多岐に亘る資料やデータを論理的に整理し、一定のコンセプト「封鎖性・開放性」についてまとめることを体得できた。

卒業論文では、テーマ自体を自ら見出すという違いはあったが、同じような経験をした。卒業論文のテーマは、「少年非行の社会学的研究」であった。先輩である奥田氏（前イトーキ社長）がホームマンズのスモールグループに関する研究をされていたことに触発され、ホームマンズの理論を現実

の少年非行集団によって検証しようと試みた。まず、現実の少年非行の実態を学ばねばと考え、大津家庭裁判所を訪問した。アポイントもなしに突然裁判所の窓口で訪問の趣旨を説明して協力をお願いしたところ、暫く待ったが、裁判所としても協力してやろうと返事をしていただいたのである。少年調査官を紹介いただき、一定の条件を付してではあったが、調書を読覧することを許可された。毎日裁判所に通ううちに自分が調査官であるような気分になったことを思い出す。少年鑑別所も紹介いただいて、少年鑑別所の実態について詳しく説明を受けることもできた。ホームマンズなどの小集団に関する書籍、少年非行に関する書籍など多くの書籍を読んだ。更に、家庭裁判所で得た多くの資料もまとめて整理した。理論を実態で検証することは困難な作業であったが、自分なりに考え、悪戦苦闘し、卒業論文として百枚の原稿用紙にまとめて、一月末の提出締切日になんとか間に合わせる事ができたのである。

農村調査と卒業論文の経験で得たことは、多岐に亘る情報を論理的に整理し、検証すること、自らが、考えて・考えて・考え抜くことの大切さではなかったらうか。

今から振り返ると、こうした経験と共に人生論やお互いの研究内容について時を忘れて議論したことが、企業に入社して大いに役立ったと考える。入社数年後、一件の処理に何枚もの帳票を使用していたところを、一枚の帳票に整理し回議の効率化をはかる役割を与えられた。数多くの帳票を整理工夫し帳票の簡素化を実現することができ、与えられた役割を果たすことができた。暫くして、本社で集中処理していた多くの業務を工場や支店で分散処理することになり、そのリーダーを勤めることになった。業務処理のマニュアルが殆どなかったため、先ず雑多な業務を簡素化し事務処理



手順書としてまとめ、業務を分散処理することができたのである。また、管理職としての重要な役割として年間の目標を定めること・部門の運営方針を定めることなどがある。上位目標・方針と共に自部門の多くの課題を整理し自部門の目標や運営方針をまとめる時には、大学での経験が大いに役立ったと思う。

更に、経営の重要な役割として株主との対話——IR——がある。特に国内外の機関投資家との対話は重要である。株主との対話の責任者としての役割を果たしているときにもこれらの経験が大いに役立った。経営目標・目標達成のための施策・その結果など多岐に亘る事実を機関投資家に対して充分理解されるように論理的に整理し説明せねばならない。この時にもこれらの経験が大いに役

立った。

二十一世紀に入り、IT革命が進展し、社会がグローバル化しグローバル経済社会が到来した。企業・大学・行政においても、利害関係者との対話が重視され、情報を開示し・説明責任を果たし・最良の行動を起こしていくことが求められている。そのためには、多岐にわたる情報を論理的に整理し説明する力が求められている。大学で学ぶことの大切さを痛感している次第である。

企業人としての役割を終え、今大学時代を振り返ってみると、文学部で学んだことがこんなにも生きていたのかと痛感するとともに、これからも益々生かされていくはずだと確信している。あらためて先生方や先輩方、また同じクラスの人達に感謝している次第である。

(オムロン株式会社特別顧問・京都大学総長特別顧問 社会学 1965年卒業)

文学部時代の思い出

藤本 幸夫

私が大学に入ったのは昭和三十五年(一九六〇)で既に四十五年を経た。馬齢六十を遙かに超えたが心持ちは当時のままで、年を重ねると叡智・分別がつくと言うが、我が身を省みると世智が増しただけであろうか。筆者は学生当時あまり勤勉な学生ではなく、卒業後にそのツケを取り戻そうとそれなりに努めているが、大上段に文学部の学問を述べうる立場にはなく、それは然るべき方に委ねて、思い出を二、三綴ってみたい。

入学の年は日米安全保障条約締結、即ち六〇年安保の年で、世上は騒然としていた。教養部一回生は黄檗にある宇治分校に通っていた。同年が宇治分校最後の年であったが、戦前の火薬庫の跡で、崩れかけた赤レンガの建物があり、溜め池の間に雑草が生い茂っていた。当時は朝は八時から始まり正味二時間の授業で、市内からの通学は不便で、木造の校舎は冬には実に寒かった。四月から六月にかけて授業時間は安保に関する討議で費やされることが多かったが、全国の大学でも同様で、市内でのデモも頻発し、警官隊との衝突も相次ぎ負傷者も続出した。六月十五日の国会前での樺美智子氏の逝去は火に油を注ぐこととなり、日本中は大混乱に巻き込まれた。私のようなノンポリの学生も多かったが、一様に時計台下の数千人の集会や円山公園の一万人以上の集会に参加したり、デモで市内に繰り出したりした。それも夏休みがすむと、次第に沈静化した。当時一般に皆貧しく、下宿に入れずに友人の下宿を転々とする者もあり、御飯に醤油だけをかけて食べる者もいた。高校時代の詰め襟に下駄履きの学生もいた。二回生になって吉田分校に移ったが、新一回生も一緒だったため構内は過密状態で、環境ははなはだ劣悪であった。

三回生になって緊張感を持って文学部に入った頃のみずみずしさが、今となっては懐かしい。尤も二回生のために解放された概論などの学部の授業があり、学部への出入りは初めてではなかったが、心構えが違った。中国学を目指して文学部を志望したが、次第に言語に関心が移って言語学科へ進学した。今日の隆盛とは隔世の感があり、前の学年は誰もいず、私の学年は二人であった。当時は学生も少なく、建物も今ほども多くはなかった。文学部は本館・東館と陳列館よりなり、現在東館は中庭を長方形にとり囲んでいるが、東側と南側の付け足し部は当時空地で、東側の付け足し部の辺りに上下各三、四室の二階建て木造建てがあった。中庭で猿の入った檻を見たことがあり、心理学の実験用だと聞いた。文学部には図書室として哲・史・文の三閲覧室があり、私は文学科閲覧室(略して文閲)を主に利用したが、その頃六〇近い(学生の目からは随分の歳に見えた)広瀬さんと言う司書がいらっしゃり、言語の学生はこんな本を読むべしなどと指導を受けた。昔の司書には見識のある人が多かった。学生が本を借りるのに主任教授の認め印が必要で、おそろおそろ印鑑を頂戴に研究室に参上した。研究室の天井は高く、夏でもひんやりした。床には短冊形の褐色の板が敷き詰められ、歩くときしんだりした。何書を読むかで学生の程度は知れ、冷ややかな目で見詰められ、退出すると冷や汗をかいていることも屢々であった。

筆者は京都大学文学部で学び得たことを、我が身の幸いと常々感謝している。我々が教えを受けた頃の教授陣は旧制高等学校で学んだ方々であり、教養主義に裏付けられた、おおらかさと良さがあった。現今の私をも含めた教授たちに比べると、勿論人によりけりではあるが、遙かに威厳と身を貫く矜持があったように思われる。往年の帝国大学の教授かくありしかという感を受けることも度々であった。言語学科の教官は泉井久之助教授と西田龍雄講師であった。泉井先生は懇懇丁寧な方であったが、以前には非常に峻厳であられた

らしい。私どもの頃は五〇代後半で、随分温和になられたと聞いた。私どもの少し前から修士課程の学生を多く受け入れられるようになり、大学院生は多かった。先生は哲学にも造詣が深く、哲学者の趣もあられた。はじめて聞く言語学概説は難解であったが、少し経つと神妙な面持ちで頷いている先輩たちもあまり判っていないことが判明し、ほっと一息ついたものである。先生は小声で話され、しかもお口に籠もることが多いため、前列に座っていても聞き取れないことがままあった。ある時などは生返事をし、それについて問われた時に質問の内容が判らず、立ち往生したことがある。筆者はやがて朝鮮語学を専攻することとなり韓国へ留学したが、一年目の秋に来韓され、一週間ほどお供したことがある。それを契機にその後何かとお目をかけていただくようになった。西田先生は筆者が学生の頃講師でいらっしゃったが、メイエの原書講読があり、又演習の時間にはシナ・チベット諸語の語彙を黒板一杯に書いて比較言語学の方法を説かれたが、ノートに書き写すのに精一杯であった。韓国留学中に西夏語解読で学士院賞を受けられた由仄聞し、一人寿いだのも四十年近く前のことである。国語学の濱田敦先生は大学院を通じて指導教官であった。先生は日本語学研究の補助資料として外国語資料に注目され、多くの資料を殆ど自費で刊行された。就中『捷解新語』を初めとする朝鮮資料に最も力を注がれたが、それらは朝鮮語学研究の基礎資料としても大きな比

重を占め、韓国の学会からも高く評価されている。先生のご研究は元々日本語学解明のためであったが、朝鮮語学にも大いに寄与しておられる。中国文学の小川環樹先生も指導教官のお一人で、演習の末席を汚したが、おっとりした口調で丁寧に接してくださり、思い出しては恐縮している。入矢義高先生の『文選』や元曲の演習では、従来の注釈書とは異なる明晰な解釈を示され、蒙を啓かれることが多かった。東洋史の佐伯富先生の演習はよく聴講した。お部屋を訪れると、いつも横向きの姿勢で端然と漢籍に朱を施しておられるお姿が目焼き付いている。村夫子然たる風貌でいつもにこやかに接してくださった。どういう事からか、足利惇氏先生から個人的にサンスクリットを学んだことがある。その前に天才と称せられた大地原豊先生から初級を学んでいたので、中級程度をお読みくださった。天才を相手にしておられる先生は、しどろもどろの筆者にさぞかし呆れられた事であろう。しかし尊氏の後裔でいらっしゃる先生は鷹揚迫らざる態度で、お目を糸のように細めていらっしゃった。今思っても身の縮む思いがする。現代史の今津晃先生には個人的に随分お世話になったが、その酔眼が懐かしい。

その他にも多くの碩学に接し学恩を陰に陽に蒙った。顧みると後悔と慚愧の念いよいよ深く、今はただ少しでも精進してそのご恩に報いたい心、切実である。

(富山大学教授 言語学 1965年卒業)

空間を言葉で満たせ

井波 律子

私が京大文学部に入学したのは1962（昭和37）年4月、3回生になり中国文学を専攻するようになったのは64年の4月である。教養部時代は大人数のクラスだったので、ざっと語学の授業の下調べをするくらいで、あとは濫読にふけるなど、自由な時間を満喫することができた。

しかし、学部生になって以来、こののんきな生活がもののみごとに一変した。このとき中国文学を専攻した3回生はわずか5人であり、演習（3回生用）では毎回、必ず当たるため、必死で予習しなければならなくなったのである。どの演習のテキストも難しく、時間をかけて辞書を引きつつ、気合を入れて考えなければ、とても読みこなせない。そのころ、重い辞書をかかえて構内を歩いていると、「重たい本もって、深刻そうな顔をしてる。そんなに大変なの」などと、よく教養部時代の友人にからかわれた。

3回生から修士課程の1回生まで、中国語学中国文学研究室の主任教授は吉川幸次郎先生だった。周知のごとく吉川先生の授業は大変きびしく、何もわからない無知の権化だった3回生のころは、うろたえるばかりであった。このときの演習のテキストは、現代作家巴金^{パーチン}の長篇小説『寒夜』。このときは大量に読むトレーニングを受けた。ついで4回生のテキストは杜甫の詩集『杜詩鏡銓』^{と し きょうせん}。このときはうってかわって、一字一字、丹念に凝視しながら熟読するトレーニングだった。大学院に入りたて、修士課程1回生のテキストは、『春

秋公羊伝注疏』。この演習は大先輩の博士課程の人々もいっしょだったが、世の中にはこんな難解な文章もあるのかと、衝撃をうけた。



こうして3年、吉川先生は定年退官された。67年3月のことである。吉川先生の教えを受けたこの3年の記憶は、今も鮮明であり、おりにつけて脳裏に甦ってくる。たとえば、先生は翻訳をするとき、書いてないことは一字も付け加えてはいけない、書いてあることはすべて訳すように、とよく言われた。あれから40年近くたった今になっても、翻訳をするとき、私はいつもこの言葉を思い返し、「正確に、正確に」と自分に言い聞かせる。また、これは先生がそう言われたのか、先生が言われたことを自分流に解釈したのか、はっきりしないのだが、ある授業のとき、先生は大きく手を広げて、「空間を言葉で満たせ」と言われた。これを聞いて私は深く深く感動した。これまた、今になっても仕事にとりかかる直前、早くも疲労感にうちのめされそうになるとき、いつもこの言葉を思い返しては自分を鼓舞するのである。

今や、大学も成果主義の時代であり、人文系も数年で一定の「成果」を出すよう求められている。しかし、私などは中国文学をやりはじめてから約40年、自分なりに試行錯誤をしながら、本を読みつけ、若いころに受けた吉川先生の教えがようやく実感をもって理解できるようになった気がする。これは、大学ことに人文系の「研究教育」が、発酵してそれなりの「成果」が出せるようになるには、膨大な時間がかかるということではなからうか。まさに急いては事を仕損じる、である。

（国際日本文化研究センター教授 中国語学中国文学 1966年卒業）

大学紛争の只中で

長倉 久子

その朝もいつものように山田先生は静かに口述を始められました。私たちは細くハイトーンの先生のお声を聞き漏らすまいと耳を欹てながら筆記に専心していました。

と、突如、後方の扉が開き十名ほどの学生たちがどよどよと教室に入ってきました。そして教壇の先生に向かって「スト破り」と非難の声を上げ「なぜ授業をするのか」と先生を詰問し始めました。

これから何が起るのか……授業中の先生が時にお見せになる激しさを知っている私たちは、急に速度の遅くなった時の流れに身を潜め、不安な気持ちで成り行きを見守っていました。それは不思議な静寂の支配する空間でした。先生は動揺することも激することもなく黙って学生たちの言葉に耳を傾けておられましたが、彼らの言葉が途切れるとくるりと向きを変え、黒板に図のようなものを書き始められました。そして再び黒板を背にされると、「君たちの言うことは二つの意味に理解される」と、トマス・アクィナスさながらに分析を始められました。意表を突かれて学生たちはたじろんだようでしたが、次第に苛立ってくる様子が見て取れました。

とその時、また後の扉が開き、梵文学の大地原先生と英文学の御輿先生が靴音を響かせて教室に入ってきました。そして対決姿勢で構えている学生たちの後方から教壇の山田先生をしばしご覧になった後、大地原先生が口を開きました。

「君たち、授業の邪魔をするなら僕の授業にしたまえ。この先生は僕の尊敬する山田晶先生なのだ。この先生の授業だけは邪魔しないでくれ。」

学生委員のお二人の先生の態度に感じ入ったのか、山田先生の余裕ある態度に怯んだのか、乱入

した学生たちは黙って退室して行きました。固唾を飲んで成り行きを見守っていた私たちは、意外にあっさりと学生たちが去って行くのを見て呆気にとられていましたが、やがて先生は何事もなかったかのように再び口述を始められました。

その後お二人の先生方と学生たちの間にどんなやり取りがあったのか、私たちは知りません。私たちは先生方の友情と同志愛に感動するとともに、京大切つての勉強家であり紛争中も一度たりとも休講をしない伝説的な山田晶先生の下で勉強できる喜びと誇りを感じたのでした。そしてこの大学紛争は、哲学科の先生方が強い絆で結ばれていることを知る機会でした。それも学徒出陣を体験し苦しい敗戦を味わわれた辻村・山田・藤沢先生は特別でした。三人の先生はこの国のために亡くなった友人たちの分までという深い思いで、それぞれ研究に励んでおられるご様子でした。

私が哲学科に入ったのは日本が国を挙げて経済大国に向かってひたすら走っている頃でしたが、そんな日本の有り様を先生方は憂慮し、精神の秩序のために切磋琢磨の日々を過ごしておられました。辛い時代を真摯に生きてこられた先生方のお言葉には深い思いが籠められており、その厳しさには本当の優しさがありました。戦争の残酷な傷跡を生涯お顔に担われた田中美知太郎先生の温かさや最終講義の気品に満ちたお姿が思い出されます。そして、敗戦から間もなく、新しい日本の精神的使命を果たすべく創設された中世哲学講座（山内得立先生に協力されたプリオット先生からよく経緯をお聞きしました）の責務を忍耐強く果たされた高田三郎先生——広島で原爆を体験された先生は聞き取りにくいお声で訥々と授業をなさいました——のお姿が目には浮かびます。

（南山大学人文学部教授 西洋哲学史 1966年卒業）



京大で「学んだ」こと

平野 嘉彦

大学院の博士課程を中退してから、最初に勤めたのが地方公立大学だった。それから私立大学に移り、京大の旧教養部（のちに総合人間学部）に帰り、そして、いまは東大の大学院人文社会系研究科に籍をおいている。いろいろな勤務先を渡り歩いてきたせいもあって、それぞれの大学の違いについて、よく尋ねられる。もっともどう違うかと漠然と聞かれても、答えようがない。学部によっても、個人によっても、千差万別なのだから。結局、最初の公立大学では、入試の際に弁当が出なかった、つぎの私立大学では弁当が出た、京大ではまた出なかったの、これが国公立と私学の違いかと思っていたら、なんと東大では出た、などというつまらない返答をしたりする。しかし、世間では、そして大学教師のあいだでも、かなりステロタイプな先入見が存在していて、京大の研究教育は文献重視で学問的だが、東大は所詮、官学だとか、京大には反戦平和の伝統があるが、東大は権力におもねっているとか、京大の建物の汚さ（このごろはずいぶん綺麗になった）は、東京の某大手私学といい勝負だとか、それからこれは最初の認識とは背馳するが、京大の教育のずぼらさ加減は、関東の某旧国立大学と双壁であるとか、いろいろな言説が飛びかっているが、いずれもその真偽のほどは定かでない。しかし、とにかくどうかするといつも京大が引き合いに出されるようで、おそらくそれは、京大人が有している自意識と無関係ではない。どちらが原因で、どちらが結果か、それはわからないが。

いったい自分は、何を京大で「学んだ」のだろう

うかと、しばしば考えた。これも正確に言えば、京大文学部で、である。文学部でないと「学べ」ないようなことを、京大で「学んだ」という思いが、いつもわだ



かまっていた。それはこういうことだったのだろう。教室ではほとんどおめにかからなかったあの先生は、授業をほとんどしなかった。ものによっては、年間、一度もないことがあった。4月早々には、一応、休講通知が出るのだが、そのうち出なくなった。しかし、教室へ行ってみても、授業ははじまらなかった。掲示を張りに来る事務室のおばさんをつかまえて、聞いたことがあった。「あのう、……先生の休講通知が出なくなったんですが、それでも授業がないんですが、どうなっているんですか」と。すると、おばさんは答えた。「さあ、どうなっているんでしょうね。まあ、授業されるときは、また開講通知をお出しになるでしょう」と。そして、結局、最後までなかったりした。その先生には、こういう神話が伝えられていた。どうしてそんなに授業をなさらないのですか、と、ある学生が尋ねたところ、文学なんて、大学で教えるもんじゃない、という答えが返ってきたとか。文学の創作技法を教える大学もあるが、しかし、原理的には、文学なんて、大学で教えるべきものではないことくらい、いわれなくてもわかっている。おそらくそうしたこともから「学んだ」ことは、創作としての文学の話ではない、まさに学問としての文学を成り立たしめつつ、圍繞している深淵だった、といえるだろうか。シラバスだの、自己評価だのと煩わしい、昨今であればこそ、それは私を考えこませるのである。

（東京大学大学院人文社会系研究科教授
ドイツ語学ドイツ文学 1967年卒業）

歴史を語る学生便覧

頼富 本宏

今年6月末、7年近く闘病生活を送ってきた愚妻が、残念ながら力尽きて他界した。四十九日が瞬間に過ぎ、秋の訪れとともに百か日を済ませた頃、気持ちも多少落ち着いたので、久しぶりに書斎に入って古い引き出しを整理していると、偶然にも昭和41年度の京都大学文学部学生便覧が目にとまった。そこには私が3回生として、教養部からいよいよ学部に入った年の講義科目と担当教官名がずらりと並んでいた。

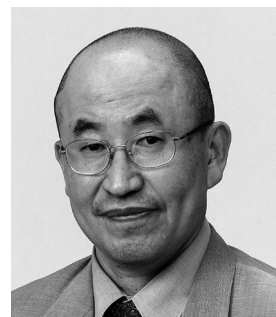
私が専攻として選んだのは、全国の数ある国立大学の中でも、京都大学のみが独立した専攻講座を持っている仏教学講座であったが、基礎言語としてサンスクリット語を用いるという関係で、同じ哲学科である印度哲学史、さらに文学部に属するもののサンスクリット語を主題とする梵語梵文学専攻と共同の印度学研究室に属していた。最近よく言われる「学際的研究」とは少し異なり、むしろ同族志向の色さえ濃かったが、一種独特の研究・教育システムを作り上げていた。

私の所属していた仏教学は、当時26あった文学部の専攻の中でも小規模なクラスで、毎年1人か2人の学生が来れば上出来であった。しかし、なぜか私たちの学年が学部に進んだ昭和41年度は、4人の「大所帯」であった。その後は、いわゆる大学紛争の波に京都大学、そして私たちの研究室も飲み込まれていったが、その内の三人は、その後大学院を修了している。

学生の数と質はともかく、昭和40年前後の印度学研究室は、伝統的な学風を遺しながらも近代的文献学研究の発展期にあり、テキスト校訂の成果を踏まえた上で、しかも緻密な思想研究によって中観・唯識、さらには仏教論理学などの領域において、世界的レベルを築き上げていたと言って

も過言ではない。

後に「三羽鳥」と呼ばれた梶山雄一（仏教学）、服部正明（印度哲学）、太地原豊（梵語梵文学）の当時の3助教授の開講科目（研究）



を見ると、「後期中観哲学研究」（梶山）、「中期Upaniṣadの研究」（服部）、「サンスクリット専門学文献の性格」（太地原）となっている。いずれも脂ののった時代であったことを彷彿とさせる一方で、海外での集中講義に忙しく、どの先生も1年の半分開くらは日本におられない様子だった。

とくに仏教学に限って言えば、三俊英の年長者として長尾雅人教授がおられ、仏教学の研究と教育に拮抗りと深みを形作っていたことは疑いない。長尾先生の文学部講義科目「仏教学講義」は、当時教養部2回生からの履修が可能だったので、前年度からすでに受講していたが、アメリカのウィスコンシン大学の集中講義から帰国された後期の研究授業は「空と空性」についてであり、白髪の先生の口からゆっくりと語られる奥深い空の思想に、時間の経つのを忘れたことを鮮明に記憶している。

神戸の寺院子弟として育った私は、最終的には仏教学専攻の門をたたいたが、決断を下す直前までは東洋史学にも大変興味があった。高校の社会科学の教師が京大文学部の卒業生ということもあったが、高度経済成長が始まった昭和36年頃に中央公論社から刊行された『世界の歴史4・唐とインド』（塚本善隆著）に説かれる人間味あふれる歴史の展開、とくに歴史の荒波に翻弄される仏教と仏教僧に大きな関心を持った。

幸い文学部の仏教学専攻は、以前から人文科学研究所、とくに東方部との深い関係があった。私が仏教史、とりわけ中国仏教史にも興味を持った直接の動機である『世界の歴史4』を著した塚本博士も、私が入学した年度の3月まで人文科学研究所の教授であった。

残念ながらスレ違いに終わり、直接授業に出ることはなかったものの、これまた幸いなことに、後継者の牧田諦亮先生が研究科目として「雲棲株宏の研究」を開講しておられたので、数年度にわたって受講した。

ちょうど3回生となった昭和41年度からは、他専攻の科目も受講できるようになり、しかも選択科目の単位にも読み替えられるので、仏教学専攻の必須科目がない時間帯には、東洋史学と人文地理学、ならびに仏教学とクロスオーバーする分野の多い美学美術史の科目を確か受けたはずだ。

記憶を辿って黄色く変色した学生便覧の頁をめくると、懐かしい先生の名前とその講義題目がぎつぎつに出てくる。東洋史学方面では、佐伯富「東洋史概説」、藤枝晃「敦煌写本総説」、日比野丈夫「中国歴史地理」。美術史方面では、長広敏雄「隋唐の文物と歴史」、上野照夫「東洋における宗教遺跡とその美術」、佐和隆研「日本美術の諸問題」等々。運命のいたずらか、当時は軽い興味を覚えて受講した後者の分野に、20年後には専門家の一翼に連なることなど、その時は想像もつかなかった。

仏教学方面に話を戻すと、諸先生の講義や研究をいささか語学面で苦労しながら受講したが、4

回生での卒業論文では個人的に関心の深かった「インド密教」をテーマに選んだ。指導教官の長尾教授と梶山助教授のアドバイスで、その分野の専門研究者を求めて高野山大学や種智院大学へ赴くことが多くなった。また具体的な研究方法論としても、「密教」は他の仏教諸派と比較しても仏像・仏画・マンダラなどの表現された資料や聖性化現、さらには、聖俗合一を意図した儀礼資料にも目配りする必要が生じてきた。

大学院修了後、同じ京都の南に位置する五重塔のそびえ立つ東寺山内にあった種智院大学に縁あって奉職したのちは、西ヒマラヤのラダック地方や東インドのオリッサ地方などに密教文献やマンダラ資料を求めて現地調査に出向く機会が増えたが、このような一種学際的な、あるいは複合的な研究方法をお許し頂いたのは、学士院賞を受けた『居庸関』、研究史上大きな成果をあげた「インド仏教美術遺蹟調査」などでフィールド研究に対しても理解の深かった長尾・梶山両先生の学恩であると、いまでも感謝の念を禁じ得ない。

晩秋の陽光差し込む書齋で、久し振りに手にした学生便覧（講義題目）は、40年の歳月を一気に飛び越えて、母校の重厚な存在感を思い起こさせてくれた。

（種智院大学学長 仏教学 1968年卒業）

京都大学とシカゴ学派

宝月 誠

大学に入学した頃、授業のテキストでデューイ『経験と自然』を読んだ。内容はほとんど正確には理解できなかったが、断片的ながら示唆的な言葉が印象に残った一冊であった。当時、社会学は哲学科の一専攻であり、社会と人間に対する根源的洞察と現実の社会状況への具体的調査の両立を特徴としていた。といっても、中心に据えられたのは、前者の方であった。大学院を修了して10年ほど後、文学部の教員として赴任したとき、今は亡き中久郎先生から、開口一番、言われたことは、「あなたも社会学の理論や学説をしっかりと勉強なさい」ということだった。もっとも、中先生が名誉教授になられてからそのことをお話ししても、「そんなこと言いましたかね」とお笑いになるだけだったが……。当時、私は、自分にそのようなことができるのかどうか正直不安であった。自分には犯罪、非行、逸脱といった具体的な問題により惹きつけられるものがあったからだ。

今日の世界においては、学説や理論を研究対象に選ぶものは少数派である。代わって、微細な社会現象や自分探しあるいは、二次的資料にもとづく歴史研究などが主流となってきた。身近な、等身大のテーマへの関心の増大という全国的な趨勢が強くなればなるほど、逆に私自身は理論や人間存在への根源的考察に対する欲求が高まっていった。別に高邁な使命感をもっていたわけではないが、現実と社会の根源的考察を同時に射程に入れる研究へと自然に研究の方向性は定まっていったように思う。こうした転機のかなで再会したのがデューイだった。

大学に職を得てしばらくのあいだ、デューイの世界とは無縁であったが、シカゴ学派の社会学を研究するようになって再びデューイの書物と接

する機会が増えてきた。シカゴ学派は、戦間期のアメリカ社会の動態を社会の周縁部から克明に記述分析する学として登場した。だがそれは、21世紀の今日の社会学に対して、なお新しい刺激を与えている知的営みであり、私たちは京都を拠点として、若い研究者たちと協同してこのシカゴ学派の研究会を長年組織している。それは、哲学的思考と社会学の実証の結合という京大社会学が育ててきた知的系譜上に位置づけられる営みといえるかもしれない。

デューイは G.H. ミードとともにシカゴ学派社会学の形成に影響を与えたといわれている。ただしこの種の学説史の「常識」を鵜呑みにするのではなくて、疑ってみることも必要である。シカゴ学派の一連のモノグラフとデューイやミードの著作を読み比べてみて、当時の社会学に彼らがどれだけ直接的な影響を及ぼしたのかは、出版された文献だけを調べている限りでは、正直なところよくわからない。少なくとも彼らのプラグマティズムがシカゴ社会学の公式の思想的バックグラウンドとなっていたとはいえないだろう。当時のシカゴ社会学は多様で、統一された理論・方法論があったわけではない。もちろん、個人的には影響を受けた一部の社会学者（たとえば、ブルーマー）もいたかもしれないが、その場合でもアメリカ的な社会学の独自性を主張するために、デューイやミードの思想を利用した節がある。シカゴ学派の知的基盤は、じつのところ、さまざまな思潮が混交しつつあるある種の知的創発状況にあったといつてよい。

この混沌状況を精査するために、私は、シカゴ社会学とデューイ、ミードとの関連について、シカゴ大学レーゲンスタイン図書館のアーカイブズで手紙や記録資料を探してみた。そこに、新しい解釈が生まれる可能性があると思ったからであるが、



学説研究のまねごとになった。こうした作業とは別に、シカゴ学派の研究を通じてあらためて学んだことが二つある。ひとつは人間の行為を理解するためには、「問題状況」の解決のために試みられる「思考」のみならず、その背後にある「衝動」や「習慣」の緊張関係が果たす役割を考慮する必要があるということである。人間がさまざまな利害状況を合理的に判断して行動を行うという、合理的選択理論が主流を占めている昨今の社会学において、この幅広い行為論の視点の復権は重要な意味をもつだろう。さらに第二に、デューイは周知のように長命であったが、晩年になっても精神的に著作活動を続けており、八十七歳で幼馴染と再婚している。うらやましい限りの人生である。この生き方からもわかるように、「問題」と対峙し、その実践的な「解決」を見出す姿勢は、彼の人生そのものに貫かれていたといえるのかもしれない。彼のプラグマティズムは、たんに学問分野に限定されるのではなく、自らの生活世界における実践の指針でもあった。この点は、今日の社会学の方法論を再考するうえで重要な示唆となるだろう。

私の場合は、もともと長い間、関心を有していた「逸脱の研究」の延長に「シカゴ学派の研究」

をおこなってきた。この両者に共通することは「社会の周辺や底辺から社会を眺めたときに、なにが見えてくるのか」という明確な問題意識である。社会のメインストリームの立場でなく、周辺から現象を眺めようとする立場は、組織の一員としては決して居心地のいいものではないかもしれない。しかし、社会を研究する上では必要なことを、納得させてくれたのはシカゴ学派であった。そしてその研究を支え展開させていったのが、京大文学部のなにごとにも寛容な知的土壌だったのである。

こうした「周辺性」の意義にとどまらず、デューイは先に述べたように「幅広い視点からの行為の把握」と「問題解決の実践的な姿勢」を保つことの重要性を教えてくれた。それは、社会学に、より根源的思考と実践的志向を取り入れるという、本教室の伝統にも繋がるものだろう。はた迷惑も考えずに「生涯現役」などというつもりはないが、今後もできる限りこうした視点を大切にしていきたい。

以上のことが、文学部に身をおきながら、デューイやシカゴ学派社会学の研究を通じてささやかながら自分なりに学んだことである。

(立命館大学教授・京都大学名誉教授 社会学 1969年修士修了)

伝統と新たな潮流の迫間で

金田 章裕

1、ディシプリンの中から

昭和62年度に、文学部地理学講座の助教授として赴任することとなった時、その伝統の重さと、責任の大きさに押し潰されそうな気持を持ったのが正直なところであった。自ら自由に研究をしていた歴史地理学という小分野と、地理学という専攻・講座との関わりも一つの懸念であった。歴史地理学は、地理学というディシプリンの世界的な展開の中では、小さな一流でしかなかったからである。

ところが赴任して間もなく、地域環境学講座の新設に向けて、各種の書類作成と、文部省との折衝に忙殺されることとなった。大きな枠組みはすでに、当時の応地利明教授の下でできてはいたが、同教授の在外研究期間中のことでもあり、行政側からの意見とまともに対応せざるを得ないという最初の経験でもあった。

しかもこの折、従来の哲・史・文の3学科に加え、文化行動学科を新設するということともなっていた。これも加わって、歴史地理学というサブディシプリンと、地理学というディシプリンとの関係のみならず、他のディシプリンとの関係にも直面することとなった。

2、大学院重点化の流れの中で

京都大学では、平成4年度に法学部が大学院中心の制度への移行、いわゆる大学院重点化を実施し、やがて文学部でも、中川久定学部長の下に委員会が設置され、具体的な検討に入った。「若手」ということでこの委員の一人となり、文学部の新しいあり方をめぐる議論に参画することとなった。

この折の基本方針の検討は、極めて重要であったと思われる。文学部の伝統ある各ディシプリン

を大切にしつつ大学院重点化という新しい潮流に対応することを大前提とし、その結果として現在の大学院5専攻、学部1学科、大講座制のシステムが成立し



た。旧来の哲・史・文の表現に代わって採用されたのは、文献文化学、思想文化学、歴史文化学、行動文化学、現代文化学という新しい表現であり、委員会の議論の中で検討された結果であった。

学部の改組が先行し、重点化の実現は平成8年度のことであった。この大学院重点化の副産物は、大学院重点化と実験講座の増加による予算増、教養部改組に伴う人員配置の変更分による新講座の増設などであり、特に前者は破綻寸前であった文学部予算の窮状の改善に寄与した。

この後、セクシャルハラスメント事件が発生し、その担当の窓口委員、調査委員等として、同僚の教授の懲戒にかかわらざるを得なかったことが想起される。重く、苦しく、また決して繰り返したくない過程であった。

その途中で、「寝耳に水」の選挙結果で文学部研究科長・文学部長に選任され、平成13年4月からその任に着くことになった。最初の任務の一つは、この懲戒にかかわる制度上の具体的な手続きであった。

一方で、非才ながらも改めて文学研究科・文学部、あるいは人文科学・人文学をめぐる社会的潮流を眺めた時に、まず不可欠なことの一つは、研究・教育にかかわる状況の社会的発信であろうと痛感した。その為の事業を始めるべく委員会を構成し、検討を進めていただくこととした。この事業は次の紀平英作研究科長・学部長の下で実現され、平成14年6月に「京都から世界へ——知の次なる一歩」と題するフォーラム、翌年3月の『知のたのしみ 学によろこび』（京都大学文学部編、岩波書店刊）の出版に結実した。

3、国立大学法人化の流れに棹さして

文学研究科長・文学部長の任を1年も果たさない内に、平成13年12月16日から長尾真総長の下で副学長を務めることとなった。まったく予想もしない展開に、感慨を覚える余地すらないままの就任であった。2人の副学長の1人であり、担当は将来構想であったから、全学の実に多様な課題と直面することとなった。個別の課題を別とすれば、間もなく具体化への道を歩み始めた国立大学法人化と、新たに導入された21世紀COEプログラムが、文学研究科・文学部にもかかわる全学的課題であった。

法人化という新しい法制度の成立過程の中で、正確にはその予測の中で、法人としての制度を構築するというのが前者であり、15研究科・10学部・12附置研究所をはじめとする京都大学の多様な部局が、十分にその機能を発揮し得る組織への移行の模索がその内容であった。法人化という方向性は一方で、研究科・学部という基礎的かつ長期的な研究・教育体制にとっての危惧をいだかせるものであったから、その対応は極めて重大であり、文学研究科・文学部のような、とりわけ基礎的な分野からなる部局では、この点はとりわけ重要である。

21世紀COEについては、文学研究科を主とするプログラムが2件採択される結果となり、現在すでにその成果を問われる時期となっていることは改めて記すまでもない。

平成15年12月に尾池和夫総長に代わった後も、引き続き副学長にとどまることになり、平成16年4月から翌年9月までの1年半は企画・評価担当の理事の任にもあたることとなった。法人としての大学の意思決定の基礎となる企画・財務・施設整備の三委員会のうち、企画委員会の運営も主要な任務の一つであった。新しいシステムの運用に心を砕いた1年半でもあった。

4、伝統と新たな潮流の迫間で

この間、一貫して伝統の重さ、重要性と、押し寄せる新たな潮流の迫間に翻弄されてきたように思われる。

その中で痛感するのは、文学研究科・文学部を構成するような基礎的学問に属するディシプリンの維持の重要性であり、にもかかわらずそのさらなる展開の必要性である。

ディシプリンの重要性は繰り返すまでもないが、教育にとっては殊更そうである。ただそのことの現代社会での理解が十分とはいえず、そのための発信が不可欠であると思われる。

それは、さらなる展開にもかかわる。さらなる展開は、それぞれのディシプリンで異なることであろうが、一つの可能性は絶えざる再定義であるかも知れない。それが可能であるならば、同時にさらなる展開の実現に直結するのではないだろうか。

(京都大学大学院文学研究科教授 地理学 1969年卒業)

大学と聖性

稲垣 真澄

東京の地霊地域を訪ねる、というちょっと話題にもなった本を読んでみた。地霊などというと、はなから際物視する人も少なくないが、感じる人にはリアルに感じられるらしい。

かねて抱いていた疑問、東京ではどうして大学と墓地とは互いに近くにあるのか、という疑問ともいえぬ軽いひっかかりに、その本は思わぬ示唆を与えてくれた。高度成長期に郊外に移転していった学校を除くと、たしかに東京では、青山学院や国学院の近くには青山霊園が、学習院の近くには雑司ヶ谷霊園が、東大の近くには谷中霊園がそれぞれ控えている。大学だけではない。明治になって初めてつくられた近代的精神病院も、いずれもそれらの霊園の近くだったことと併せて、面白いことと思われ、ひっかかりになっていた。

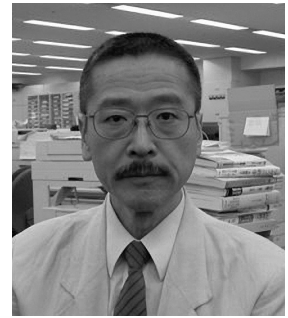
で、その本によると……。東京には坂が多い。洪積台地と沖積平野が複雑に入り組み、その境界が坂をつくるからだが、地霊の感じられるのも決まってそうした場所だそうだ。海波が直接洪積台地を洗っていた縄文海進期に、岬のように海に突き出た地形は縄文人たちの葬送地だったという。その記憶は、海が遠のいた弥生期以降にも残り、一帯は依然として葬送地でありつづけ、古墳時代には古墳が、鎌倉初には神社が、江戸初にかけては寺院が築造されることが多かった。要するに死の気配の消えない地域なのだ。

先の三霊園はいずれもそうした洪積台地上の縁辺にあり、明治以降、漂う死の気配に呼び寄せられるよう付近につくられたのが大学と花街にほかならないという。花街はともかく、なぜ大学が？

大学こそ先人の、つまり今は亡き人たちの達成を継承するところだから。

落とし話のようにいささかあっけない説明だが、

ある種の本質はついてるように思う。大学は文（文化といってもいい）に関わるものである以上、世代を超え、死の向こう側にあるものをも常に視野に収めねばならないからだ。実用性、社会性、国際性、先端性など一つの時代内の徳目だけでなく、それらを超える気配、聖性をも帯びねばならない。



ここで大急ぎで、京都のことを思い出してみる。京都の聖地はどこだったか。葬送地というならすぐにも東の鳥辺（部）野、西の化野、北の蓮台野が浮かんでくる。清水寺辺の鳥辺野と京大とは近いようにも感じられるし、狭い京都にあっては遠いようにも……。

いやいや、葬送地だけには限るまい。東一条から学校正門にいたる道はそのまま吉田神社の鳥居に通じ、あたかも参道のような具合だったし、大学の代名詞的地名である百万遍は、まぎれもなく百万遍念仏のいいである。すでに十分、大学は宗教的雰囲気浸っていたようだ。東京の諸大学が葬送地に呼び寄せられたのなら、京大はやはり古い社寺に誘われたのか。

そういえば、文学部博物館（正しくはなんと呼んだか。今はどうなっているのだろう）の前庭には、どこかの古墳から出た死者を納める石棺が置かれてもいた。あれもたしかにある種の空気をつくり出していた。

ここからは夢に属する。国立大学が法人化され、大学間に競争がしいられる時代に、京大の、少なくとも文学部の特質として、先ほど述べた時代内の諸徳目だけでなく、時代を超えたなんともいえぬ聖性が打ち出されるなら、そのことがかえって世俗的な特色ともなるのではないか。いっそのこと、古いお寺（の建物）を購入して、そこで講義が行われるなどの場面を想像する。

（産経新聞編集委員 宗教学 1972年卒業）

Struggle for Freedom

近藤 等則

四国今治市の高校を卒業して瀬戸内海を渡り、京都に住み始めたのは1967年の春だった。造船か自動車のエンジニアになりたくて工学部精密工学科に入学した。

大学に入ったらジャズをやりたかった。すぐ軽音楽部の新入部員となってモダンジャズのコピーを始めた。ジャズ喫茶がよいも始まった。

1回生の年の10月21日、大学は学生ストとなった。当時の佐藤首相がベトナム訪問するのを阻止するためだった。「大学って凄いな。学生が授業ボイコット決められるんだ」とノーテンキに思いながら、同じ高校から同じ学科に入った友達の下宿で遊んでいると、その下宿で一人だけTVをもっている大学院生の声が2階からきこえた。

「京大生が機動隊になぐり殺されたぞ」

TVにうつった殺された京大生の顔を見て驚いた。一週間程前、その友達と一緒にオルグされた山崎だった。

「自分のやることに命をかけてるヤツが同じ年頃にいるんだ」と思ってボー然とした。

大阪万博の年1970年正月明けから、大阪梅田のジャズ喫茶“インタープレイ8”で、プロミュージシャン達と毎晩演奏することになった。大学は正常の授業へともどっていったが、工学部の授業にもどるつもりはなくなっていた。

鍛冶屋の息子に生まれ育ったせいでもないが、エンジニアへの道には自信があった。それに比べミュージシャンへの道は、サッチモやマイルスの足許にもおよばない自分の能力のなさにガク然とするのだった。

悩んでいたある日、自分が死ぬ瞬間を想像してみた。どっちの道に進んだ方が笑いながら死ぬのだろうか、と。

「ミュージシャンになることに決めたから京大は退める」と両親に話したら、父親は「勝手にしろ」と言ってくれたが、母親に「トランペット吹くんは若い時はカッコええかもしれんけど、年取ったら見苦しいよ。とにかく卒業だけはして」と泣きながら言われた。



当時、学生の悩みをきいてくれる“学生相談室”というのがあった。両親と話した後すぐ四国から京都に帰って、「授業に出なくても卒論さえ書いて卒業させてくれる学部に転学部出来ないでしょうか」と相談にいった。

“学生相談室”の担当教授と個人面接の結果、寛容にも文学部英米文学科に転学部させてもらえることになったのだった。アメリカ黒人文学のジェームス・ボールドウィンが好きだったので、彼に関する卒論なら書いてみたいという思いもあった。

ミュージシャンになりたいために転学部したんだから、不真面目きわまりない学生だった。トランペットは西部構内で明け方まで練習したが、授業の方は省エネもいいところだった。たまに講読の授業に出て、メルビルの「白鯨」の音訳をやられて勉強不足をさらけだしていた日々のことを思い出す。一番の冷汗モンは卒論の最終面談だった。

「英語でメシを食うつもりじゃないんだろうね。」と教授の一人にきかれた。

「メッソウもないです。ミュージシャンになります」

「エッ、どんな音楽？」

「ジャズです。いつか自分の音楽をやりたいですが……」

ロクデモナイ僕の卒論を通してくださった御輿先生他の教授達には今でも感謝するばかり。先生達の寛容さに個の自由の尊厳をみとめる京大の精

神の伝統を感じたといえは手前味噌にもほどがあるが……。

卒論のタイトルは“Struggle for Freedom”。今から思うとヒットラー並みのタイトルだが、“自由”をテーマに、ジャズをからめたジェームス・ボールドウィン論だった。

こうして 1972 年春、僕自身の“自由へのたたかい”が始まった。つきあっていた彼女とカケオチ同然で東京へ。京大軽音先輩に助けられて板橋区の幼稚園に住み込み、ミュージシャンへの道がはじまった。

あれから 33 年。この 10 年余は東京とアムステルダムの間を行き来しつつ、地球の大自然の中

で一人電気トランペットを即興演奏する“地球を吹く”(Blow the Earth)という音楽作業に集中してきた。アコースティックトランペットを自己改造でエレクトリック化し、フリージャズから“地球を吹く”へまでイメージーションを拓げてきた 33 年余。

音楽の“自由”を求めて 33 年間夢中でやってこられた原点が、文学部に出したあの卒論にあるのかと今になって思い出される。

京大文学部 100 周年おめでとうございます。その末端の一人であることを誇りに思うと同時に、21 世紀の京大文学部の更なる飛躍を願ってやみません。

アムステルダムにて 2005 年 9 月 29 日

(トランペット奏者 アメリカ文学 1972 年卒業)

「おもしろい」の一言

鷺田 清一

わたしが京大の文学部に入学したのは、高校時代から書物でそのお名前にふれていた桑原武夫先生、貝塚茂樹先生、吉川幸次郎先生らが京大から去られたその直後のことだった。そのことを知ってちょっと拍子抜けしたが、かわりに、入るなり「闘争」の荒い洗礼を受けることになった。教養部時代は、とくに二年目はほとんど授業がなく、またわたしたちのクラスは「闘争」が終息に向かうなか、全学で最後までストライキを敢行し、けっきょくクラスメイトと「勉強」したのは、もっぱらバリケードのなかと百万遍の喫茶店と友人の下宿でだった。

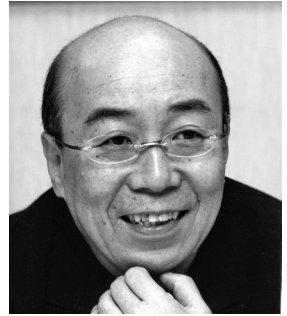
哲学科に進もうなどという気はさらさらなかったにもかかわらず、『資本論』を全巻読んだのはこのときの「読書会」においてであり、文学部、さらには大学院に進学してからも、カントの『純粹理性批判』『実践理性批判』とロックの『人間知性論』とライプニッツの *Nouveaux Essais* とヘーゲルの『論理学』は、これらの会で読み通した。この会に参加したなかには、法学部や工学部の学生もいた。わたしも克明にノートをとったが、いまは長野で哲学の教員をしている友人のN君などは、ドイツ語の勉強をこれですと言って、ヘーゲルの『論理学』の原文を数十冊のノートにぎっしりと筆写していた。

そんな修業時代にあって、何人かの知人から伝説として仄かに耳に届いた言葉があった。桑原武夫先生の「おもしろい」という一言だ。「秀でている」でも「できる」でもなく、「おもしろい」。これが桑原先生の最上級のほめ言葉だったというのだ。真偽のほどは知らない。けれども、この一言で、京都の学風に憧れた高校時代のじぶんの直感がまちがいでなかったと思った。

「おもしろい」。これは、これまでの通説やそれらが依拠している基盤そのものを揺るがし、くつがえす徴候を見てとったときに発せられる言葉だ。「秀でている」や「できる」はいま流通している基準のなかで測られた評価でしかない。とんでもないことを言いだすやつを放逐したり、飼い慣らしたりするのではなく、野放しのままにしてくれる場所、それがここにあると思った。のちに理学部や農学部出身の研究者たちと共同研究をやることになったときも、この連中も京大のなかの「おもしろい」場所で育ち、鍛えられてきたのだなど、学生時代は何のつきあいもなかったのに、妙な連帯感をおぼえた。

「おもしろい」と褒められたことは、実のところ、文学部では一度もない。いや、精確に言えばちょっとだけある。でも、ほんとうに「おもしろい」のかどうかを確かめていただく前に、その先生は亡くなられた。テキストの読みについて徹底的に鍛えてくださったこの先生の「方法」は、「おもしろい」と並ぶ、もうひとつの京都の学風だったはずである。だから、いまでも大学の演習ではこの「方法」を受け継いでいる。レベルはうんと低いに決まっているが。

テキストの読みということでは、忘れられない思い出がある。学部時代に習ったラテン語の週4時間の授業。これは大谷大学の水野有庸先生にみっちりしごかれた。その後、哲学研究にあまり生かせなかったのもちっとも身につけていないのだが、20代の頃、フッサールの間主観性をめぐる草稿群を分析していて、1920年代のある時点まで、フッサールが *primordial* という術語を *primordial* と表記していたことに気づいた。この小さな小さな発見を論文の注として書きつけようとして——ちなみに当時、ドイツ現象学の彗星のような存在であったクラウス・ヘルトの同じ指摘はまだ公表されていなかった——、*primordial* が



正しい表記であることを確認しようと、無礼も省みず質問の手紙を水野先生にお送りしたときのことである。先生は、こんな低次元な質問をしてくるとは情けないにもほどがあると厳しくたしなめられつつ、けれどもなぜ *primordial* という表記が間違っているのか、その根拠を便箋に十数枚、小さな、けれど熱い字でしたためてくださった。最後の最後のところで挫折してしまった劣等生のために、である。

さて、「だれそれにおける何々の問題」風の哲学論文を数編書き終え、私立大学の哲学科に席を得たあと、わたしはその「おもしろい」を小さく学会内のことに約めているじぶんに気づいた。そして、ただの天の邪鬼というだけのこともかもしれないが、哲学研究者たちが目もくれない事象にあえて主題を移していった。〈身体〉〈他者〉といういまとなってはあたりまえの主題から、〈モード〉〈顔〉〈皮膚〉〈所有〉〈聴く〉〈老い〉〈ケア〉、そしてなぜか現在の哲学研究者が避けている〈国家〉までである。これらの書き物は、学会では温かく黙殺され、哲学の〈外〉にいるひとたちからちよつとばかり「おもしろい」と言っていた。ただひとりの例外は、ドイツで二年間教わった現象学者の B・ヴァルデンフェルス博士。二度来日された折り、ドイツ語でのわたしの不十分な語りを聴いて、わたしがやろうとしていることを「オモロイ」と、これはウインクで合図してくださった。

いや、もうひとり例外の先生がおられた。はじめてわたしがモード論の本を書いたとき、それまで現象学についてのわたしの論文を、年に何回か膝をつけるようにして論評してくださった東洋大学の新田義弘先生は、フッサールの草稿の研究を

はみ出してしまったわたしが突如はじめた仕事を微かに寂しそうな面持ちでご覧になったあと、一冊の書物を郵送してくださった。それは、フッサールの助手を務めたオイゲン・フィンクが私家版として出した *Die Mode* という、軽妙なイラストの入った瀟洒な本だった。フィンクの未亡人から新田先生に贈られた大事な大事な本だった。碩学フィンクがこのような本を書いていたなどは、当時、新田先生以外に知るひとはなかったと思う。ドイツでも知るひとはほとんどなかった。あるいは、この本には新田先生ご自身がとまどわれていたのかもしれない。とはいえ、わたしにとってこれほどの激励はなかった。

世紀の変わり目に、桑原先生の「おもしろい」という一言にじかにふれた大先輩方から、桑原先生の名を冠した賞をいただくことになった。それが間違いでなかったかどうか、いまだに不安なわたしであるが、「おもしろく」なければ学問ではないと思い詰めて仕事をしてきたわたしにとって、この授賞は間違っている、間違っていたかぎりには書けたといまは思いたい。

わたしの勤務先はいまは大阪大学である。かつて倫理学講座だった看板をいまは「臨床哲学」に書き換えている。全国、他にはどこにもない看板である。同じ京大哲学科出身の同僚とともになぜこんな取り組みに最後の十数年を投じるようになったのかについて、いまはもう書く紙幅がない。哲学の地盤そのものを別のところに移し換えたい、ただそれだけの思いで、哲学の〈外〉とさしで向きあっている。それを天国の桑原先生が「おもしろい」と膝を打ってくださるのを夢見つつ。

(大阪大学理事・副学長 倫理学 1972年卒業)

1970年代文学研究科に学んで

生井 智紹

高野山大学卒業後すぐ京都大学大学院に入学したのは、学生運動の動乱の直後 1970 年であった。同じ年に入学したフォーク歌手でもある三浦久氏は、その当時のことを彼のホームページに記しておられる。文学部長であられせられた長尾雅人先生の当時の様が、高橋和巳氏の『わが解体』に描かれている。学生たちの精神が、もっとも活気にみなぎっていた時期であったかに思える。高度成長の真只中で、学生たちが精神的にもっとも鍛錬がなされた時期を、文学研究科のインド学研究室という世間離れしたような場で過ごした。三島の割腹の知らせも、その研究室に友人がもたらした。日本は大きく転回していた。

文学研究科の哲学研究、文学研究の分科を超えて、インド哲学、梵語梵文学、仏教学の各専攻は、インド学としてまとめて研究室を構成していた。長尾先生が 1 年後に退官され、あとは、大地原豊、服部正明、梶山雄一教授という三巨頭のもとでその研究室は運営されていった。社会の変動のなかにあっても、学問的にはさほどの混乱を招くこともなく、いい意味での徹底的な原典主義のアカデミズムの学風に馴らされていった。あくまでも、学生としての生活から見ても、本気に学問に打ち込んでいけた時期であった。

学生運動の収束期にあっても、演習室はロックアウトされていることも多く、黒谷の白崎顕成氏の御自坊で、演習が行われたりもした。研究室にはいつも演習予習の灯夜が遅くまで灯り、旧東館四階の暑い部屋には、夏休みでも誰かがいつもサンスクリット語かチベット語の辞書を繰っていた。先輩の下宿では、次の演習課題の予習会が必ず行われて、授業参加者による授業の質維持の徹底が図られていた。そのような気風が、全国からイン

ド学を志すものたちをそこに集わせていたものと思われる。

サンスクリット語、インド哲学、仏教学と、いずれも、すぐさま世間のお役に立つとは言い難い学問の領域である。ただ、当時は、国際的に見ても、その分野では世界をリードする三巨頭のもとで、インド学の研究室は、高みにむかっていた。原典研究は、漢文よりはサンスクリット語、チベット語という極めて特殊な言語が中心とされ、またインド学の専門は外国に権威者が多く、最新の研究は、ドイツ語、フランス語をはじめ現代外国語で書かれてあった。まともにサンスクリット語を学ぶためには、フランス語やドイツ語を、日独会館、日仏会館の夜学で学ぶことにもなった。世間的に見れば、役にも立ちそうのないサンスクリット語やチベット語で卒業後の生計の見通しはなかったが、得意なフランス語やドイツ語の教員ということで大学に赴任される先輩が多かった。

京都での大学院時代、わたしは、文学研究科で 7 年学んだことになる。学部からの友人たちは外国留学で研究室を離れていく者も多く、それに較べれば時間的にはけっこう長く在籍していた方である。仏教学専攻ではあったが、毎年インド六派哲学の一学派の基本綱要書を読む演習を続けておいでであった服部正明教授の演習は、六派すべて受講させていただく余裕があった。インド哲学専攻の方であっても、それができた方は多くないのではないかと思う。インド留学にあたって、さらに博士論文作成にあたって、それが大きな果報をもたらしてくれた。

昨今、国立大学の独立法人化にともなって、また実学、技術専門に特化するあまり、Liberal Arts 軽視の傾向が教育界に蔓延し、書を読み論議をするという学問の一番基本の部分を見失いがちな風潮が、現在の大学をとりまく状況にある。少なくとも、文学部は、むしろそれに歯止めをかけ



るべき役目を担っているはずである。

「philology なくして philosophy なし」と、友人が吉川幸次郎先生からお伺いしたお言葉を京都の学風として示してくれた。まさしく、学んだのは、そういう学問の方法であった。昨今、いい意味でのアカデミズムを、技術畑への警鐘として認識することなく、文学部は文献ばかり読んでいて世間様のお役に立たないからいかん、とのたまう御仁が勘違いも甚だしいことを平然とうそぶき、それを正しい批判であるかのごとくに蔓延させている。専門の実学をも成り立たせるための、総合的な人間の学において、語学と古典学ほど大切な学はない。医療現場をはじめ、先端の技術現場でも、今必要とされているのは、そういう古典を読み人の心の在りようを素直に読み取るこころの教育である。時空を異にしてもいのちと心を結ぶ術を教えることができるのは語学と古典学である。専門細分化された技術偏重の動向を補完する、まともな人間の基本として学ぶべきものを学ぶ環境は、'70年代文学研究科にあっては実に優れて整えられていたと思える。

帝大だからこそできる、あるいは帝大はだからいけない、とは少しい外れな批判かと思う。大学経営上、運営効率上という理由で切捨ててはいけない教育の基本の伝統はいかなる教育現場にあっても失われてはいけないと思う。教養学レベルで

それが行われるだけではなく、研究者レベルでも、その基本は徹底されてしかるべきものであろう。少なくとも、文学部唯野教授という卑下はあってはならない。私立大学の文学部の教授となって、世間に役に立ちそうもないサンスクリットやインド学を教えていても、学門・教育の根幹を一步たりともずれているとは思いたくない。教えることができるのは、書を読む楽しさと大切さである。

当時の大学の状況、学生の気質がそうであった、ということだけではなく、学問、あるいは教育とは、それができて初めて成り立つというものではないかと思う。とにかく世間の批判は、象牙の塔、アカデミズム偏重、文献学から実学へ、と喧しい。大学改革期の最中に大学運営に携わる責任ある地位について、教育・研究ということの基本にあるのが、ともに書を読むこと学ぶことの楽しさであることを、いまだからこそ、思い起こしてそう言える。

'70年代文学研究科で学んだことは、カリキュラムの内実以上のものである。カリキュラムの内容は各々多様であっても、それを裏付ける学ぶことの意義と学んだことへの満足がそういわせる。友人、先輩にはこの上ないほど恵まれていた。書を読み説く友が、いまでも多くの文学部で同じ思いを抱いて活躍しているものと思われる。

(高野山大学学長 仏教学 1974年修士修了)

京都の7年半

松沢 哲郎

18歳の春から26歳の秋まで、7年半を京都で過ごした。幼稚園から高校まで東京で、大学と大学院が京都。その後、霊長類研究所に就職して愛知県犬山市に移り住んだ。もう30年になる。本稿でもっぱら私事を語ることになり恐縮だが、京大文学部の一時代の雰囲気をお伝えしたい。

両親ともに小学校の教師をしていて、兄が2人いた。下町の教員寮で親子5人が身を寄せ合って暮らしていた。りんご箱に母がきれいに紙を張ってくれて、中に本を立てかける。それがわたしの勉強机だった。敗戦からまだ10年余り、当時の日本のごくありふれた家族の風景だっただろう。兄たちと伝書鳩を飼っていたのを憶えている。夕方の団欒で、「うちの子が今日……」と母が話すと、「うちの子たちは……」と父が応じる。「うちの子」というのは、それぞれが担任しているクラスの子どもたちのことだ。両親が共働きで兄とも年が離れていたので「鍵っ子」だった。当時、国立大学の授業料は月千円。公立の学校に行き、国立大学に進学することが、親孝行の早道だった。

昭和44年(1969年)入学である。いわゆる学園紛争の時代で、東大の入試がなかった。東大がないので京大へという同級生が多かったと思う。ただ漠然と、大学へ行って学問を生涯のしごとにしたいと思っていた。語学でクラス分けされた通称「L1」に属した。50人ほどのクラスのうち、現在、上原真人(文)、服部良久(文)、松浦茂(総人)、辻本雅史(教育)、若杉準治(人環)が京大で教鞭をとっており、池上哲司(大谷大学)も教えにきている。

最初の一年間、ほとんどまったく授業がなかった。あるのはクラスの自主的な集まりだけで、学生運動を主導しているセクトの演説が主だった。

文学部の同級生は皆おとなに見えた。「ベ平連」、高橋和巳、吉本隆明といった話題についていけない。教室の後方の黒板を背に呆然と立っていると、たまたま隣にわたしと同様に学生服の黒い上着をきた男がいた。さすがに当時でも珍しい。服装は気にかけないということなのだろう。どちらからともなく話しかけた。それが辻本だった。今も交友が続いている。



授業がないので、学生運動かクラブ活動が受け皿になった。両国高校では山岳部だったので、大学にも山岳部くらいはあるだろうと門を叩いた。今西錦司・桑原武夫・西堀栄三郎・梅棹忠夫・川喜田二郎といった人々を輩出したところだとは全然知らなかった。同じ学年には、東京のナンバースクール(旧制府立中学の伝統をひく日比谷や両国や戸山や西といった高校)がそろっていた。医学部の高木真一が同級生のリーダー格で、彼は「京大山岳部に入りたい」というのがそもそもの理由で京大志望だった。ヒマラヤに未踏の山々が残っていた最後の時代である。

西部構内にある部室に行き、山の本を読み、トレーニングで走る。大文字山を走って登り、走ってくる。銀閣寺山門を右に折れて法然院から南禅寺へ、賀茂川を北上して植物園へ、真如堂から黒谷へとコースはさまざま。大原の金毘羅山にも岩登りの練習によく通った。夜は、仲間の下宿に数人が集まって山行の計画を立てた。山へ行くための装備と交通費はどうしても必要だ。食費は極度に切り詰めた。製麺の過程で出るラーメンの裁断片(1kg5円)を山へ持って行くのだが、下宿でもそれを食べていた。銀閣寺交差点に「神戸屋」というパン屋があって食パンの耳を無料でいただいた。ヒマラヤ遠征のための募品で手に入れた缶入りの赤ん坊用粉ミルクを飲んでた。

最初は岩倉の農家に下宿していたのだが、同じ

クラスの成瀬哲生（現山梨大学）が誘ってくれて、下鴨の彼の隣室に引っ越した。彼の父も学生時代に同じ下宿だったという。押入れの壁に古い新聞紙が張ってあって、2・26 事件を告げるものだったのでさすがに驚いた。のちに、銀閣寺前の土蔵、さらには北白川仕伏町に下宿を移した。山の道具と本と寝袋しかないのでリヤカー（荷車）でじゅうぶんだった。

年間の山行日数は毎年 120 日を越えた。ただし京都にいる限りは授業に出た。哲学の授業は、デカルトの野田又夫、ヘーゲルの辻村公一、スコラ哲学の山田晶、ギリシャ哲学の藤沢令夫、倫理学の森口美都男。野田先生が、「哲学の使命は 2 つある。第 1 は、この世界がどうなっているかを知ること。第 2 は、世界のあり方がわかったとして、その中でわれわれはどうふるまうべきかを考えること」という主旨のことをおっしゃった。自分自身の眼で、耳で、この世界がどうなっているかをまず理解したいと思った。

「なぜ人間の眼は左右 2 つあるのか」「網膜像は倒立しているのになぜ外界は逆さまに見えないのか」、そういった問いを立て、科学的・実証的な事実をもって答えようとする心理学が新鮮だった。園原太郎教授（発達心理学）、柿崎祐一助教授（知覚心理学）、本吉良治助教授（学習心理学）の時代である。牧康夫先生のフロイトの講義が印象深い。自問自答するようにゆっくりと言葉を紡ぎだす。内容はほとんどまったく理解できなかった。ただ、重要なことを言っているに違いないという感覚は伝わってきた。学問に明晰さは必要だが、明晰なだけが学問ではない。物事を深く見つめることが重要なのだと思った。

4 回生の終わりに、ヒマラヤへ行く機会がめぐってきた。京大学士山岳会のヤルンカン（カンチェンジュンガ西峰）遠征だ。当時未踏の 8500m 峰。高木と 2 人、最年少の隊員に選ばれた。留年を決めてヒマラヤに行った。L1 の学友たちが「天寅」で壮行会を開いてくれた。インド・ネパール・パキスタンをまわって半年後に帰国した。ヤルンカンでも登頂者の 1 人が帰還しなかったのだが、帰国後、北俣谷、槍ヶ岳中の沢、カラコルム K12 峰と、さらに 3 つの遭難が続いた。自分自身も遭難し、1 年たらずで 9 人の岳友を失った。高木も K12 の頂上から帰ってこなかった。

大学院に進学した 2 年半の間、ネズミの脳半球機能の生理心理学的研究に専念した。ちょうど平野俊二先生が大阪市立大学から助教授として移ってこられ、その指導を受けた。先生ひとり生徒ひとり。とにかく先生より早く来て、遅く帰るよう心がけた。そうした研究に没頭するあいだは山のことを考えなくてすんだ。霊長類研究所の心理研究部門（室伏靖子先生）の助手の公募があって、平野先生はひきとめてくださったのだが犬山に赴任した。そこで 1 年後にチンパンジーというものに出会って、今に到る研究が続いている。

その後も、会議などで京大に行く機会が多い。文学部本館は立て替えられて姿を消し、時計台はきれいになった。行き交う学生たちも、心なしか穏やかで晴れやかな感じがする。歴史のなかでも、自分自身のなかでも、「69 年春、京都」に始まる日々は遠い時代になりつつある。しかし、どういふ機微があるのだろうか、ふとした一瞬に熱い思いが胸をよぎる。

（京都大学霊長類研究所教授・所長 心理学 1974 年卒業）

思い出すままに

上田 清

卒業から30年余。もともと忘れっぽい質ということもあって、キャンパス内の風景やその時々
の思い出はすっかり風化してしまったが、こうい
う機会が得られたこと（締切をとくに過ぎて深
く後悔しているが）をきっかけに少しばかり思い
を巡らせてみると、意外なことにさまざまな記憶
の断片が胸の奥からふつふつと浮かび上がってき
て、何とも複雑な感慨に耽っている。

入学したのは70年安保の真っ最中で、文学
部などは初めから無期限ストが打たれていたし、
百万遍の交差点付近でデモ隊に巻き込まれたこと
も一度や二度ではない。確か二回生の時には、成
田の闘争に出発するまで寝場所を貸してほしいと
友人が下宿に転がり込んできた。朝出かけるころ
に彼がやってきて夕方まで就寝、夕方から晩にか
けて私と交代するという奇妙な生活がしばらく続
く。時には安物のウィスキーを呑みながら向き合
うこともあったと思うが、話の内容はすっかり忘
れた。

入学から半年経った11月25日、あの懐かし
い西部講堂の近くにあった食堂で昼食をとって
いたとき、突然、テレビを通じて飛び込んできた三
島由紀夫割腹のニュースはいかにも衝撃的だった。
35年経った今、憲法の改正が盛んに論じられて
いるのを見るにつけ、戦後の60年、あるいはこ
の35年は一体何だったのかと考えてしまう。一
方、受験の際、憧れていた高橋和巳氏の研究室が
教室の近くにあって大変嬉しかったことを覚えて
いるが、三島氏とは対極的な立場にあった高橋氏
も翌年、あっけなくこの世を去ってしまった。

確かに政治の季節だったのかも知れないが、私
自身は傍観者的な位置から大きくはみ出る勇気も

なかったし、かと言っ
て無関心という訳でも
なく、あれやこれやと
迷ってばかりというの
が正直なところだった。
しかしその後、浅間山
荘事件が起こったころ
には、キャンパスの雰
囲気はすっかり変わっ
てしまっていたように
思う。



入学後、講義が始まる気配もないので自主ゼミ
に参加し、それなりに勉強もした。だがそれも長
続きせず、中学時代から登山が好きだったことも
あって、やがてワンダーフォーゲル部に入部した。
同部はとにかく硬軟左右上下織り交ぜて多士済々、
実に貴重な体験をさせてもらうことになる。やが
て季節を問わず、登山か、その資金稼ぎのための
アルバイトかが、私の日常になっていった。ピー
ク時には入山日数が200日前後にもなったはず
だ。しかし、笑いあり、涙あり、珍事件有り、遭
難一歩手前あり、遭難救助あり……思い出せばキ
リがない。

そんな状態が続いたから、何とも不真面目な学
生で、どう言えばよいか、斜めに構えるようなポー
ズをとることで微妙なバランスをとっていたよう
にも思う。もちろん、4年での卒業は早々と断念
したが、昭和初期の社会運動や労働運動をテーマ
に選んだ卒業論文だけは真剣に取り組んだ（つも
りである）。試問（でよかったのかな）で温かい
言葉をかけていただいた故今津晃先生や松尾尊允
先生のことは、今も強く印象に残っている。多謝。
卒業後、社会科の教員として高等学校の教壇に立
ち、その後県の教育委員会事務局勤務を経て、平
成13年、縁あって大和郡山市長選挙に当選させ
ていただき、現在2期目を迎えているが、あら
ためて京大で学んだことの意味と、今に生かすべ
き事柄や考え方を自分自身に問いかけているとこ
ろである。

（大和郡山市長 現代史学 1975年卒業）

『東洋史研究』の編集委員会

羽田 正

もう30年近くも前、私は京都大学文学部東洋史研究室に拠点をおく雑誌『東洋史研究』の編集委員を務めていた。『東洋史研究』は、東洋史研究会という組織の発行する学術雑誌で、当時の会長は名誉教授の宮崎市定先生、副会長は現役教授で最年長の佐藤長先生だった。評議員には高名な研究者が数多く名前を連ねていたの、外から見ると、この研究会は、これらの先生方によって運営されているように見えたに違いない。しかし、内実はまったく異なっていた。

運営の主体は、大学院生やオーヴァードクターからなる数名の編集委員なのである。彼らが年4冊の雑誌編集から、年に一度の東洋史研究会大会のプログラム作成と講演者依頼、科研費申請や学術雑誌の交換などの総務、会費の徴収や各種支払いなどの会計に至るまで、会運営のあらゆる面をすべて取り仕切っていた。会長や副会長には時折会務全般の報告をするだけで、よほどのことがない限り、先生方のお力は借りなかった。

当時、『東洋史研究』の編集委員会では、興味深い研究を行っている“旬”の研究者に論文執筆を依頼することがよくあった。忙しい先生方から原稿を頂くために、丁寧な文章でお願いの手紙を書くのである。ところが、依頼した論文がいざ到着すると、その論文はしばしば編集会議で徹底的に批判された。大家や先輩の論文であっても、問題設定が悪い、論理構成がまずい、史料が読めていない、参考文献に漏れがある、などと散々にたたかれた。もちろん、会議の場での確かな審査報告を行うために、編集委員は自分の担当する論文をその引用史料にまであたって徹底的に読み込んでいた。そして、担当者の説明が他の編集委員を納得させれば、依頼した論文であっても、著者に問

題点を提示して書き直してもらった。

有り体に言えば、お願いして書いてもらった教授や助教授の論文を大学院生が審査して突き返していたわけだ



から、相当失礼な話ではないか。自分が教員の立場となったいまあらためて考えてみると、東洋史研究室の先生方はよくあれだけすべてを大学院生に任せていたものと妙に感心してしまう。しかし、幸い、論文の著者から厳しいクレームがついたという記憶はない。皆それだけ誠実に自信と責任を持って審査をしていたのだろう。そして、このような作業を繰り返すことによって、各自が研究者として成長していった。

実際、この雑誌の編集委員としての仕事は、私にとって貴重な経験だった。権威や地位、実績が絶対ではないことを知ったし、文章の書き方から問題設定や論理構成、史料の批判や解釈、それに論文批判の方法など、実に多くのことを学んだ。京都大学文学部の学問の基本である批判精神や在野意識が、そこには確かに存在していた。私は東洋史研究室ではなく、西南アジア史研究室に所属する院生だったが、東洋史研究室で仕事をしていて疎外感を感じたことはなかった。研究室は異なっても、共通する文学部的気風があったのだろう。

時代が動いている以上、文学部や文学研究科も変わらねばならない。しかし、あの頃の『東洋史研究』編集委員会に見られた大学院生の自主独立と批判の精神や教員の学生に対する全幅の信頼は、京大文学部の存在の証としてぜひ守ってほしいと思う。

(東京大学東洋文化研究所教授 西南アジア史学 1976年卒業)

放蕩息子の回想

大森 望

ろくすっぽ授業にも出ない怠惰な学生だったので、こんな場所に出てくるのは大いに気が引けるが、それでも京大文学部には大いに感謝している。一番ありがたかったのは、好き勝手にしても四年で卒業させてくれたこと。「自由で内発的」が京大文学部の伝統だそうですが、要するに、「場所は用意してやるからあとは勝手にしたまえ」ってことですね。勉強したい学生は勉強しろ。したくないなら好きにしてよし。なにしろ学部の授業を受けるのに履修届が必要ない。それどころか、前期試験は履修届を出す前に受けられるので、担当教官の顔も名前も知らずに（それどころか、何の講義かさえ知らずに）試験だけ受けて単位をもらったこともありました。

専門課程（アメリカ文学）でもろくに勉強せず、卒論の題材に選んだのは、高校二年の冬休みにイエナ書店で買った *Breakfast of Champions*（カート・ヴォネガット）。中学生のとき親に買ってもらったブラザーのタイプライターを叩いて書いた38ページの英文は、「英語の間違いを指摘していたら一日かかりますが」という前置きつきで青木次生教授にさんざん罵倒されたものの、なんとか通してもらって卒業したのは一九八三年。

従って僕が京都を離れてもう二十年以上になるが、在学中に設立した（というか復活させた）京都大学SF研究会に所属する現役学生たちの暮らしぶりを見る限り、京大生の下宿生活は（ケータイとパソコンを除けば）当時とほとんど変わっていない。その証拠が、森見登美彦氏の日本ファンタジーノベル大賞受賞作『太陽の塔』（新潮社）。徹底したリアリズムで活写される現役京大生の今の下宿生活は、東京から見るとほとんどマジックリアリズム的な幻想小説に映ららしい。北白川鶯

町の古い下宿屋に住み、そういう牧歌的な環境で四年間を過ごせたことにも感謝している。

もうひとつ、京大文学部に感謝したいのは、優秀な諸先輩方と知り合えたこと。外国語がタダで教えてもらえるんだからとイタリア語を履修し、伊文研究室に出入りしていたおかげで、当時イタリア文学の助手だった和田忠彦氏の知遇を得て、カルヴィーノの新作の話聞かせていただいたり、幻想文学研究会のオリエンテーションに出た縁で、当時まだ大学院生だった横山茂雄（稲生平太郎／法水金太郎）氏に連れられて蜂谷昭雄教授の研究室で開かれていた読書会を見学したり。

当時の英米文学は他にも多士済々で、見上げるばかりに優秀な人材が揃っていた。博士課程には、（まだ留学前・結婚前の）水野尚之、水野真理夫妻がいたし、同級生にも西谷拓哉氏のような英才がいたから、こりゃかなわんと英文学者の道に早々と見切りをつけられたのも効用か。

いちばんお世話になったのは、修士課程在籍中だった若島正氏。コンパのあとは何度となくご自宅に押しかけSFペーパーバックのコレクションから一部を格安で放出してもらったり、若島さん主宰の「英米の短篇を読む」という読書会の末席に加えてもらったり。もっとも若島さんは、この読書会で奥さんを見つけたのだから（しかも相手は僕の同級生）、メリットは向こうのほうが大きかったはず。

まあしかし、学部時代まるで勉強しなかった僕が、曲がりなりにも翻訳家になり、今は京都大学大学院文学研究科教授の若島さんと、シオドア・スタージョンの短編集だの雑誌の座談会だので同席させていただいてるわけで、ぐうたらでもなんとかするという見本かも。京大文学部に足を向けては寝られません。

（翻訳・著述業 アメリカ文学 1983年卒業）



「学ぶ」ということ

武上 真理子

私が京都大学に在学したのは1980年からの4年間、高度経済成長の高揚感は遠く過ぎ去り、バブルの狂騒劇の開幕までにはいま少しの時間を要する頃のことです。キャンパスには現在のようなモダニズムあふれる建築群はまだ見られず、古びた校舎のそこかしこからは学生運動の名残が静かに消え去ろうとしていました。何かが大きく変わってゆきそうな予感はあるもののその姿が描けない、一途に追い求めるような目標も見出せない、そんな私たちの世代はまさに「モラトリアム」の時代の申し子だったのかもしれませんが。共通一次試験の二期生として入学した私たちは、「自主独立」の精神にも「反骨」の気概にも乏しい、粒ぞろいだけれども小粒な一群として、先生方や諸先輩の目には映っていたのではないのでしょうか。

そんな中でも私は飛び切りの劣等生で、歴史を学びたいという志、というより夢だけで松尾尊允先生の門下に入ったものの、京大史学の伝統の継承などどこへやら、授業もゼミもひたすら「笑ってごまかす」の一手でやり過ぎてしまいました。卒論のテーマを決定するにさえ先生のご指導を仰ぐ始末で、現代史きっての軽薄短小分子として周囲のため息を誘っていたことであろうと、当時を振り返る度にただ赤面するばかりです。曲がりなりにも無事に卒業できたのは、ひとえに松尾先生のご指導の賜物と今さらのように感謝の念を深くしております。

このように不勉強を絵に描いたような4年間を過ごした私が、「学ぶ」ということについて語るのは僭越の極みといわねばなりません。図書館には静謐の雰囲気を楽しむためにたまに足を向けるだけ、ゼミでは歴史観をめぐって白熱する議論を聴講するだけといった調子だった私が、知

識として学んだことは皆無に等しいといえましょう。ただ、学ぶことの楽しさと厳しさを日常的に実感できたことこそが、私にとって何にも替えがたい経験



であったように思われます。ふと新しい知への扉が開かれたように感じる瞬間の心の昂ぶり、先生方が研究対象に注がれるまなざしに感じた敬虔の念、講義やゼミの中で漏らされた一言の重みに対する驚き…これらは直感のようなものとして、私自身の身体に深く刻み込まれたのです。

このような感覚は学部卒業の後、学問とは無縁の世界に身をおいた私の中では、ほとんど意識されることのないものとなってしまいました。それが長い眠りの後に活動を始めたのは、突然思い立って関学大の言語コミュニケーション文化研究科に入学した4年前のことです。学ぶことの楽しさを倦まず語り、「学問とは対象への愛です!」とまでおっしゃった、京大文学部の大先輩でもある丹治恆次郎先生のお言葉は、自らの浅学を恥じ知識だけを詰め込もうとする強迫観念から私を解放するとともに、学問に対する心の躍動を身体の奥深くから鮮やかによみがえらせるものでした。その後は学ぶ厳しさのほうを思い知って日々苦闘を繰り返すことになるのですが、「学び」をめぐる身体感覚は母校の歴史と私自身を確かにつなぐものとして、現在の学究生活を支えてくれています。

大学をとりまく環境が大きく変容する現代にあって、100年の節目を迎えた京大文学部は、新しい時代の要請にこたえうる社会的貢献を目指しておられることでしょう。文学部のますますの発展を祈念いたしますとともに、そこが「学ぶ」ことの意味を常に問いなおさせる場でもあり続けることを願ってやみません。

(神戸学院大学博士後期課程 現代史学 1984年卒業)

文学部! 万才

辰巳 琢郎

社会に出て以来、といっても私の場合『芸能界』とよばれる特殊な社会ではありますが、どれだけ『京大文学部卒』という肩書きに助けられてきたか知りません。そもそもNHKのオーディションに合格してデビュー出来たことからして、それまでの劇団活動の実績や、私自身の演技力云々より、珍しい肩書きがマスコミの世界で力を発揮する、と判断されたに違いありません。

受験の動機も、思えば不純なものでした。大阪府下の高校生で、且つ東京に下る気が全くないとすれば、その最高の目標は京大、というのが一般的ではありましょう。しかしながら、18歳の私のやりたかったことは芝居であり、何処がその環境に適しているか、という観点からの大学選びだった訳です。即ち「京大=最も自由で、好きなことが出来て、単位が取りやすい大学」というのが私の分析でした。そして勿論その分析は正しく、7年丸々かかってしまったとはいえ、目出度く卒業出来た次第です。

そんなわけで、劇団活動と麻雀以外に「在学中の思い出」がほとんどなく、この原稿の締切日を大幅に過ぎ、誠に申し訳ない限りなのですが、何週間かの間、折にふれて学生時代の記憶を呼び起こし、また後悔を重ね、学問のこと、京都大学の存在の大きさ等々、様々なことを考えるチャンスに恵まれました。そして、あまり熱すぎない人肌程度の愛校心、京大OBであることへの幾許かの矜持、それらを忘れずに生きて行こうと、改めて決心したのです。

大学が独立法人化され、これからどちらへ向か

って行くのか……。だいたい学問というものはモノの役に立たないもので、役に立たないけれども人間が人間であるためになくてはならないもの、それ故国



が大事に育むべきものと私は考えています。しかし学者先生が政府の閣僚に次々に抜擢されているのが我が国の実情、嘆かわしい限りです。本学にも経済学部がありますので、あまり過激な発言は控えようと思いますが、

「経済学者や経済評論家は、いつも皆さん意見がバラバラですよ。おまけにその予想が外れても誰も謝らないし、責任も取らない。そんなことは学問じゃない……」

といった旨の私の発言に対し、

「学者や評論家に騙されないために経済を勉強しなければならぬんです！」

と嘯いた某東京の大学の教授もいらっしゃいました。いずれにせよ、実学の方が学問の中でも上位に位置付けられる傾向があるのは事実、本当に悲しいことです。

そこで『文学』。誰がどう考えても役に立たない学問ですが、こと文学の分野では、日本は世界有数、いやトップレベルではないかと私は考えています。さらにこれからの21世紀、地球規模の様々な問題が顕在化しつつある中、否が応にも哲学の存在が重視されてくる、これは疑いようがありません。「そうなると役に立ってしまうじゃないか」と突っ込まれると困りますが、そういう時代にあって、京都大学文学部の使命はますます重くなってくると確信しています。

願わくばもう一度学生に戻って、百万遍のキャンパスに通い学問に没頭したい、偽らざる今の私の気持ちです。

(俳優 英語学英文学 1984年卒業)

文学部 2010 年

中砂 明德

この章の執筆者中、現在文学部に勤めている者は二人しかいない。私がなぜかその中の一人になっているのは、各研究室からあがってきた候補者を検討したところ、私の年代（1984年学部卒業、現在44歳）の者が少ないので、手近なところから補充しようということらしい。むろん、同年代の同僚はいるのだが、たぶんいちばんヒマそうに見えたからだにとらんでいる。

依頼の動機がそうしたもののなので、文学部教員の世代についてとりあげることにする。もっとも、歴史の勉強を生業とする者でありながら、自らのよって立つ位置とか伝統とかにほとんど無関心に過ごしてきた。かつては文学部の看板の一つだった東洋史学研究室に所属しながら、そうした意識が薄いのは、伝統という言葉が面映いバツタモンだからである。こちらに着任してまもなく、高田里恵子の『文学部をめぐる病い』という本が出た。東大の独文に集った「二流の男」たちの物語をとて面白く読んだが、ではウチはどういうところなのかとを考えをめぐらすこともなかったのである。

それが、昨春に出た『以文会友』（京都大学学術出版会）の校正、索引作成に関わったことで、文学部の歴史に興味が少しだけ湧いてきた。とりわけ、巻末の人名索引に入れる生没年を調べるうちに世代のことが気になりだしてきたのである。ところが、ここで無知が凶らずも露呈した。「京都学派」の一人、哲学講座の高山（こうやま）岩男教授を「タ」行に入れて、平気な顔をしていたのである。

本屋の「京都哲学選書」の並びはやりすぎし、高山についての研究書が出ていることもつい最近になって知った程度なのだが、じつは大橋良介の『京都学派と日本海軍』（2001）の登場人物とし

て彼の名前にすでに接していた。しかし、「大島（康正）メモ」（戦争中・末期に海軍筋の要請を受けて京大グループが時局を論じた会合の記録）でポツリポツリと発言が記録されるのみの「脇役・宮崎市定」のほうに関心があって、主役である高山や西谷啓治、高坂正顕（当時、人文科学研究所）の方には注意が行かなかったのである。

さて、この会合が1942年に始まった時点での文学部教員参加者の年齢を列記すると、田辺元（57）、木村素衛（47・教育学）、西谷（42）、宮崎（41）、高山（37）、鈴木成高（35・西洋史）といった具合である。東大出の田辺を除けば、皆1920年代の卒業生である（木村がやや年長だが、哲学科の卒業年は西谷の一年前）。文科大学創設当初30～40代前半で固められていたスタッフは、1926年の内藤湖南を皮切りに次々定年（当時60歳）に達し、このころは完全に弟子たちの時代となっていた。教官のほとんどが本学部出身者で占められるようになっていたのである。

ちなみに、宮崎は新設された松本高校の一期生である。各地に高校が新設されるのに伴い、1920年代には入学者が著増した。宮崎の三年後に入学した高山もまた、山形高校の出身である。宮崎は文学部の卒業生である高校教授の徳愼、高山は田辺・西田の著作に触れたことが、上洛の強い契機だったらしい。こうした口コミの情報、教員の著作が今日の高校生にも届くことがあるのかは知らない。最近始まったオープン・キャンパスやホームページの研究室紹介がその補完的役割を担っているということなのだろう。まもなく高校教員の大量新規採用があるから、ウチの学生にも教師になる者が増えることが予想される。今から、彼らのことを大事にしておかねばならない。

さて、教員の年代構成の推移をざっとみておく。1940年にはじめて50歳以上の教官数（教授・助教授。以下、同じ）が半数をこえるが、すぐに逆転する。戦後の公職追放は、いくつかの研究室の歴史の流れを変える事件だったが、全体の年齢構成だけを問題にするなら、ここで特段の変化は

起きていない。1957年に再び50歳以上が半分を超えた。戦後、定年が63歳に延びたこともあって、以後これが常態となる。

紛争以後しばらくの間にメンバーがかなり入れ替わり、重心が40代後半にきたことがあったが、80年代に入るとまた後ろに移行する。私が卒業した84年、父がちょうど50歳だったが、当時5人に3人はそれより年上だった。そのころ、先生方の年齢をとりたてて意識していたわけではなく、「大学の先生というのはこのくらいの年配なんだ」と勝手に思い込んでいたように記憶しているが、これは百年史の折り返し以後の事態に過ぎない。

90年代に入り、50歳未満の割合が増え、95年にはほぼ半分になるが、その原因は1946～50年生まれの世代の増加にある。私が卒業した今から20年ほど前、抜けて若く見えた30代の先生方がちょうどこの世代である。84年時点では6人だったのが、91年には18人（60人中）となり、以後大学院重点化の変革期を経て15年

間にわたり、最も厚い層であり続けている。ここ半世紀の間、グラフのピークがたいてい50代半ばにあったなかで、この現象は突出している。現在は80名を超える教員数のうち、25人を数えている。ある5年間の員数が全体の3割を占めるということ自体は、年齢が近い集団として出発した創立当初を別にしても、戦後にもあるのだが、25という数字にはやはり重みがある。

そして、それに続く世代が第二の山を形成しているのも、このままいけば、2008年には50歳以上が60人ほどになる。世間から三年ずれて2010年に始まる団塊の世代の退場は、教員構成に大きな変化をもたらすだろうが、それが年齢の問題にとどまるのかどうか、私には予測もつかない。ただ、いちばん最近に出た正史『京都大学百年史 部局史編1』（1997年）の時点では女性教員は一人しかいなかったが、現在ようやく二桁に手が届きそうのところまで来ている。二流の男たちが占拠する職場でなくなることだけは、間違いないだろう。

（京都大学大学院文学研究科助教授 東洋史学 1984年卒業）

京都大学文学部・文学研究科の思い出

藤目 ゆき

京大入学が1979年、博士課程修了後も1996年春まで聴講生だったので、私は通算18年間文学部・文学研究科に在籍していたわけである。

今の文学部の建物は壮麗で、訪ねる折々に感嘆もし迷子になったりもするのだが、私が学部生・院生・PD研究員・聴講生として長い年月を過ごしたのは、東側の旧館であった。老朽化した旧館は、正面にたいてい学友会の立て看板が立っていて、壁には様々なステッカーが貼ってあり、そのあたりにヘルメットが放置してあったりした。現代史研究室は四階の北西角にあった。学部生と院生いりまじって勉強ができるスペースがあり、院試対策の学習会やウォーラーステインの読書会など、学部生時代からよく通った。一年先輩に杉山茂氏（現静岡大学助教授）、同期に藤永壮氏（現大阪産業大学教授）がいて、研究室にたむろして、議論や雑談に楽しい時を過ごしたものだ。院生になると机と本棚も与えられ、パソコンも使わせていただいた。修士論文、博士論文も、この研究室で書きあげた。

当時助手であった永井和先生は、よく、現代史講座は「すて育て」だ、とおっしゃっていた。「すて育て」とは、先生がたが学生・院生に手取り足取り世話を焼いたり干渉したりせず、テーマや方法論や研究会などは本人が何かを勝手に見つけ、思うようにやってみるのに任せる、ということであろう。実際、松尾尊允先生も紀平英作先生も永井先生も、私自身がやりたいと思う研究の内容や方法を尊重して下さった。私の選択を高圧的に否定されるようなことはついぞ無かった。巷では「希望していたテーマでは先生の承認が得られないから諦めた」とか「先生がこの視点ではダメだと言

うので、先生の視点で書き直した」といった、学生・院生の嘆きを聞くこともある。そのように学問的に従属し、擬似家族的に密着する指導教官と学生・院生



の関係性は、大学の世界にかなり普通のものなのかもしれない。だが現代史講座には、自由で自律した、学問への志において対等な研究者同士の関係を尊重する雰囲気があった。私が学問への道を進むことができたのは、すこぶる自由な環境を与えられその自由を満喫できたからで、その時代が懐かしい。

私の専門分野は女性史だが、女性で、しかも専門が女性史では就職が難しい。学部生の頃、ある先輩に「就職が決まるのは既婚男性、独身男性、独身女性、既婚女性の順番だ」と聞かされたときのショックは忘れられない。それでも進学を決心したのは、小野和子先生、脇田晴子先生、河村貞枝先生ら、文学部とその周囲には女性史で素晴らしい仕事をされていた大先輩たちがおられたからである。一般に学生が女性史に取り組みたくても教授から適切な指導が与えられない状況は今日もあり、当時はもっとそうであった。が、松尾先生は、ご自身も女性参政権運動を研究されていて、私の女性史研究を最初から応援して下さいました。また紀平先生もよく相談にのって下さいました。実際就職できたのはOD生活6年を過ごしてからで、長いOD生活では苦勞もしたが、多くの先生方、先輩方、友人たちに支えられ、京大の自由な空気の中で研究生活を続けることができたのは幸せであった。

国立大学が独法化され、どの大学にも変化の大波がおしよせている今日だが、京大文学部・文学研究科の学問の自由を守る良き伝統が失われず、今後継承されてゆくことを願っている。

（大阪外国語大学外国語学部助教授 現代史学 1984年卒業）

文学部で学んだこと ——100年先の世界のために

山下 太郎

私は英文科四回生の秋、思い切って西洋古典文学に専攻を変える決意をした。岡道男先生（当時の主任教授）のおられた研究室は、今はなき煉瓦造りの旧館二階にあった。専攻変更の願いをするため、おそろおそろ先生の部屋の扉をノックすると、万巻の書物がそびえ立つように見えた。先生は私の志願理由を頷きながらお聞きになり、ご自身も独文出身であると打ち明けられた。私がラテン語もギリシア語も4時間コースを履修していないことを察知されると、「語学は慣れです」と口にされ、先生の実践されたラテン語、ギリシア語習得法——先生はこれらの言語を学部の一、二回生の頃に習得された——を次のように語って下さった。まず、春休みの全期間、その言語の習得のことだけを考えて集中的に独学する。その際、文字通り寝食を忘れて取り組むこと。次に、新学期から開講される西洋古典の演習に出席し、辞書を引いて原文を読む訓練を続けること。

私が目をぱちくりさせてお話を伺っていると、先生は書庫から両手でないと持てないような大型の辞書や注釈書を机の上に運んでこられ、ギリシア語、ラテン語それぞれの単語の調べ方、注釈書の使い方を教えて下さった。時間にしてゆうに一時間を超えていただろう。そのころ先生は後期の授業でケケローの『国家について』を読んでおられたが、該当箇所のコピーを渡され、次回の授業から参加するようと言葉を添えられた。勇んで参加した授業のレベルは私の想像を絶するものであった。参加者は錚々たる院生ばかりが五、六人、学年順にオックスフォードのテキストを飛ばすように訳していかれる。ちらっと横目で覗いても、テキストに何も書き込みは見あたらない。私はといえば、原文のコピーを拡大してノートに貼り付け、

余白に辞書で調べた結果をありったけ書き込むものの、辞書を引くだけで精一杯のありさまであった。先生はときおり「ここはこう訳してもよいですね」と



簡単にコメントされるのみで、あっという間に数ページの訳のチェックが終了する。驚いたのはその先で、先生はもう一度最初から原文をご自身の言葉で訳していかれたのである。重要な箇所については「ここは（学問上）問題の箇所、後で説明します」とコメントされ、そのままどんどん先を訳していかれた。まるで日本語の訳を朗読されているかのように。こうして二度にわたる原文の訳読が終了すると、今度は細かな字でびっしりと書き込まれた研究ノートのコピーが配布された。そこには、解釈上の争点が文献案内とともに整理されていた。先生はこのノートに即して従来の学説を整理され、あわせてご自身の見解を開陳していかれるのだった。

その後年月が流れ、大学院の修士課程、博士課程と進学する中、私の理想は岡先生のように流麗に原文を訳し、先生の流儀で研究ノートを作り、論文を発表することであった。すなわち、テキストの精読と研究史の精査からにじみ出てくる自分のオリジナルな解釈の萌芽を大切に育て、論文という花を咲かせること。しゃにむに勉強し、語学の問題以上に研究の壁に何度もぶつかったとき、私は先生の論文をどれだけ繰り返し読み返したことだろう。先生が研究対象とされた原文を自分の手で徹底的に読み砕き、その後先生の論文を何度も読み返すこと。この繰り返しによって、私は論文の書き方に関し、先生の「攻め方、守り方」が目をつぶっても浮かぶようになった（気がした）。それは、有名選手のフォームをまねて素振り続ける野球少年と何ら変わらぬ気持ちであった。苦勞の末修士論文を提出し、先生から「100年先の世界のために研究するように」と言われたとき、

私は「普遍」という言葉を何度も心の中でつぶやきながら、熱いものがこみあげた。

その後さらに歳月は流れ、私は文学部でラテン語を9年間教える榮譽に浴したが、この間父の病状の悪化を受け、家業であった幼稚園を継ぐために本務校（京都工芸繊維大学）の職を一昨年辞した。愛着のあった文学部の授業（ラテン語4時間コース）のみ昨年度末まで続けさせていただいたが、この最後の年の授業では、前期に文法書を終え、後期にキケローの「スキューピオの夢」を読むことにした。私にとって思い出深い『国家について』を締めくくる有名なエピローグである。熱心な学生たちとテキストを精読する時間は、文字通り至福のひとつときであった。だが最終回の授業で *hanc tu exerce optimis in rebus!*（これを——汝の魂の力を——最善の仕事において発揮せよ!）という表現に出会ったとき、感無量の思いがした。ここで言われる「最善の仕事」とは、文脈に即して読むと *res publica*（国家）を守り発展させることであるが、このラテン語は広い意味で「公の仕事・事柄・問題」など多様な意味を内包する。引用したキケローのラテン語を吟味するうち「魂を込めて世のため人のために尽くせ」と読める気がしたのである。学問の世界から飛び出し、新しい仕事の継承と発展に心を砕いていた私にとって、この言葉は大きな励ましのように感じられた。一方で私は、文学部で学んだ *philosophia*（知を愛する心）を子どもたちと分かち合いたいという願いを込めて、幼稚園長就任と同時に、小学生以上の子どもたちを対象とした学びの場（山の学校）を

創設していた。そこでは国語の教科書代わりにプラトーンやアリストテレスの作品を読み、講師と議論を交わす。キケローやセネカのラテン語を読み解くクラスもある。大人も子どもも無心になって学ぶ場がここにはある。

今の活動の原点には、岡先生によって *res publica*（公の仕事）としての研究の道を示していただいたことへの感謝がある。文学の研究とは、無数の人々に読まれてきた *res publica*（公共財産）としてのテキストを守り、次世代に伝える仕事のことであった。他の学部の研究が、現実に役立つものを成果として期待されることが多いのに対し、文学部の研究はいつも「普遍」や「理想」をテーマとし自由に議論することが許される点で「学問」の王道を行くものである。だが、この道を生かすも殺すも結局は「人」次第なのだと思う。論文の数を競ったり競わされたりする態度は、「私的な問題」（*res privata*）に執着することを意味するのである。だが、学問の意義はそのようなところにあるのではない。同様のことが教育に関しても言えるだろう。人を育てる道とは、畢竟「私」を超えた「公」の存在としての「人」を育てることである。再びキケローの言葉に耳を傾けるなら、*res publica* と呼びうるものは時空を超え、永遠に存在し続ける。また、人間にはそれぞれの立場でこれを守り育てる道が開かれている。今私は論文を書く者ではないが、「100年先の世界のために」という志は、新しい仕事の中で変わらぬ意味を持ち続けているのである。

（北白川幼稚園園長 西洋古典語学西洋古典文学 1985年卒業）

美学美術史学研究室の思い出

加須屋 明子

京都大学文学部に入学したのは1982年4月のことで、美学美術史学研究室には、1984年から86年までの学部時代から、86年から88年まで修士課程、88年から91年まで博士後期課程と7年間お世話になりました。ただし博士後期最後の2年間は、ポーランドのヤギェウォ大学哲学研究所美学研究室に留学しておりましたため、実質5年ということになります。

研究室は、まだ文学部の古い校舎を使用していた時代でした。木の匂いや肌触り、色や質感と共に、そこそこに感じられた歴史の蓄積や、その重みが目に浮かぶようです。

当時研究室の主任は故吉岡健二郎先生で、佐々木丞平先生と清水善三先生も教鞭を執っておられました。私の指導教官は吉岡先生でした。文学部の古い教室（第六講）で、吉岡先生が講義をされる時には、手書きのノートを読み上げられ、私たちはそれを筆写してゆく、というスタイルを守っておられました。時々、ノートの朗読を区切って、その箇所についての注釈を付け加えられます。教室に響く先生の声と、ノートを走る鉛筆の音、そして静まりかえった教室の雰囲気は今もとても懐かしく思い出されます。吉岡先生の美学講義では、主にカントを中心とした美学理論史が取り上げられましたが、折に触れて「美学と美術史とは車の両輪である」ということをおっしゃられ、そのいづれが欠けてもうまく動かないように、理論だけではなく、実際の作品にも触れるようにと話しておられました。ご自身も、美術館や画廊巡りなど

も折々になさっていたご様子です。また、実際に研究室でも美学と美術史とが一緒になっておりますので、どちらの授業も受けることができました。演習や



ゼミも合同で行っており、しばしば現地研修では京都近郊の寺院などを訪れ、作品の前で長い午後を過ごす贅沢な時間を持てたことは、非常に貴重な体験であったと思います。諸先輩方との作品調査にも何度か補助として参加させていただく機会があり、間近で作品と触れることができました。

研究室で週に一度行われるゼミは、毎回張りつめた緊張感が漂い、コメントも大変厳しいもので胃の縮む思いでしたが、そのような日々と平行して、年に一、二度程度、遠方へ見学会を兼ねての一泊旅行に出ることがありました。卒業してご活躍中の諸先輩方を訪ねる良い機会でもあります。冬場は蟹の美味しい北陸や山陰地方を訪れたことが思い出されます。また東京での学会の後、吉岡先生と研究室のメンバーとで、日光方面へ一泊旅行に出かけたこともあります。芸術美も自然美も味わおうということで、日光東照宮を見学し、華厳の瀧に目を見張った後、中禅寺湖畔の温泉旅館で美味しい料理をいただき、ゆっくり長風呂も致しました。早朝に付近の散歩に出ましたところ、吉岡先生もあたりを散策しておられて、途中から林を抜けて湖まで、ご一緒させていただくことができました。紅葉の美しい気持ちのよい朝でした。

過日2005年2月に、吉岡健二郎先生の突然の訃報に接しまして、驚きと悲しみに暮れております。静岡県立美術館の館長在職中であられました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(国立国際美術館学芸員 美学美術史学 1986年卒業)

一期生の誇り

喜多 千草

いまだにセンター試験を「共通一次」と呼んでしまう私にとって、文学部の東館はもちろん「新館」のまま。ことほど左様に時代に乗り遅れがちな私が、なぜか時代の変わり目にちょうど人生の節目を迎え、図らずも一期生ばかりを経験してきた。美学・美術史学専攻を卒業した年が、たまたま雇用機会均等法施行元年となり、テレビ局に勤めたところが、総合職一期生。現在大逆風のさなかにあるNHKを辞めたのは先見の明だったか、ともかくも縁あって大学院に戻ろうと思いついたのが、これまたたまたま京大が大学院重点化した1996年のことだった。メディアの現場経験の中で得た視点を生かしつつ、研究へと深めてみたい分野がいくつかあり、かつての専攻に戻ることを考えない方がいいのかもしれないと悩んでいた折しも、NHK時代の大先輩である柏倉さんから電話が掛かってきて「京大の先生になる」という。いったい何を教えるのかといえば、新設された二十世紀学という聞いたこともない専攻の主任教授として赴任される由。そこで、考えていた分野のあれこれを挙げて、いったいその二十世紀学とやらには、そういった分野は含まれるのかと問えば、含まれなくもないというお返事。柏倉さんにすれば、京都に住んでいる知り合いにふと電話をただけのことだったろうが、それが運のつきとなり、図らずもいきなりきびだんごを渡してしまった桃太郎となったわけである。

しかし「私もお供致します」はいいが、試験がある。せっかく卒業した大学にもどろろというのに、十三世紀の壺のことを書いた卒業論文では二十世紀学には転用出来ない。しかたなく聴講生として図書館を利用しながら、頭のリハビリを兼ねて新たに論文を仕上げた。このとき苦吟しながら

ら取り組んだテーマが、結局博士論文につながり、初の著書にまで発展したのだからわからないものである。院試前には頭を揺らすと知識がこぼれ落ちそうな



上、しばらく持たなかった鉛筆を握りしめたおかげであやうく腱鞘炎になりそうだったが、なんとか専修初の院生となることができた。このときから「柏倉さん」は「柏倉先生」となった。

ところが飲みも束の間、院生向けのオリエンテーションで聞くところを一言で要約するなら、大学院重点化とはつまり修士号のインフレになるらしいとわかった。かつてのように2年間だけがんばれば、非常勤のバイトにでもありつけるだろうと信じていた時代遅れ頭の私は、ここで大きな誤算に直面する。しかも、出戻り院生では奨学金の一切で年齢制限を軽やかに超えてしまっていることなども判明し、学費と単位を稼ぎながら夢中で過ごす羽目になった。結局、修士号だけでは非常勤もないという時代に背中を押されて、まともや思いもかけず二十世紀学初の博士後期課程一期生となり、そのまま専修初の博士号取得へと突き進む結果となったのである。

主任教授の柏倉先生をはじめ、ゼミを共催してくださった現代史学・現代日本論の紀平先生、永井先生に、社会人を経て入学した院生を大学院重点化時代の「お客さん」としてではなく、真剣に指導して頂いたおかげで、研究者の端くれとして生活出来るようになった。深く感謝している。我が二十世紀学は、毎年研究費の申請書に、専門分野はなんと書こうかと知恵を絞らざるを得ない専修ではあるが、ともかくも自由。末っ子の奔放さだ。このような専修の院生一期生となれた人生の巡り合わせを幸せに思っている。

(関西大学総合情報学部助教授 美学美術史学 1986年卒業)
二十世紀学 2002年博士後期課程修了)

助手の2年を振り返って

野田 明

1989年から2年間、アメリカ文学講座の助手をさせていただきました。今と違って、当時は大学教員になる道が（少なくとも英米文関係では）まださほど険しくなく、先輩の大学院生は、たいていは博士課程の途中、人によっては修士を修了されてすぐに、皆どこかの大学へ就職されてしまい、気がついてみると博士課程に在籍しているのは自分だけ、という状況が生まれて、まさに柵から牡丹餅、全くの幸運で助手に採用して戴いたのです（ですから、本当はこの榮譽あるポストについて語る資格は私には無いのですが……）。

当時の英米文研究室のスタッフは、岡照雄先生、青木次生先生、喜志哲雄先生、豊田昌倫先生で、確か89年の秋から中村紘一先生が加わられました。

助手と言うと、雑用が多くて大変と思われがちで、博士課程から他大学の研究助手になった先輩からも「可哀そうに」などと同情されましたが、実際やってみるとそれほどではない、確かに京大英文学会の準備、学会誌『アルビオン』・『卒業生名簿』の発行等には多少時間を割かれるものの、普段はそう大した仕事はありませんでした（というのは自分が本来の勤めを怠っているのに気づいていなかっただけ、という側面も大いにあったのでしょうけれど）。それどころか、教授からは、本を数頁コピーするようなごく僅かなお手伝いをただけで労いの言葉を頂戴する、一方、学生達からはともかくも「助手」ということで根拠も無く尊敬の眼差しを受ける、何より折りに触れて周りの先生方、時には集中講義で来られた他大学の先生からも、研究について人生についてのお話が聞ける——今になって考えてみると益々、非常に幸せな存在であったと思います。

私の場合、厳密にはアメリカ文学講座の助手、ということで、やはり一番お世話になったのは、ちょうどその頃京大英文学会の会長をされていた青木先生でした。これも今振り返ってみると、研究においても教育においても妥協を許さぬ厳しさで知られた先生が、私のような頼りない助手、きつといつも歯がゆい思いをされていたでしょうに、それを叱り飛ばすこともなく、よく2年間使って下さったものだと思います。青木先生は山登りをされ、研究室の学生を連れてのハイキング会（正確には「トレッキング」と仰っていました）も時々催されていましたが、私自身も歩くことは好きでしたので、「山歩きはできる奴」という所に辛うじて見どころを認めて下さっていたのかもしれない。午前中授業があった日は、よく百万遍近くの食堂やお好み焼き屋へ食事に誘って頂き、これには途中からやはり米文講座の中村先生も加わられて、3人での昼ご飯行は、短い時間ながら、本当に楽しいひと時でありました。

さて、助手の日々の仕事場は言うまでも無く英米文学研究室ですが、英米文の研究室は、他の例えば仏文などの研究室の1.5倍のスペースを占めていましたので、授業や大学院の談話会で使用されるメインの空間とは別に、本棚とキャビネットで仕切られた（従って、入り口からもメインの空間からも、そこに人がいるということがすぐには判別しにくい）、助手のための一角があったのです。青木先生から「あそこを自分の巣だと思って頑張れ。」と言われたこの場所は、狭いながらも専用の机があり、名簿や辞書なども備えられて、まさに「助手の巣」という感じでしたが、週に何度か、英米文研究室で授業が行われる時は、この巣の中で仕事をしていると、隣の広い空間で講義をされる先生や当てられた学生の、顔は見えなくても、声はちゃんと耳に入ってきて、それが（先生方によっては「助手に聞かせてやる」ことも計算に入れて話されていた節もあり）自分にとって何とも言えない緊張であったことを覚えています。

多岐に亘る助手の仕事、記憶しているだけでも

書き出すときりがなく、苦し紛れに、年間行事のハイライトの一つとして、卒論の試問を挙げさせて戴きます。卒論・修論の試問は、例年、論文提出締切日から1ヶ月足らずの、2月上旬から中旬にかけて行われていました。英語学、英文学、そしてアメリカ文学と、その数の多さゆえ、土曜日も含めて確か丸3日間がこれに充てられていたと記憶しますが、それでも、卒論一人30分、修論には一人1時間の割り当てで、朝から夕方までびっしり予定が詰まっていました。試問が行われるのは青木先生のお部屋、助手がいる英米文研究室が同じ4階なので待合室に使われていたのですが、試問が終わった学生は次の者に番が回ったことを伝えるため、もう一度英米文研究室に立ち寄るのです。助手の雑用の合間に学生の様子を窺っていると、試問を受ける前は威勢のよかった人が、悔しそうに涙を浮かべて帰ってきたり、逆に思いつめたような面持ちで待っていたのが戻ってきた時は意外な程晴れ晴れとした表情であったり、変化はさまざまながら、しかし、どの学生にとっても、試問の場で先生方から発せられた言葉がそれぞれの心の奥深くにまで達したことだけは傍で見ているとよくわかりました。1ヶ月にも満たない短期間に、膨大な量の論文が査読され、そのそれぞれについて、どんな向こう意気の強い学生でも参ったと言わざるを得ない論評が形作られる——京大文学部の試問というのは、当時も今も、私には想像を絶する領域ですが、そうかと思うと、

試問の合間に、内線電話によるご注文で飲み物を持って行った時のこと、真剣勝負が行われている青木教授室はさぞ張り詰めた空気なのだろうと恐る恐る扉を開けると、先生方がゆったり談笑されていて拍子抜けしたのが、つい昨日のこのようでもあります。

助手と言っても、自分など格好だけで（学生時代はジージャンであったのが、助手になった途端にスーツになり、また態度も偉そうになって、あまり年齢差のない院生には鼻持ちならない存在であったはず）、色々と心配・迷惑を掛けどおしの2年間、過ぎてしまえば、あっという間でありました。任期も最後に近づいた91年の2月、これも幸運なめぐり合わせで現在の職場に拾ってもらうことになりましたが、ちょうどその就職が決まった頃であったか、既に同年3月をもって京大を辞されることを公にされていた青木先生から「少しは大人になったじゃないか」と声を掛けて頂いたことは忘れません。今、研究と関係の無い雑用にますます追われるようになって、どうしてあの頃もっと積極的に、貪欲に、さまざまなものを吸収しなかったのかと、思い出すたび悔恨に襲われる——「悔恨」と言えば、私の場合、京大にいた10年間すべてに通じることですが——それほど恵まれ、幸せな時代として、助手の2年間はこれからも自分にとっての財産であり続けると思います。

(三重大学助教授 アメリカ文学 1986年卒業)

書けなかった卒論 ——「考える葦」を尊ぶ

橘 宗吾

1年浪人して京大に入った。そして出るときも他人より2年くらい余計にかかっている。べつに単位がとれなかったわけではない。文学部の何人かの友人たちと御同様、方向を見失い、なかなか卒論も書けないまま、ポケットに手をつっこんで京都の町をぶらぶらしていたのである。

結局、スタンダールの『パルムの僧院』について論文らしきものを提出して卒業させてもらったが、その前の1年間、一乗寺にあった四畳半の下宿でパスカルを読んで過ごした（ちなみにその前の1年はネルヴァルを読んで過ごした）。

そのときパスカルについて考えたとりとめもないことを一つ、思い出がわりに以下に書いてみる。このような場でそうしたことを書いてよいのか分からないが、卒論提出のときに学んだことの一つが、書けることしか書けない、だったのだ。

さて、パスカルと言えば『パンセ』、『パンセ』と言えば「考える葦」という言葉である。この言葉について、日本のパスカル研究を世界的な水準に引き上げた前田陽一は、「葦」の比喩の起源を聖書に求め、人間の惨めさとキリストによる救いを暗示するものとして説明している。

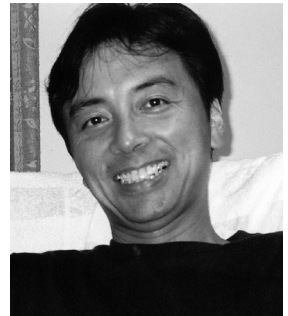
その『パンセ』を読んでいたあるとき、若くして亡くなった親友の荒木敦君に教えてもらったギュスターヴ・ドレの『聖書画集』を見ていて、1枚の奇妙な絵に目が釘づけになった。そこには、磔に付される直前に茨の冠をかぶせられたイエスが手に1本の麦のようなものを持っている姿で描かれており、その図像は明らかに剣ないし王笏をもつ王の姿をかたどっていた。さっそく『新約聖書』のその場面をくってみると、マタイ福音書に「茨で冠を編んで〔イエスの〕頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまず

き、『ユダヤ人の王、万歳』と言って、侮辱した」（新共同訳）とあり、イエスが手にもっているのは麦ではなく葦だということが分かった。

しかし、「ユダヤ人の王」と呼ばれたイエスが王をかたどっていることは十分理解できるとして、なぜ剣（ないし王笏）の代わりに持っているのが「葦」なのか、不思議に思った。いや、それよりも、この「葦」がパスカルの「考える葦」とつながっているはずだという直観がおさえられなかったし、前田も「考える葦」の聖書における源泉の一つとして福音書のこの箇所をあげていることを知った。しかし、その意味はよく分からなかった。「考える葦」が人間だとすれば、イエスにとっての剣（王笏）は人間——折れやすく惨めな存在だけれども、神について考えることのできる人間——だということか。

いまひとつ繋ぎの環が抜け落ちているような気がして、腑に落ちないまま、下宿のこたつ兼机の上で鉛筆をころがしていると、はたと気がついたのは、「葦」というのは要するにこの鉛筆、いや、ペンではないかということだった。そして「考える葦」とはまさしくペンをもって書きながら考えるということの比喩ではないか、さらには、まさしくペンをもって、キリスト教護教論の一部をなすはずだった『パンセ』の文章を書いているパスカル自身の比喩ではないか（もうひとつ言えば、そもそも福音書において、磔刑に処せられるイエスが手にもつ葦じたいが、福音書記者じしんの比喩ではなかったか）、と。

自転車をとばし図書館（当時すでに雨漏りがしていた文学部図書館）に行ってみると、古来たしかに葦はペンとしてメソポタミアからエジプトにわたる広い範囲で用いられており（たとえば、キリスト教発祥期に近いエジプトからは、新約聖書のパピルス写本が大量に発見されていて、おそらく葦ペンで書かれたと思われる）、それは



オリエント・地中海世界に知られた伝統的な筆記具の一つであって、パスカルにとっての葦のイメージの構成要素にペンがなかったとはむしろ考えにくい。「考える葦」は、少なくともその意味の幅の中に、「ペンをもって書くことで考える人間」という意味をになっていると思えた。そして一瞬、書庫の薄闇に、稀代のレトリシャン・パスカルがペンをもって立ち上がり、ニヤリと笑いかけたような気がした。

しかし、今はなき文学部旧本館の建物を出て初冬の白い光をあびると、この考えがなんだか妄想のように思えてきて、それを発展させて、当時漠然と考えていたパスカルの〈信〉と〈文〉についての卒論に結びつけることはできなかった。このように小さな考えをいくつも作っては打ち消しているのが、当時の自分であったように思う。ただ後年、出版社に勤めはじめてから、本の装幀をたのんでいた書家の石川九楊さんとの会話の中で、「考える葦」についてよく似た考えを石川さんの方から問いかけられ、驚くとともに、少しばかり自信をもてるようになった。また、ブルガリア出身の日本文学研究者ツベタナ・クリステワさんが日本語で書いた『涙の詩学——王朝文化の詩的言語』（名古屋大学出版会、2001年）という本を編集する中で、筆で書かれた文字を象徴する「水

茎の跡」という言葉に出会ったときにも、パスカルの「考える葦」を思い出すことになった。そして、ああ、あのときこの部分だけでも卒論に書いてみればよかったと思った次第。

しかし、それを書かなかったおかげで、縁があって（というか中川久定先生に御心配をおかけして）大学出版の編集者となり、今にいたっている。パスカルの「隠れた神」は、書けることしか書けない者がペンをもつことなど望まなかったようだが、「自然の中で最も弱い」けれども「尊厳」をになうものとして、爾来、「葦」の先にたくわえられた少しばかりのインクの「滴」と、それを通して考える人間を尊ぶ気持ちが、私の仕事を支え続けている。

願わくばいつかペンが剣のアナロジーではなくなることを期待しつつ（コンピュータの普及によって、そんな比喻などもはや意味をもたないと言われるかもしれないが）、ツベタナさんが「涙の詩学」を集約するものとしてあげている『新古今和歌集』の歌を最後に引いておく。

いにしへのなきになかるゝ水茎の

跡こそ袖のうらによりけれ（斎宮女御）

（名古屋大学出版会編集部長 フランス語学フランス文学 1989年卒業）

書庫の思い出

今井 邦彦

「文学部の百年」への寄稿を依頼され、正直とまどった。私の在学当時はまだ教養部が健在で、実際に「文学部生」の気分を味わったのは3、4回生の2年間に過ぎない。しかも、私の所属した考古学研究室は当時の文学部博物館（現大学総合博物館）にあり、文学部の本館には週に数度しか足を向けることがなかった。卒業から15年。今ではその本館も建て替えられ、考古学研究室は別の建物に移った。新聞記者という仕事柄、京大には毎月のように足を運ぶのだが、日々建物の新築、改築で変わっていく姿に、自分の学生時代の様子を思い出すのも難しくなりつつある。

「考古学は過去人類の物質遺物（に抛り人類の過去）を研究するの学なり」。著書「通論考古学」にこう記した浜田耕作（青陵）が、京大に日本最初の考古学講座を開設したのは1916年。その伝統ある考古学研究室に入れていただいたものの、私は決して真面目な学生ではなかった。ワンダーフォーゲル部の活動やアルバイトにうつつを抜かし、遺物実測の練習はさっぱり。毎日の講義や先輩の研究発表は興味深く、最新の研究情報が聞けることに心を躍らせたが、さて自分はどんな問題意識を持ち、遺物の何を観察するのか、という考古学者としての視点、思考は、結局持てないまま卒業してしまった。ただ、何にでも興味を持つ野次馬根性は磨かせてもらい、それが今の仕事にも生きているように思う。

そんないい加減な学生だった私だが、今も懐かしく思い出すのは研究室の書庫だ。

最初にその中に入ったとき、膨大な蔵書に圧倒され、感動した。学史については一般向けの書物である程度勉強していたのだが、その中で紹介さ

れている「歴史的」な書籍、雑誌がすべてそろっていた。エドワード・モースによる日本初の科学的発掘調査の報告書「大森介墟編」。明治時代の調査報告が掲載された「東京人類学会雑誌」。弥生式文化と稲作の開始を結びつけた森本六爾の「日本原始農業」。そして新旧の概説書、報告書類。様々な論文に目を通し、注や参考文献から別の本を探す。書庫の中でのネットサーフィンならぬ「ブックサーフィン」に時間を忘れ、閉庫時間になって事務職員の藤沢彰子さんに注意されることもしばしばだった。ただ、夕方以降も助手の先生が研究室にいれば、鍵は開けておいてもらった。研究室の書庫ということで色々融通も効いたのだろう。

その後、文学部の研究室もずいぶん様変わりしたと聞く。各研究室の蔵書は基本的に文学部図書館に収められ、不真面目な学生が、書架から興味本位であれこれと貴重な本を引っ張り出すのは難しくなったようだ。研究室付きの助手も原則的に廃止されたそうで、今の学生の面倒はだれが見ているのか、と心配にもなる。

私の勤める新聞社の「大学ランキング」によると、京大文学部の教員に占める自校出身者の比率（純血率）は85.3%。文学部系では2位の早稲田大に16ポイントの差をつけてダントツだ。こうした数字は閉鎖性の表れと批判もされるだろう。しかし卒業生からすれば、顔見知りの先輩、後輩が研究室にいてくれることで、いつまでも古巣とのつながりを失わずに済む。大学でも成果主義が叫ばれ、任期制の導入で人事の流動化を図る動きもあるようだが、何もかもが急激に変わっていく世相の中で、文学部ぐらいいい意味での「古くささ」を失わないでほしい。こう思うのは、不肖の卒業生の甘えだろうか。

（朝日新聞社 考古学 1991年卒業）



「有する」と「伝える」こと

亀田 勝見

大学教員として日々研究と教育（と雑務）に携わる中で、自分の過ごした学生時代は時に一つの判断基準となるものだ。もちろん、時代も学生層も異なるので、今勤務する大学で出会う事柄に昔をそのまま当てはめることに意味があるとは限らないが。

昨今は、どこの大学でも改革の波が押し寄せ、その結果、大学は学生や地域の住民に対するサービスを提供する立場にある、という意識が強まってきた。これによって、大学教員の教育能力の向上も以前より求められている。私はそういった動きに素直に首肯できるわけではない。だが自分が文学部に所属して勉強していた時のことを考えあわせると、あながち等閑に付してよい問題でもないように感じる。

自分の専攻を除く文学部の授業の中で、最も熱心に聞いた講義として記憶しているのは、美学美術史学の講義だ。日本の仏像について、各神格の見分け方や表現技法の時代的変遷などについて解説したその講義は、資料や説明に工夫があり、大変明快で面白かった。おかげで今でも、諸処で出くわす仏像に興味と親しみを感じる。ヴェーダ時代の思想を扱うインド哲学や、チベット仏教を扱う仏教学なども、未知の世界を知る新鮮さがあり、有意義であった。

逆に、まったくの時間の無駄と感じた授業も記憶に強い。授業の多くは学問的な専門性が高かったため、時には面白くても全体としては激しい眠気を催すものが多かった。何かに役立つかと思って、当時のプリントやノートは今でも一部保管しているが、そこにはたくさんのかだらな落書きが残っている。恥ずかしくて他人に見せることもできないが、これは眠気に負けず講義を聴き続けようとした、必死の

努力の跡でもある。受講者側の問題も当然あるのだが、講義する教員の授業に臨む際の努力や配慮が明らかに欠如していた例も多かった。具体的には、講義する教員の話し



方がつまらない、専門用語を不用意に利用するため分かりにくい、声が聞き取りにくい、などの問題だ。昨今入学する学生の質を考えると、受講する側の努力不足として一蹴してよいわけでもない。

高等教育とは、高度な学問的知識や能力を有した人がそれを後学に伝えることを意味する。それ故、大学教員に必要なのは第一に「有する」こと、すなわち専門の研究業績である。また、教員を選考する場合、研究業績は目に見える基準として評価しやすいのに対し、応募者の有する教育能力はにわかに判断しがたい。しかし、「高い業績を残した人物ならば、教育能力は数年実地で教えれば自然と身に付く」と言い切る声にも、一応納得しながらも「ちょっと待てよ」と言いたい。

教育と研究とは、能力として別物だ。はじめから両者を具有する場合も多だろうが、「有する」ことのみでその職についた教員については、「伝える」能力を高めるための努力が、教員個人を越えてなされるべきである。さらに言えば、能力というものは個々人が開発して必ず獲得できるとは限らない。であれば、いくら訓練しても教育能力が十分に身に付かない学者も当然存在するだろう。そのリスクを軽減させるためには、選考段階において「伝える」能力を少しでも明確に把握しておかねばならない。

研究水準を保ちながら、教育水準を向上する。外部からの様々な要求を自覚せねばならない今時の大学としては、難しいながらも主体的に進んでゆくべき道だろう。目の前の学生を自分の学生時代に重ね合わせ、いろいろと反省しつつ考える毎日である。

(福井県立大学助教授 中国哲学史 1991年卒業)

歴史とまちづくり

星之内 正毅

北九州市門司区は、九州最北端、関門海峡に位置する交通の要所である。明治22年に開港した門司港は、大陸貿易の基地として最盛期には横浜、神戸に並ぶ商業港としてにぎわい、1か月に200隻近い外港客船が入港したといわれている。が、太平洋戦争中に多数の機雷を投下され一時的に港の機能を喪失し、その後も関門トンネル、関門橋の完成によりターミナルとしての役割は次第に弱まっていった。

このさびれつつある港町を都市型観光地として再生させようと、北九州市では昭和63年から、旧三井倶楽部（かつての三井物産の社交倶楽部）を移築するとともに、旧門司税関、旧大阪商船ビルなど船溜まり周辺に残る洋館を保存改修し、駅としては全国唯一の国重要文化財である門司港駅などと一体的

に「門司港レトロ地区」として整備を行った。グラウンドオープン



10周年を迎えた今では、年間300万人を超える観光客が訪れるなど、九州地区の一観光地として定着をみせている。が、整備当初からあった「レトロ地区以外は相変わらずさびしい」「建物だけで飲食・宿泊施設が少ない」「日帰りにはいいけど泊まるなら下関」という評価はなかなか改善されていない。レトロ地区にとどまらない周辺への回遊性・波及効果という点で大きな課題を抱えているのである。

しかしながら、それ以外のエリアに見どころがないかという点を決してそうではない。海沿いのレトロ地区から足を伸ばし、旧市街やかつて門司港

の山手と呼ばれた地区を歩くと昔は料亭や旅館銭湯であった木造建築物や、石垣、鉾津レンガ



塀が続く懐かしいたたずまいが残されている。いささか傾斜のきつい坂道では関門海峡を望む素晴らしい景観に出会うことも出来る。今年の秋に公開される映画『この胸いっぱいの愛を』は過去へのタイムスリップのストーリーだが、その舞台がこの門司である。

昨年、門司区役所のまちづくり推進課に勤務していた私は、仕事柄これらの界隈を日常的に行き来し、心ひかれる場所があると片っ端からデジカメに収めていたが、ある時、観光ボランティアで活躍されている人と一緒に区内の歴史資源を見て回る機会があった。勤め先の山城屋（門司港に唯一あったデパート）の倒産後に観光案内ボランティアを始め、地元の郷土史会とも交わりながら様々な逸話を丹念に集めておられる方である。その方から古い建物や路地、石碑の一つ一つについて丁寧に熱のこもった話を聞いていると、それまでカメラに収めた箇所が一層あざやかな彩りで私の印象に焼き付けられた。物理的な空間にそこで起こった出来事が満たされ、一緒になって私を包み込む感覚。テーマパーク的な雰囲気のあるレトロ地区とは全く違うものだ。

しかし物語であればレトロ地区の洋館群もエピソードには事欠かない。旧三井倶楽部にはインシュタインが宿泊したこともある。そして、そんな逸話を観光客に説明する立派な展示スペースも備えている。であるのになぜか？ 私なりに思うのは、魅力を生み出すためには、建物や界隈という「物理的な空間」、それにプラスする「物語・ストーリー」、さらに加えて「物語を語りかけるまちの人」が必要なのではないか。住む人が自分たちのまちを誇りに思い、まちの魅力を訪れる人に訴えかける。それが観光客を包み込む目に見え

ない力になるのだ。

まちの魅力づくりはハード整備やイベントだけではかなえられない。まちの歴史を探り、その物語を人々に共有してもらうこと、歴史が住む人と訪れる人の架け橋となること。コピーではない本物のまちづくりに歴史は不可欠の要素である。そしてもちろん、コミュニティや区の世界にとどまらず都市圏・地域圏という広域レベルでも、目に見えている現象だけでなく、その地域に脈々として存在する歴史の底流を知り、自分たちもまたその流れにのっていることを意識しなければ、実りのある発展は期待できない。

門司で私が関わった仕事は、郷土史家と協力した「門司の歴史」の発行や、廃校を転用したフィールドワーク施設の整備など、イベント中心のまちづくり推進課にあっては異質なものであったが大きな可能性を感じた1年であった。

だが、残念ながらその取組みは1年で中断となった。今年の4月から法人化した北九州市立大学に配置転換されてしまったのである。そして、経営企画課という部署で法人の中期計画や自己点検評価を担当し、大学の使命や社会貢献といったテーマと向き合うことを余儀なくされている。

そんな日々の仕事のなかで頭に浮かぶのが、文学部についてしばしば語られる「生きる上ですぐに役立つものではない」「実学ではない」「社会ではなく個人の問題」という言葉である。良い意味、悪い意味両方で使われるこれらの言葉、決して無理に変える必要はない。そうでなくとも、今のままの姿で社会がその力を必要とし、助けを求めている分野が必ずある。地域に根ざした大学や国際水準の研究者養成を担う大学、それぞれで事情は違ってこようが、自然体で社会に訴えかける、そのメッセージ力を大切にしたいと思う。

(北九州市立大学職員 西南アジア史学 1994年卒業)

松明を燃やす場所

伊藤 恵美子

イギリスに来て1年が経とうとしている。大学卒業後は、東京で外資系のコンサルティング会社に8年勤めた。会社のカルチャーが性に合って、夢中で働くうちに8年が経った。しかし、これが自分の本当にやりたい事なのかという思いはずっとあり、長く携わった大きなプロジェクトに目処がついたのを機に会社を辞めることにした。人には子供の頃胸に灯した松明を一生持ち続けられる人と、そうでない人がいるということはどこかで聞いた事があるが、その頃の私は自分の松明が何なのかよく分からず、このまま走り続けていたら、何か大事なもの(=松明)を失うだろうという気がしたのだ。そして1年が経ち、イギリスの田舎に移り住んで、のんびりとした時間を過ごす中、自分の松明がおぼろげながら見えてきた。そして、大学時代に学んだ事、考えた事をふと思い出すことが多くなった。

科学哲学科学史専修に属していた私は、卒論のテーマに、環境倫理を選んだ。環境を破壊することが、なぜ「倫理的に」いけないのか、どこまでを倫理の範囲に含めるのか(動物までか植物までか等々)という問いに取り組んだもので、なんとなく今まで恥ずかしいような気がして読み返すことは無かったが、時間が出来て読んでみると意外と面白い。なぜか。一つには、当時自分の興味に従って選んだテーマが、自分の中の松明について真剣に考え始めた今の私にとって面白いと思うことに通じていること。もう一つには、選んだテーマについて様々な文献をあたり、それを元に筋道を立てて(力不足で論理のほころびはあるものの)、一応の結論を導き出す中で、今の私にも役

立つと思える考え方が提示されていること。研究室では、面白いと思うことに誠実に向き合う姿勢、それを論理的にきちんとした根拠を持って明確に論じる基本的な技術を学んだと思う。



研究者の道を選ばないものにとって、大学時代は、過酷な受験勉強と熾烈な社会人生活の間のつかの間の休息期間、特に文学部で学んだことなんて社会では何の役にも立たないと言われたりする。しかし、果たしてそうだろうか。確かに、実務面で大学で学んだことが直接役に立つことは少ない。しかし、哲学などの思考する技術は、会社員時代の経験から言っても、普遍的に役に立つし、巨視的に世の中をみる視点は、大きな強みになる。そして、何より、自由に自分の興味を追求した経験は、道を見失いそうな時に回帰する自分の原点となる。自分が燃やすべき松明を追求し、深め、そして、その後の人生でも消えることの無いよう燃料を与えてくれる豊かな可能性を持った場としての大学。そう考えた時、新しいものを求めて人々が疾走する東京とは対極の、ゆっくりとした時間の流れる京都に位置し、自由と自主を基礎に営々と知の営みを続ける京都大学で、自分の松明と向き合えたことを改めて幸せに思う。思えば、卒論に使った文献の多くは、東福寺の境内で、蟬の声を聞きながら読んだ。図書館で借りた文献の幾つかには、先輩達の書き込みがあった。難しい文章に四苦八苦しながらも、それは過去から未来へ続く大きな流れを心のどこかで感じられる豊かな時間であった。あの時の風景は、単なる過去の思い出としてではなく、もう一度松明を燃やそうとしている自分への大きな励ましとなって、今も心の中に生きている。

(科学哲学科学史 1997年卒業)

歴史を学ぶこと、展覧会を作ること

佐藤 洋子

文学部 100 周年の記念誌という晴れがましい場に何を書かせていただければいいやら、思い悩むうちに締め切りが迫ってきた。大仰なことを書こうと思って未熟者が背伸びをしても仕方がないので、文学部で過ごした日々が今の自分にとってどのような意味を持つのか、この機会に考え直してみることにした。

ともに修士課程に進んだ同学年の仲間たち全員が研究者を志す中、途中で一般企業への就職に進路変更した私は比較的めずらしい例だったろうと思う。たどりついた就職先の新聞社で、文化事業を担当する部署に入って 7 年目になる。国内外の絵画や美術品、考古遺物、歴史資料などを展覧会という形で世間に紹介する仕事だ。

「中堅」と呼ばれる世代にだんだん近づきつつあり、少しずつ仕事も分かってきた最近になってよく感じるのは、展覧会を作り上げる面白さは歴史をひもとく作業に似ている、ということだ。

私が在籍していた当時の西洋史研究室は、学部の同学年が 15 人もいるような過去最大規模の大所帯だったようだ（今も変わらず人気が高いと聞いている）。多種多様な時代・地域をテーマに取り組む大勢の勤勉な先輩方や同期、後輩に常に囲まれていた。振り返れば、怠惰で勉強嫌いだった私でも、ゼミや読書会、日々の雑談を通じて、有史以来の人間の営みがいかに多様性に富んでいるか、またそれらを資料の合間から読み解く作業が

いかに興味尽きないものかを教えてもらえる貴重な時間だったように思う。ウェールズ中世史という「すきま」的テーマを無謀にも選び、参考文献や原文資料と悪戦苦闘する日々を過ごしたが、自分なりの解釈をめぐることで当時の人々の生き様を思い描くことにわくわくする気持ちを覚えたことは今でも思い返される。

展覧会も、きれいなものや珍しいものをただかき集めて面白おかしく並べるのではなく、大切なのは背景にある時代や文化、社会を読み解き、意味を与え、来場者にわかりやすい形で伝えることにある、というのが私の信念だ。土の中から掘り出された遺物からうかがわれる当時の人々の息づかい。一枚の絵が物語る作家の人生の紆余曲折。「もの」が語る声に耳を傾けるのはとても楽しく、刺激に満ちている。大きな収益をあげることや来場者数の記録を作ることも大切なかもしれないが、私にとって一番の醍醐味はやはり、学生時代に味わわせてもらった「人間の営みを読み解く面白さ」にある。展覧会本番はいわば、学会や研究雑誌に代わる私の「成果発表の場」なのだ。

ところでウェールズにはじまった「ブリテン」との縁だが、これまた思いがけなく現在まで続いている。入社して最初の仕事が偶然にも大英博物館のコレクションを紹介する展覧会だったのを機に、同館との仕事を継続的に担当することになったからだ。大学 3 年の夏休みに初めてロンドンを訪れ、数十の展示室をガイドブック片手に歩いた時には再び仕事で訪問するとは思ってもいなかったが、今ではエレベーターやトイレの場所に至るまですっかりおなじみの場所だ。イギリス人の友人の口癖をまねれば、万事は "It's meant to be." なのかもしれない。

（朝日新聞社事業本部文化事業部 西洋史学 1997 年卒業）

京都大学大学院文学研究科での 9年間で振り返って

中尾 裕子

京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻スラブ語学スラブ文学専修の修士課程に私が入学したのは、平成8年の春です。その2年後、博士課程に進学し、研修員、研究生の期間を経て、平成16年度によく課程博士論文を提出し、学位をいただくことができました。この9年の間、私の周辺では多くの物理的な変化が起きましたが、私の中に生じた内面的な変化もまた小さいものではありませんでした。

私が京都大学大学院文学研究科に在学することになったのは、ほとんど運命的だったと言っても過言ではありません。平成7年の秋も深まった頃、私は、同じ京都市内の或る私立大学の4年生で、卒業論文と格闘していました。私の出身大学では、卒業論文を提出することが卒業のための必須条件ではなく、また当時、大学院への進学を志望するものもほんの僅かでした。このようなことから、同学年の学生たちのほとんどが、大学卒業後の就職先も決まり、残り少ない学生生活をいかに謳歌するかということに多くのエネルギーを使っている中で、私は一人、卒業後のビジョンを全く描くことができず、不安と焦りを感じながら孤独な日々を過ごしていました。そんなある日、卒業論文の指導担当であった小林正成先生（京都大学文学研究科のご出身です）から、京都大学の文学研究科に新しくスラブ語学スラブ文学専修が開設されることになったことを聞きました。進学を志望していたものの真に魅力的な大学院を見つけることができずにいた私は、この知らせに大いに喜びました。選抜試験に合格する自信は全くありませんでしたが、聴講生として受け入れてもらうためにも受験すべきだろうと考えて試験に臨んだところ、予想に反して合格通知を受けることがで

きました。この事実は、私の周囲を驚かせ、偉業として賞賛されました。一方、私の心境は複雑でした。努力が報われたという喜びを噛み締めたのは束の間で、私のような凡人が、果たして、秀才と天才の集合体とも思われる京都大学で、落ちこぼれずにやっていけるのだろうかという不安な思いで、忽ち頭がいっぱいになりました。そんな時、私の心的負担を少なからず軽減してくれたのは、友人から聞いた「京大の文学研究科は自由な雰囲気、他大学出身者も京大出身者と同じ扱いをしてくれるから、勉強しやすい」という噂でした。本文学研究科で9年間で過ごした現在、これが単に噂でなく正しい情報であったことを、そして、このような文学研究科の寛大さがあってこそ、私のような者が途中で挫折することなく博士課程を修了することができたのだということを確信しています。

こうして、私は、スラブ語学スラブ文学専修修士課程の第一期生として、京都大学に通うことになったのですが、最初の頃は、キャンパス内のどこにいても、自分の存在が不適切な気がしてなりません。専門用語が飛び交う高レベルの授業、授業内容に関する議論で盛り上がる休憩時間、満席にも関わらず肅として張りつめた雰囲気、図書館や図書室、食堂で一人学術書を読む女子学生たち——これら全ては、私の大学時代には遭遇したことの無いものでした。それまでの4年間を同じ京都で、しかも、同じ大学という名前の場所で過ごしてきた筈ですが、その環境の変化によって私が受けたのは、カルチャーショック以外の何ものでもありません。修士課程1年目は、とにかく授業内容を少しでも多く理解できるように、専門的な知識の貧困さのために恥ずかしい思いをしないようにと必死で、授業のある日はほとんど毎日、閉館まで図書館に残っていました。次第に京都大学の雰囲気にも馴染み、気がつくやうに、生協の食堂で一人論文を読みながら夕食を済ますことが、日常の一部になっていました。学問に関する議論にも少しずつ参加できるようになり、議論の

内容が理解できず劣等感に苛まれるというようなことも少なくなってきました。修士課程2年目に入った時、それまでは、私を含め大学院生2名しか在籍していなかったスラブ語学スラブ文学専修に、2名の修士課程1年生と3名の学部生が加わり、随分活気が出てきました。さらに後期には、専修の研究室が文学部の新しい建物の中にできたこともあり、私にとっての文学研究科は、居心地の良い場所になっていました。学問的な興味が増し、研究を深めたいという思いも強まり、私は、迷わず博士課程への進学を選びました。博士課程の在学中は、いくつかの個人的な問題のために研究はなかなか思い通りには進みませんでしたが、2度目の学会発表を終え、学術雑誌に投稿した論文が初めて採用された時には、自分に自信が持てるようになっていました。その後、研修員、研究生と立場は変わったもののそれまでと同様に文学研究科でお世話になっている間に、2本の論文を発表することができ、京都大学大学院で学んだ学問的成果の総括として、念願であった博士論文を書き上げることができました。

京都大学大学院文学研究科での9年の間に、私は実に多くを学びました。その中でも、学問をすることの楽しさとその意味、劣等感や孤独からくる苦しみとそれに打ち勝った時の喜びを知るこ

とができたことは、現在、自分の中に一定の自尊心と余裕を見いだすことができることと決して無関係ではありません。この9年間に学んだことは、今後もさらに私の人生を豊かにし続けてくれるでしょう。京都大学大学院文学研究科に在籍することができたという運命の巡り合わせに感謝し、その博士課程を修了できたということに、誇りを持って生きていきたいと思えます。

本文学研究科に在籍中は、多くの方にお世話になりました。一番お手数をおかけしたのは、やはり、指導教官の佐藤昭裕先生です。無学で頼りなかった私を快く受け入れ、時には厳しく、しかし懇切丁寧な指導で博士課程修了まで導いて下さった佐藤先生には、感謝をしてもしきれません。また、言語学専修の諸先生には、しばしば貴重なご助言を頂きました。スラブ語学スラブ文学専修および言語学専修の(元)院生および(元)学部生の皆様には、様々な視点からの助言を貰い、各自の研究に対する真剣な態度から、良い刺激を受けました。

事務の方々にもお世話になりました。つい先日も、修士課程と博士課程両方の成績証明書が緊急に必要な際、教務掛の方のご配慮で、わずか数時間で受け取ることができました。親切で迅速な対応に感謝しています。

(スラブ語学スラブ文学 1998年修士修了)

京都大学文学部で学んで

中村 良平

京都といえば、幾多の思い出が詰まった、他のどこにも代わることができない、かけがえのない街。現在は、生まれ育った京都から関東に居を移しているが、それでも、休暇などで京都に戻ると、その過去の思い出が蘇ってくるとともに、まるで旅行を終えて自宅に戻ってきたときのように、「やはりここが自分にとって一番の場所だ。ここが自分の街なのだ。」という気持ちになる。京都が私にとってそのような街になったのは、生まれ育った土地だからというだけでなく、京都大学の学生として過ごした6年間によるところが大きいと思っている。

在学中は言語学を専攻し、学部時代から修士課程修了までアイスランド語を専門に取り組んだ。アイスランド語を専門とすることを決意したのは学部3年の後半だったと記憶している。いま思えば、無計画な決断だったと思う。この時点では、アイスランドに行ったこともなく、アイスランド語など本で触れただけであったし、また、アイスランド語を専門とする人も、アイスランド人の知り合いも周りにいなかった。一言で言えば、アイスランド語を勉強・研究するのに必要なものが全く足りなかった。しかし、アイスランド語を専門としたい旨を先生方に伝えるやいなや、先生のアイスランド人のお知り合いを紹介していただいた。また、現地でのアイスランド語夏季講座も先生か

らの紹介で参加させていただいた。その他数え切れないほどの指導とサポートをいただいた結果、最後には何とか修士論文を書くまでに至った。当初は何の用意もなく、ただ興味があるからというだけで研究を始めた学生に、言語学の知識、研究手法を教授していただくだけでなく、個別言語を学ぶための手助けまでいただき、自分は本当に手が焼ける学生だっただろうと、今になって思う。逆に言えば、ゼロからこうしてアイスランド語に取り組むことができたのは、学生の希望を曲げず受け入れてくれる京都大学文学部の自由な気風と、そのもとで手間を惜しまず指導してくださった先生方、諸先輩方のおかげである。

今では言語の研究から離れて、システムエンジニアとして一民間企業で働く身となったが、それでもなお、書店に行くと言語学の本や雑誌を手にとってしまう癖が抜けない。ふと、お世話になった先生方や諸先輩方の名前を見かけて、そういった方々を身近にして学生生活を送れたことを誇らしく実感することも多い。それに加えて、これからは同期や後輩の名前を見る機会も増えるのだと思うと、楽しみで仕方がない。現在、あるいは将来、各分野で活躍される人たちと同じ空気のなかで学生生活を送ることができるというのも、京都大学ならではの強さであると思う。

最後になりましたが、京都大学文学部が創立100周年を迎えられますこと、卒業生の一人として、大変喜ばしく思います。これからも、京都大学文学部が、人文研究を最先端でリードする研究・教育拠点であり続けるよう、お祈り申し上げます。

(日本ユニシス 言語学 2001年卒業)

わからないことがわかるとはどういうことか

西村 健

今わたしは単行本の編集者として本をつくる仕事をしています。本の編集にはいろんなスタンスがあると思いますが、私は編集者とは不偏不党でなければいけないと思っています。たとえば、今日は東の保守の重鎮と首相の靖国参拝を訴えたかと思うと、明日は西の左翼の先鋭と憲法9条死守を叫ぶ、といった塩梅です。おしかりを受けるかも知れませんが、ようはおもしろい本、売れる本、新しい価値観を提示する本をつくることができればそれでいいと考えております。

わたしがこんなふうにわりきって日々の編集活動を行っているのも、師事しました池田秀三先生のある一言に強い影響を受けたからです。その一言とは、「学問とは、この世に絶対の真理などひとつもない、ということがわかるためにするものだ」というものです。池田先生は、「十三経」を絶対の真理として展開されるいわゆる「経学」を修められた方です。その方のお言葉だけによけいに印象に残っております。

学問とは真理を究明するために行うこと、それは大前提なのですが、ではこの世に真理といえるものが何かありましようや。デカルトが「われ思う、ゆえに我あり」と言ったいっぽうで、ブッダは「色即是空、空即是色」と言っているのです。とはいえ、ひとくちに「わからない」といっても「わからない」のレベルがあるわけで、3歳の童子の「わからない」と、道教研究の碩学麥谷邦夫先生の口ぐせ「これはまあ、結局のところよくわかりませんなあ」とは「わからない」のレベルが違い

ます。そういえば中国科学史の武田時昌先生にいたってはそもそも講義の結論がよくわかりませんで、と申しますのは先生は講義の結論をだいたい次週に先



延ばしされるのですがいざ次週になると「前はこういうところで終わって、今日はそのつづきをやろうと思ってるんだけどまずその前に……」と結構違う話題がはじまって、その日の講義はその新たな内容でぜんぶ終わってしまうというのがしばしばだったのです。（ただ授業の内容はめっちゃくちゃ面白かったのですが。）

ということで私が中国哲学史で学んだことは「学問とは『わからない』ことを研究すること」だったのですが、さらに正確に言うならば「わからない」という言葉を使うことの厳粛さを学んだと言えましようか。何かひとつのことをひたすらひたすら調べつくして、はじめて「わからない」という言葉を使う資格があるのです。

中国哲学の勉強は、とにかく「原文にあたる」という作業でした。原文を読み、出典に当たる。大漢和辞典に掲載されているのはしよせん孫引きであってそれこそ真理ではないので、辞典類ではなくあくまでオリジナルに当たらないといけないのです。さらには原文が書かれたころの社会背景、書き手の立場までを鑑み、ひとつの答えらしきものを見出す。本物を、本物を使って分析することの大切さはいまも痛感しています。というのも、いまわたしには全くわからないことがあるからです。果たして、本当におもしろい本は、どうすればつくることができるのでしょうか？ というところで、文学部の諸先生方、是非ともお力添えよろしくお願い申し上げます。

(PHP 研究所出版部 中国哲学史 2001年卒業)

新しい生命論の機軸を求めて

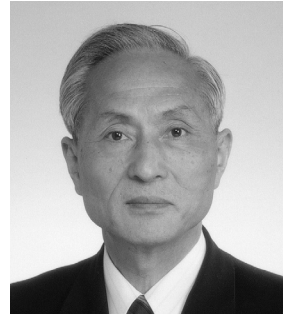
岡田 安弘

私は長年神戸大学医学部で生命のことわりとからくりを追求する生理学（生命科学）と脳神経科学を教えてきたが、退官後、京都大学大学院文学研究科の藤田正勝教授のご理解を得て、大学院に入学した。現在日本哲学史研究室の院生（D3）として、西谷啓治の「科学と宗教」や「空」の問題と取り組んでいる。そこで西田や田辺、西谷、和辻、九鬼を研究している若い人達にまじって研究できることを有難く思っている。

人にはよく「退官されて哲学の勉強などいい趣味ですね」といわれるが、私にとっては趣味というようなものではなく、古代ギリシャの哲学者の多くが医師であったように、医学することと、哲学することは同次元のことだと思っている。

私が医学生であった頃、「西と東をつなぐもの——神（実体）、ニヒリズム（無）、仏教（空）」という小冊子を自費出版したことがあった。当時医学部一般教養の哲学の先生が西谷門下の斎藤義一先生で、西谷先生のお話を時々お聞きしていたこともあって、その冊子を西谷先生にお送りしてご批判を仰いだことがあった（今にして思えば、大変失礼なことをしたと反省しているのであるが）。西谷先生は一面識もない私の文章を読んでくださり、スピノザなどに対する先生のコメントを添えてお励ましの言葉を頂き、その冊子と一緒に掲載していたスイス人の「我らの時代」という英文の日本語訳の誤訳の部分まで指摘してくださって、感激したことがあった。それをきっかけに、ちょうどその頃初版として出版された西谷先生の『ニヒリズム』や『宗教とは何か』を自分なりに読んできたことが、今日私が生命や科学と宗教の問題を考える上の基礎になっていると思う。一昨年私の修士論文「西谷啓治における‘宗教と

科学’の現代的意義」をまとめる際に、もう一度真剣に『宗教とは何か』を読ませていただいたのも何かの縁であるような気がしてならない。



私は中学、高校時代から「生命とは何か」という問題に興味を抱いていた。医学部を目指したのもその理由であったかもしれない。その後私は長年にわたって「生命」を物質として生物学的側面からアプローチしてきた。最近では分子生物学の進歩によって、生命のはたらきの機序が明らかにされるとともに、生命が、まさしく物質のあり方であるという考えが強調され、脳死と臓器移植や遺伝子操作、クローン人間など生命倫理の問題に深刻な影を投げかけている。

しかしよく考えてみると、生命に関して現代科学が明らかにする様々の事実は、入試テストの問題で括弧の中に正解の文字を下から選んで入れよということに似ていて、物質と物質の相互関係は明らかにされても、生命全体の意味は明らかにされず、生命とは何かの問いは答えられないままである。つまり科学が明らかにできるのは事実性、確実性であって真理性ではない。にもかかわらず、この科学万能ともいえる時代の風潮のなかで、科学者や多くの人は科学で明らかになることは全て真理性そのものであるかのような錯覚に陥っているのではなからうか。最近、自然科学の著しい進歩を踏まえた科学者の大きな声に比して、ものの意味と真理性を求める哲学者の声があまりにも小さいと感ずるのは私のみであらうか。生命倫理の問題にしても、哲学者からのもっと積極的な発言が必要とされているのではなからうか。

西洋では生命の問題に関しては、デカルトの物質と精神の二元論以来300年にわたって、機械論と生氣論の論争が繰り返されてきた。この二元論がひきおこしてきた理論的困難について、多くの哲学者たちもその論争の中に加わってきた。

ベルクソンの「生の哲学」も「物質と記憶」におけるイマージュも、それを克服しようとする努力の一つであったであろう。そして現代はそれを超えるものとして有機体論、システム論が生命論の主流を占めつつあるが、その有機体論もなかなか機械論の延長にしかすぎない。

一方、西田幾多郎が日記に「余は life の研究者とならん」と記しているように、さらにまた古くからの「心身脱落」という言葉が語るように、生命や心身の問題は日本の宗教家や哲学者にとっても一大事の問題であった。西田が純粹経験から自覚や場所へ、そして絶対無や行為的直観、絶対矛盾的自己同一を論ずる時、常にその背景には「生命」の問題が意識されているように思われる。また西谷が宗教や罪、「空」を論ずる時にも、そこには常に「生命」の問題があるように思われる。そこでの特徴は「主客合一」の言葉が示すように、主や客の分かれる以前の状態から生命を見直すことであり、西洋の哲学者における二元論を超える立場とは基本的に異なっているように思われる。私が高興を抱いているのは、まさにこの点である。

確かに私自身、生命や脳のはたらきの機序について長年にわたって物質機械論の立場から研究してきたし、その結果は妥当なものだと思っている。また目をみはるような科学技術の進歩が明らかにする生命のからくりには驚嘆を覚える。しかしながら、今私たちに求められているのは、それらの諸事実の羅列ではなく、それらすべてを包むような新しい生命論の機軸ではないだろうか。その機軸がない限り、生命倫理の問題も功利主義の cost-benefit に基づいたその場だけの倫理に終わってしまうように思う。

その生命論の機軸を求めて、私は西田を中心とした「生命哲学」や西谷の「宗教哲学」をさらに深く勉強したいと思っている。私にとっては夢のような話ではあるが、哲学者のガダマーや生物学者のマイアが高齢になってもなお現役として発言していたように、今後私も生命や科学、宗教の問題について何らかの発言と貢献をしたいと願っている。そのために私が文学研究科で勉強させてもらっている意味はきわめて大きい。

(神戸大学名誉教授 日本哲学史 2003年修士修了)

書庫の中で先達を思う

加藤 尚武

京都大学に私が赴任した当時の文学部の書庫は、木造の高層建築物で、中の階段が急で、歩くときぐらぐらゆれたりした。「危険な建築物ですから、長時間の滞在は避けたほうがいいですよ」と忠告してくれた人もいた。中にある本の配列が、私のような新参者にはとても分かりにくく、藺田坦先生や、木曾好能先生が「その本やったら、二階の北東の隅から4、5冊目にある」などとそろそろ怖いことを話しておられるのを聞いて、この資料群を征服するのは、在職期間が7年と限られている自分には不可能ではないかと思っていた。

新しい書庫ができて状況は一変した。必要な本がコンピュータで検索できるようになったので書庫に長居をする必要はなくなったのだが、ときどき不必要な書庫内の探検を行うことができた。

田辺元の蔵書でほとんどすべての書物に綿密な書き込みがしてあるのには、圧倒された。分けてもブーレ (Johann Gottlieb Buhle 1763-1821) の近代哲学史 (Geschichte der neuern Philosophie) の全巻を丁寧に読んであることには驚嘆した。

ブーレの「近代哲学史」はヘーゲルが哲学史を講義するとき、最もよく利用したと思われる資料で、たとえば第一巻の冒頭が「セクストゥス・エンペリクスにいたるまでのギリシャ哲学の概観」という記述になっていて、「近代」に限定された記述ではない。田辺元は、ヘーゲルの哲学史の資料として用いられたからという理由でブーレを選んだのではなくて、一般的な意味で哲学史の勉強をするために読んだのではないかと思う。

西田幾多郎の手沢本も開いてみたことがあるが、ところどころに薄い鉛筆の線が引いてあるだけで、熱心に読んだ跡は見られなかった。思索と読書とのバランスという点で、西田は思索に傾き、田辺

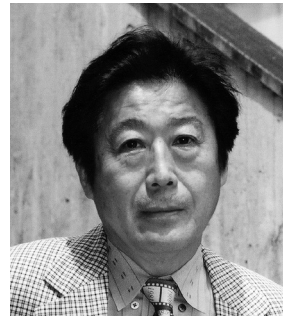
は読書に傾いていたのではないかなどと思いをめぐらせた。

いずれにせよ、彼らの目の前に立っていたものは西洋哲学であって、それはギリシャからヘーゲルにいたるまで、営々と先行者を後続者が乗り越えて進み続けた歴史の集積という形をとっていたのだろう。実は、そういう西洋哲学史像を作り出したのがヘーゲルであって、哲学史の記述に「先行者を止揚した結果の累積」という形を与えることが、現在という時間のなかに絶対的なものの真実を読み取ることができるという信念を支えるために必要であったのだと思う。

ハイデガーは、「解釈学的破壊」という名の営みで、そうした西洋哲学の累積の中から根源へと朔行するという形で、西洋哲学史の全体を否定しようとしたのだが、その否定の遂行もまた、哲学史という形をとらざるをえない。デリダの脱構築＝ポスト・モダンも、「解釈学的破壊」と同じことを述べている。

哲学が文化の全体を集約し、その哲学を哲学史が集約するという見方のどこが間違っているか。ベルリン大学を創設した人々の心には「哲学が文化の全体を集約」というイメージがあまりにも強烈で、ベルリン大学とともに講壇哲学の時代になると、哲学という学科目が維持されていけば、そこに文化の全体の集約点が見られるという虚像が一人で歩き始めた。

西田や田辺が、西洋哲学という壁を越えようとしたのとは、まったく違う形で、西洋哲学という壁に私は向かい合っている。それが私にとっては応用倫理学の展開という課題なのだ。哲学は、学問の理念を集約しているから、哲学のなかにすべての学問のあるべき姿が見られると、講壇哲学は信じていた。今ではだれもそのような意味で、哲学がすべての学問を集約するとは思っていない。逆に、いったん応用の場面に下りて、持続可能性



という概念を基軸にすえて見れば、経済学も、法学も、政治学も、みな講壇化して、破綻していることが見えてくる。そういう学問批判にこそ哲学の課題があるのではないだろうか。

西田や田辺とは、西洋哲学の重みの受け止め方

が違って来た。私の研究領域で言うと、ドイツ観念論という哲学のあり方それ自体を、どう克服するかという問題が避けられない。その思索に行き詰まったときには、もういっぺん書庫に戻って、彼らの手沢本を手にとって思いを深めたいと思う。

(京都大学名誉教授 2001年退官)

「二十世紀学」とパリ講

柏倉 康夫

2005年9月初め、東京の渋谷で「二十世紀学」の卒業生の集まりがあった。この日は衆議院選挙の投票日前日で、渋谷駅前には「最後のお願い」を連呼する候補者たちの絶叫で喧騒をきわめていた。そんな中、懐かしい顔が集まった。「二十世紀学」の同窓会をきちんと組織しようという杉本淑彦先生の肝いりで持たれた会合で、東京在住者に加えて杉本先生ご自身も京都からお出掛けくださったのである。「二十世紀学」は開講して早や10年、卒業生も80名を越え、現役の人たちを加えれば百名を数える大所帯となった。

私が京都大学に赴任して文学部・文学研究科に「二十世紀学」の講座を開設したのが平成8年。そのときから退官するまでの6年間、「二十世紀学」に席をおいた者が必ず参加した演習が、「パリ講和会議の議事録を読む」である。通称「パリ講」は、第一次大戦が終わった1919年1月から、パリで開かれた講和会議の記録を通して、二十世紀の世界秩序がいかなる議論をへて形成されたかを、文献を精読しつつ検証する場であった。演習に用いたテキストは、Arthur S. Link, ed., *The Deliberations of the Council of Four I, II* (Princeton U.P.) で、二千ページ越える大著である。

パリ講和会議をリードしたのは大戦に勝利した五大国の代表だったが、間もなく意見を述べない日本が除外され、領土問題にのみ固執するイタリアのオランダ首相にも声がかからなくなり、会議はアメリカのウィルソン大統領、フランスのクレマンソー首相、イギリス首相ロイド・ジョージの三人の間の議論でことが決することになった。議事録は会議の通訳にあたった英国通のフランス人学者ポール・マントゥー (Paul Mantoux) が、

その日あった首脳同士のやりとりを毎晩克明に記録したものである。私はかつて取材で訪れたフランス外務省の図書室でフランス語の原本をみつけて利用した経験があり、その後プリンストンの歴史学者リンクが、これを英訳したのを期に、テキストに使ったのであった。



学生の多くは外交文書を読むのは初めてで最初はとまどったが、敗戦国ドイツの処遇、賠償問題、領土の分割、ウィルソンが提唱した国際連盟の創設など山積する課題について、各首脳が丁々発止やりあう件になると、ゼミの参加者は発言の真意やその背景に興味をもって調べるようになった。週一回の演習には、「二十世紀学」、「現代史学」の学生に加えて、経済学部の大学院生や、一年間京都に住んで、「二十世紀学」の聴講生となったご婦人も参加した。なかには当時のウクライナの状態を示す数百枚の英文資料を、インターネットを通して入手して皆を驚かせた学生もいた。毎回提出されるレポートは6年間で膨大な量になり、新年度に参加する新人たちの参考にされた。

私たちは「パリ講」を通して絆を強める一方、よく遊びもした。貴船や奈良の明日香への小旅行、鴨川の川原でのチーズ・パーティー、わが家にもよく集まって遅くまで酒を酌み交わした。20人以上が参集したある夜、普段見かけない女性の顔があり、聞いてみると同志社の学生だという。今夜ここで飲み会があるというメールが入ったから来てみたということだった。思いがけぬ珍客は大歓迎された。ただ困ったのは翌日である。ご近所の方から、「昨夜はおにぎやかどしたな。お若い方はよろしおすな」と言われて恐縮した。

こうした一つ一つが、京大で過した年月のかけがえのない思い出となっている。

(放送大学副学長・元京都大学教授 2002年退官)